

研究紀要

— 13 —

目 次

群馬県の土偶

——その変遷と地域的様相——

.....藤巻幸男・石坂 茂 (1)

紋様を剝がされた土器

——縄紋時代中期の土器廃絶例について——

.....土肥 孝・中東耕志・山口逸弘 (4)

首長墓成立の一背景

——群馬県前橋市、今井神社古墳とその周辺集落の動向——

.....坂口 一 (7)

紡錘車の基礎研究(1)

——群馬県を中心として——

.....中沢 悟 (8)

群馬県に於ける出土人歯の咬耗状況に就いて

——室町・江戸時代人の永久歯を中心として——

.....石守 晃 (12)

1996・3

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

正誤表

箇所	誤	正
表紙タイトル	群馬県の土偶	群馬県出土の土偶

資料	群馬県埋蔵文化財調査会	01-250
	平塚市史跡調査課	6
No. 96-1868	平成 8 年 8 月 8 日	13 (5)

研究紀要

—— 13 ——

1996・3

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



房谷戸遺跡125号出土土器
 (下段：口縁部紋様帯の突起欠損部)

群馬県出土の土偶

——その変遷と地域的様相——

藤 巻 幸 男・石 坂 茂

1 はじめに

近年における縄文時代の土偶研究は、数多くの研究論文の発表に象徴されるように、従来にも増して活況を呈してきている。そして、これらの論考を通じて、これまで不明瞭であった各地域の土偶の出土状況の把握や形式・型式の抽出、その時間的位置や変遷過程および各地域間を横断しての系統関係の把握等が試みられ、その実態もかなり鮮明になってきていると言えよう。こうした研究動向の背景の一つには、「土偶とその情報」研究会による全国的な土偶情報のデータベース化と、それに付随したシンポジウム等の研究活動があり、これらが少なからず寄与しているものと思われる。

一方、群馬県内では、板倉遺跡の遮光器系土偶や郷原遺跡のハート形土偶などの学史的に著名な土偶が早くより知られていたが、それ以外には量的にまとまって出土する事例に乏しいことや、個体数量そのものが僅少なこともあり、これまでに外山和夫氏や能登健氏らによりそれら土偶の幾つかが論考の俎上に乗せられたに過ぎない。しかし、最近では後・晩期の遺跡を中心にかなり多くの出土事例が報告されるようになり、県内における土偶の様相もある程度見通すことが可能な状況となってきている。現在筆者らは、これらの土偶について集成作業を行っている所であるが、その全体的な様相はこれまでの各論考により明らかにされてきたことと大筋において合致しているものの、他地域とは異なった土偶の存在も認められる。各時期を通観するには資料的に充分とは言えないが、その中から特徴的なものを抽出し、県内の土偶の変遷過程やその地域的様相について考えてみたいと思う。

2 土偶の分布と出土状況

群馬県内では、現在のところ80遺跡から507点の土偶の出土が確認されている⁽³⁾。この内、時期の判別できるものの内訳は、前期が9遺跡から15点、中期が6遺跡から11点、後期が51遺跡から236点、晩期が24遺跡から136点である。後・晩期が主体となっている点は関東地方の一般的傾向と符合しているが、前期が中期をかなり上回る傾向にあることは注目される。県内での土偶の初現期は、現在のところ前期後半の諸磯b式期であり、8遺跡から13点とその出土例も多い。続く諸磯c式期は1遺跡2例とその数を減らし、その後の前期末から中期中葉までの間は出土例が見られない。そして、中期中葉から後葉にかけて再び土偶は散見されるようになるが、いずれも他地域の形式が断片的に出土しているに過ぎず、中期における当地域は土偶を使用しての祭祀行為が低調であったと考えられる。土偶の使用が本格的に再開されるのは後期に入ってからである。後期



図1 群馬県の土偶出土遺跡の分布

前半ではハート形・筒形など複数の形式が併存し、1遺跡で複数の形式を保有する例は10遺跡に認められる。そして、山形土偶が出現する後期後半期には土偶保有量のピークを迎え、山形土偶だけでも29遺跡から126点が検出されている。1遺跡で多量の土偶が検出されるのも当該期以降であり、多量保有する遺跡は晩期まで継続するものが多い。

ところで、土偶の出現期にあたる前期後半は、県内で遺跡数が急増する時期にあたっており、また集中的居住による大規模(長期継続的)集落が出現する時期でもある。しかも、土偶とともに縄文呪術の双壁をなす石棒も、県内ではこの時期に出現している。これらの事実は、土偶使用の契機を考える上で、一つの材料となるであろう。しかし、前期後半の住居が98軒確認された昭和

表1 土偶出土遺跡の一覧

番号	遺 跡 名	経 度	中 央 部										東 部										図 番 号	備 考 (土器出土状況等)	文 献		
			阿 玉	舞 坂	加 藤	平 田	飯 沢	山 形	本 郷	千 代	山 形	大 塚	渡 辺	1 丁	山 形	千 代											
1	北浦(仮)	1																									2
2	山下(仮)	1																									2
3	横田	1																									36
4	横田	1																									9・13・16・30
5	溝水	4																									35・58
6	松本大台	1																									
7	黒山原	1																									
8	横谷	2																									2・13・25・34
9	押出	3																									48
10	茅野	16																									73
11	下新井	10																									73
12	行間田 ▲	4																									44・57
13	下新井	1	1																								75
14	天神原	66	1																								18・32・64
15	中野谷松原▲	4	4																								
16	白川(仮)	1																									23
17	八幡山	1	1																								30・33
18	大平山	6																									74
19	下松野	1																									79
20	本原(仮)	1																									30・33
21	大平中原	1																									79
22	徳光寺 ▲	5																									
23	下新井 ▲	1																									68
24	寺山	1																									47
25	内匠上ノ原	4																									6・30・33・81
26	白鹿下原	1																									
27	赤田(仮)	1																									33
28	横(仮)	1																									22
29	黒田原	2	2																								39・65
30	横田(仮)	1																									30・33
31	神保	8																									47
32	横川(仮)	1																									24
33	谷地	15	1																								34・40・52・53
34	北山	4																									56
35	山間	11																									49
36	中郷	1																									31・30・33
37	保良山(仮)	1																									39
38	横原	3																									31
39	和泉	1																									61
40	和泉 ▲	30																									62
41	横沢	13																									4・69・66
42	倉前	1																									1
43	中村(仮)	1																									17
44	小南神社(仮)	1																									6
45	赤井(仮)	1																									30
46	横田(仮)	2																									14・33
47	宮ノ前(仮)	1																									4
48	六方(仮)	1																									12
49	横原沢(仮)	1																									12・30
50	横沢	1																									13
51	新中後目	2																									63
52	北池橋	1	1																								60
53	天神	1																									62
54	八光	1																									12
55	大田	20																									75・76
56	上川久保	1																									26・35
57	北浦	1																									37
58	五日半原山	3																									29
59	五日半原山	1																									62
60	宮通・新	2																									31

番号	遺 跡 名	距離	中 期										後 期										図 番	備 考 (土器出土状況等)	文 献		
			阿	玉	土	器	土	器	土	器	土	器	土	器	土	器	土	器	土	器							
41	城	3	3																				1~3		41・54		
42	新堀(部)	1																						121		23	
43	南原(部)	2																						62		41	
44	神社裏	1	1																					28・30・43	長井・柳・青子氏のご教示。	45	
45	曲井	3																								平田寛正氏のご教示。	
46	三和工務店跡	1																								50	
47	石之塔	30																						14	96・103・109・126・127・134・137・139		
48	北東側	1																							66		63
49	本郷(部)	1																							26		8
50	小町田	1																							40		39
51	相の原(部)	1																									5
52	矢島	29																							112~115・122・124・125		72・80
53	大塚遺跡	2																									64
54	土ノ前	1																									62
55	谷田(部)	1																									20
56	飯倉	4																							2	12・13・15	33・62・66
57	三島台	1																							10	伊藤隆雄・佐田浩二氏のご教示。	
58	千網谷戸 ▲	83																							11	22・23・27・28・31・43・51・92・108・114・117・132・133・142	18・27・28・43・52
59	大門	1																									20
60	五科目 ▲	4																							14	中野浩二氏のご教示。	89
計		267	15	2	7	2	24	23	7	227	4	50	9	16	10	3	2								66	時期・距離不明110	

■ 遺跡名後記に(部)を有するものは、本誌で付した仮称である。また、図番に▲印を有するものは、本調査のために正確な形式分類や出土品数が把握できていないことを示す。

■ 後・晩期土器の「その他」の分類項目は、各項目に該当しない形式や識別不能なものも含んでいる。

(4)

村系井宮前遺跡の大規模集落では、土偶は検出されていない。ほぼ全面発掘された中期の大規模集落である赤城村三原田遺跡でも、土偶の出土はなかった。このことは、前・中期では土偶が必ずしも大規模集落に保有されていた訳ではないことを示していると言える。ところが、後・晩期では若干様相が異なっている。県内で土偶を30点以上出土した遺跡として、桐生市千網谷戸遺跡(Na78)、藤岡市谷地遺跡(Na33)、安中市天神原遺跡(Na14)、月夜野町矢瀬遺跡(Na40)、藪塚本町石之塔遺跡(Na67)等が上げられる。これらの遺跡の共通点は、中期に見られるほどの規模ではないものの、配石墓を中心とした集落構造をもち、後期から晩期にわたって長期間継続する拠点的な集落遺跡であること、そして耳飾りを初めとした装身具や石剣・石棒・石冠等の呪術具の出土量が多いことにある。その点では、小規模な調査にとどまった榛東村茅野遺跡(Na10)や明和村矢島遺跡(Na72)も、これらに含めて良いだろう。つまり、後・晩期では他時期に比べて多量の土偶を保有する遺跡例が増加するが、その背景には配石墓や呪術具等に象徴される呪術・祭祀的文化の高揚があり、それと連動する形で土偶祭祀が受容され活発化していること、それにかなり長期にわたる集中的居住が土偶数量の累積をもたらしていることが窺えるのである。晩期の土偶は細片が多く、形式分類や時期比定は容易ではないが、終末段階までは確実に土偶が存在しており、藤岡市沖II遺跡(Na31)では荒海式期の土偶が確認されている。

一方、県内の遺跡における土偶の出土状況については、既に能登健氏の分析がある。能登氏はまず、各時期の土偶を出土する遺跡は、一般的な立地を示す通常の遺跡であることを検証したうえで、前期後半の城遺跡、後・晩期では深沢、千網谷戸、谷地の各遺跡を取りあげ、住居や配石墓においてはその埋没土中から他の遺物とともに混在して出土していること、遺物包含層におい

でも土器や石器などの一般的な遺物と何ら異なった扱いが見い出せないことを指摘している⁽⁶⁾。今回あらためて、その出土状況について調査したところ、住居出土例が8遺跡で17点、配石墓を含む配石遺構出土例が4遺跡で17点、土坑出土例が6遺跡で7点の遺構出土事例を確認した。住居例では、床面出土とされるものが4例、炉内出土が1例あり、他は全て埋没土中から土器等と混在した状態で出土している。床面出土例は高崎市大平台遺跡(Na18)、赤堀町五目牛洞山遺跡(Na58)、榛東村下新井遺跡(Na11)、桐生市大門遺跡(Na79)での各1例である。この内の大平台遺跡例は後期のハート形土偶を出土するが、住居の時期は中期の加曾利3式期で明らかに混在である。五目牛洞山遺跡例と大門遺跡例は、ともに住居の遺存状態が悪くその出土状況も不明瞭であるが、少なくとも床面上に安置されていた状況は認め難い。炉内出土の榛東村下新井遺跡例は、まだ正式な報告がなされていないために詳細不明である。天神原遺跡や月夜野町深沢遺跡(Na41)等の配石遺構からの出土例は、いずれも破片あるいは大きく欠損した状態で埋没土中から出土しており、やはり遺構との有機的な関係を想定できる例は見当たらない。土坑出土例もその大半が先例と同様であるが、千網谷戸遺跡では遮光器系の中空土偶が浅い掘り込み内部から出土している。掘り込みの縁辺には大小の礫が数個あり、山梨県中谷遺跡⁽⁷⁾の土偶を出土した配石例に類似している。土偶は片手と両足を欠失した状態で、その縁辺寄りに横たわって出土しており、体部の遺存率が高いという点でも中谷遺跡例と共通する。

このような事例が今後増加すれば、土偶の使用方を示す一例として具体的な解釈が可能となるであろう。しかし、これまでの調査では大半の土偶が他の遺物とともに混在した状態で出土しており、特定の遺構との関係や特殊な出土状況を見いだすことは難しく、今のところ能登氏の見解に変更を加える必要性は生じていない。

3 各時期の土偶の特徴

群馬県では現在のところ前期から晩期にかけての土偶が確認されている。ここでは管見にふれた507個体の土偶の中から、残存状態が比較的良好で全体形状や顔面表現、体部文様等の判別が可能なものを選出し、県内における各期土偶の特徴について概述していきたい。

(1) 前期(1～9)

1・4を除いた他の7点の全てが欠損品であるために、個別の詳細な特徴を把握することは難しいが、形態的には三角形(1)とバイオリン形(2～9)の2種類を認めることができる。基本的にいずれも非自立の板状形式で、バイオリン形を主体とした体部に頭部および横方向に延びる短い腕部が付くが、脚部は付されない。また、胸部が残存するもの(3～6・9)全てに小さな円形貼付の乳房が認められることから、乳房表現も基本的な特徴の一つと考えられる。顔面表現は全く無いか、あるいはあっても刺突孔による稚拙なもので、体部装飾のないものや丁寧な整形と軽い研磨が施されているものが多い。2・8は体部上半を、3・7は腹部以下を、5・6は頭部と腹部以下を、9は頭部を欠失している。

1は長さが3cmに満たない小形品で、三角形のプロポーションが特徴的である。また横にのばした腕部を除き、山形状の頭部や顔面表現を思わせる1点の刺突、それに下方にわずかに舌状に張り出す体部表現などは、他の土偶とは大きく異なる。3には体部と一体で作出された方形の頭部に刺突による円孔眼部や、やや上方に突き出した腕部の表現が見られる。4も3と同様の主頭状頭部をもつが、顔の表現はない。5は横に伸びる両腕が6・9に類似し、両乳房の先端部は欠落する。6の顔面部は、やや前方に突出するように作出されることが欠損部の状況から観察でき、3・4とは表現方法が異なる。腹部の円形刺突は、臍の表現であろう。7は上端の周縁に沿って貫通孔が4個存在するが、配置的には5個付されていたと思われる。また、明瞭な頭部や腕部が作出されず、形態的には肩部と一体化した瓢形のプロポーションを有すると考えられる。8は表裏に半截竹管による集合沈線で文様が構成される。9は頭部が欠失するが、そのプロポーションは4とともに当該期の特徴を良く示している。

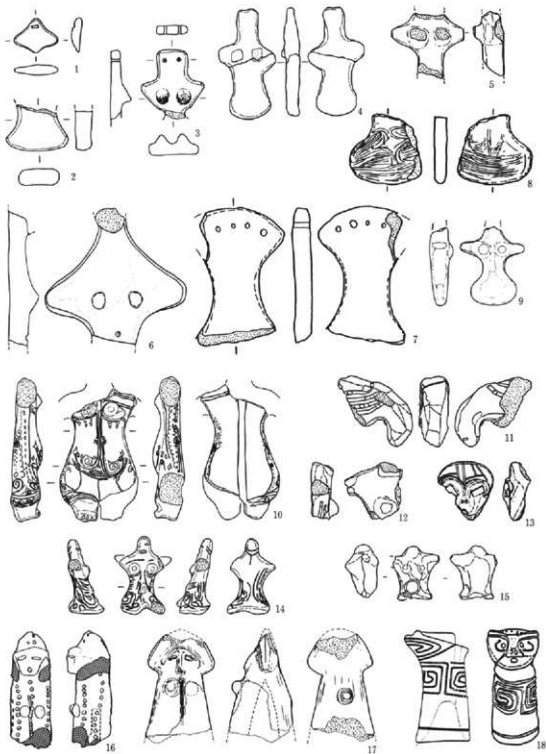
(2) 中期(10~15)

現在のところ中葉～後葉段階の11例が知られるのみである。縄文時代の全時期を通じて、集落規模やその数量がともに最大となる中で土偶検出例の少なさは、当地域の中期における土偶を用いた呪術的行為が極めて貧弱であったことを物語っている。

10は頭部と両腕・片足を欠失するが、明瞭に五体が表現されたやや大形の土偶である。パイオリン形の体部に前期土偶との類似性が窺えるが、腹部のふくらみや脚部表現に大きな違いがある。短い脚部には指の表現も加えられているものの、自立できる安定性は備えていない。作りはいたって丁寧で、側縁部・下腹部・胸部を中心に、細沈線で精緻な文様が施される。文様は渦巻文と矩形状の剣先文が主体であり、表裏面に施された正中線と肩部の横位沈線、それに腹部の沈線による対称弧刻文などが特徴的である。11・12は角押文を有するやや厚みのある板状土偶の体・腕部破片で、11は肩部の表裏に3条を、12は体部側面に2条を施す。11は無で肩から短い腕部が垂下するが、12もこれに近い形態であろう。13は眉と鼻を一体化した弧状の隆線で表現し、額部に2単位の平行沈線を加えている。目は沈線状の、口は刺突状の凹点手法で表現され、鼻にも2穴の刺突が施される。14は小形の土偶で、高さは6.3cmである。体部が大きく後方に傾くが、脚部下端が大きく開くため自立可能である。両腕をやや上方に広げ、指頭状の頭部には掻き取ったような短沈線で目・口が表現され、体部には乳房と臍状の小突起が付される。脚部は楕円状に大きく張り出し、前面をくぼませて足先を表現している。文様は細沈線で裏面首筋に2条の弧線文を施し、胸から垂下する沈線と背面の弧線文との間に斜沈線を充填し、脚部には大きな渦巻文を施す。15は高さが4cmほどの小土偶で、粘土塊状の体部から頭部と四肢を僅かに突出させ、乳房とその下に円形の凹みを施した非自立の粗略な作りのものである。

(3) 後期(16~99)

前半期では、筒形土偶、ハート形土偶、板状土偶の三形態の土偶が確認されている。量的には筒形土偶24点、ハート形土偶23点と両者が拮抗しているが、郷原遺跡例を典型とするようなハー



※10・14は写真から図化

図2 群馬県の土俵(1)

0 1:3 10cm

ト形土偶は僅少であり、むしろこのハート形土偶の部分的要素を有する立像土偶や板状土偶が主体を占めている。後半期は、山形土偶、ミミヅク土偶が確認でき、山形土偶は全時期を通じて最も出土量が多く、約127点が検出されている。後期のミミヅク土偶は4点と少量で、量的には晩期段階のものが勝っている。

筒形土偶 16～30の筒形土偶は、中空・棒状の体部に顔面部が付き、基本的に自立可能なものが主体を占める。体部の造作により、次の4つに分類できる。A類：棒状の粘土塊を底面から体部下半にかけてくり抜き、完全な中空状とならないもの(16～18)、B類：棒状工具の刺突による貫通孔をもつもの(26)、C類：輪積み成形による中空・円筒状のもの(19・21・27・28)、D類：棒状の体部下端が棒状に開いて僅かな挟り込みにより中空を意識したもの(29・30)、などである。顔面部の造作は、A類が体部と一体化してその側面や上端に表出されるのに対し、B・C類は体部と別個に作られた円板状の顔面を体部の上端に接合している。顔面部のみが残存する20・22～25等も、その造作からB・C類であろう。おのずとA類の顔面部は正面を向くものも多く(16・17)、B・C類は斜め上方を向くものが主体となる(18・19・21～23・26)。D類については判然としない。各類とも基本的に四肢の表現はないが、腕が付くものがD類にみられる(30)。また、後頭部に橋状把手やそれに類似した装飾を施すものがB・C類に認められる(20・24～26)。顔面表現のうち、口部は体部の貫通孔や空隙と連接する円孔表現と浅い刺突の凹点表現があるが、前者はB・C類に通有であり、後者はA類にのみ認められる。眉は鼻と連接して表現されるが、Y字状隆帯(18～20・22～24)と、T字状隆帯(17・21・25・27)、それに表現されないもの(16)とがある。鼻孔は2穴(18・22・23・27)と1穴(19～21・24・25)の表現が認められるが、総体的には後者が多い。また眼部は、刺突や短沈線などの凹点手法で描出されることを基本としている。

A類の16は男根状を呈する体部の先端に横向きの顔面を貼付したシンプルなもの、首部の巡りの隆帯貼付が剥落している。小さな円形貼付の乳房の間に正中線を引き、縦位の列点刺突を施す。体部下端は欠失するが、推定全長は10cm前後であろう。17は裾広がりの体部に扁平な山形状の頭部が付く特異な形状のもので、形態は16と同様に男根状を呈する。口は小さな円形刺突で表現されるが、内面の中空部まで達していない。沈線の正中線は口部下から垂下し、背面に沈線の小円文が施される以外は無文である。18は円筒状の体部に上方を向く顔面が付き、口の円孔は中空部まで達している。文様は後頭部に大柄の渦巻文、胴部に方形区画状のS字渦巻文を、各々沈線で施す。

19～25は、B・C類の頭部あるいは顔面部のみの資料である。顔面形状は円形の他に20・23のような楕円形のものもある。鼻と連接した眉はV字状につり上がるものも多く、郷原遺跡例のようなハート形土偶との共通性が看取される。21は体部側面に顔面が付く例で、体部の上端は螺旋状に開口している。24は切れ長の眼部と眉上の刻目目が特徴的で、頭部背面に橋状把手の剥落痕がある。25は眉上に左右逆方向の刻目を施し、眼部は楕円状の沈線区画で描出して彫文を充填する。また口部の貫通孔周縁には沈線文が巡る。

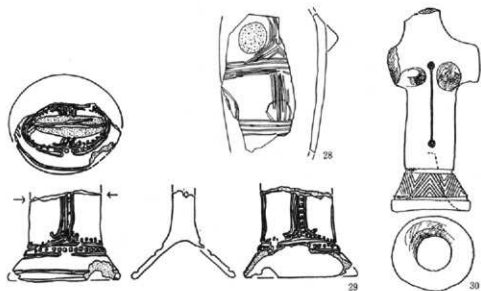
B類の26はやや大形のもので、裾部に沈線による重三角文が回り、体部正面には沈線の正中線を、両側縁と背面は縦位の円孔列を施す。顔面部を欠失するが、把手の一部が残存している。

C類の27の体部文様は、上・中・下位に横帯文を巡らせ、正面および後背面には三角区画文と対弧文を組み合わせた文様を施す。また横帯文の間には連鎖沈線帯を施し、各区画内にLR縄文を充填している。円錐形状の乳房やその下位の正中線・円孔という一体化した構成に、土偶の明瞭な要素を看取できる。焼成前に穿孔された底面には網代痕が残る。顔面部は頭部とあごの一部を欠失するが、その描出方法は25とも共通する点が多い。一文字状の隆帯眉上に、左右逆向きの矢羽根状の刻目を施す。眼部は沈線の圍繞で描出され、さらにその下位を弧状沈線で区画して充填縄文を施す。口部は円孔の周囲を2本の横帯文で圍繞し、円孔下に区切り線を施す。28も27とともに千瀬谷戸遺跡からの出土例で、類似した形態をとると考えられる。体部破片で、文様は条線状の集合細沈線で数帯の横帯文を施し、正中線の下位に円孔を意識したと思われる沈線の円文を施す。また同様の集合沈線を乳房の内縁に沿って弧状に施すが、乳房は剥落している。

D類の29・30は体部下端がスカート状に大きく開き、その内側は上げ底状に挟れている。29の文様は、下端に2条の横位沈線を巡らせ、正背面には2条の懸垂線とその両側に先端が鉤状にカーブした縦位沈線を付加し、各沈線間に列点文を充填する。両側面にも1条の縦位沈線を施す。板状の体部上半を欠失するが、この欠損部の長軸方向には小さな円孔が貫通している。30には腕が付くが、頭部とともに欠失する。下端の裾状部には26と同様の重三角文を施し、正面には乳房と両端に刺突を施した正中線が描出される。

ハート形土偶 31~43はハート形土偶およびその系譜を引く立像土偶である。31に見る斜め上方を向き前方に突出する平坦なハート形の顔面、隆起眼手法、後頭部の橋状把手、怒り肩とひじを張ったような短い腕部、細く括れた胴部と強く張り出した腰部、O脚で裾広がりの大きな脚部、集合沈線文とS字状渦巻文の施文。等の要素を完備しているものは極めて少ない。具体的には、正中線や背面の渦巻文の施文(34・35・37~39・42・43)、前方への顔面部突出(33・35)、後頭部の橋状把手(40)、胴部の括れやO脚部(34~37・41・42)に、31との部分的な類似性を指摘できる程度である。一方、丸味を帯びた体軀(37~41)、短沈線・刺突による凹点表現の眼・口部(33・37・39~41)、集合沈線文の希薄さと腰部に集中する文様構成(34・35・37)等は、顕著な差異といえる。眉は鼻と連接して隆帯で表現されるが、Y字状(33)とT字状(37・39・40)が見られる。鼻孔の表現は2穴(31)と1穴(33・37)、それに表現しないもの(39・40)が認められる。体部の造作は中実を主体とするが、大形品は中空のもの(31・32)もある。

31は著名な郷原遺跡出土の大形土偶で、目と鼻を強調したハート形の顔面が特徴的である。胸部には小さな乳房が付き、両端に刺突を付加した正中線を施す。また、肩・脚部の渦巻文や背面の2段のS字状渦巻文、集合沈線で構成される文様が体部全体を覆い、体部の縁辺に沿って列点文を施す。32は左腕部破片で、推定全長が31に匹敵する30cm前後の大形土偶であろう。平坦な背面に沈線渦巻文を描く。33は眉上・顔面と首の周縁部に刻目を施す。34・35は角張った全体的



0 1 : 3 10cm

※28は写真から図化

図4 群馬県の土偶(3)

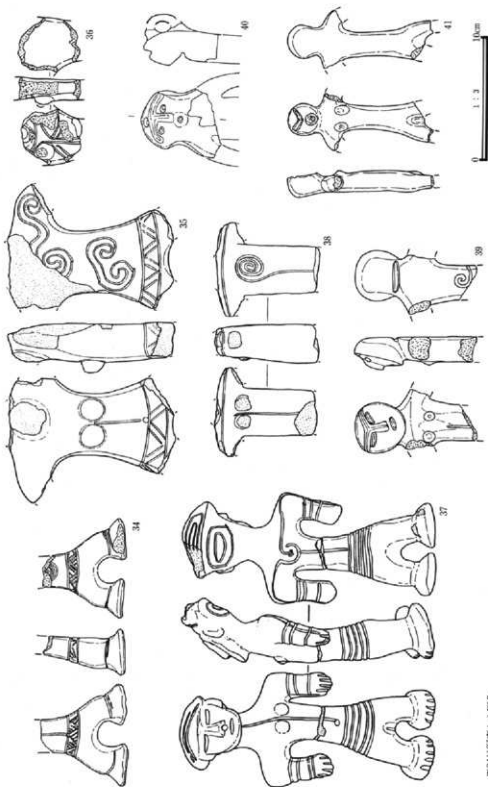
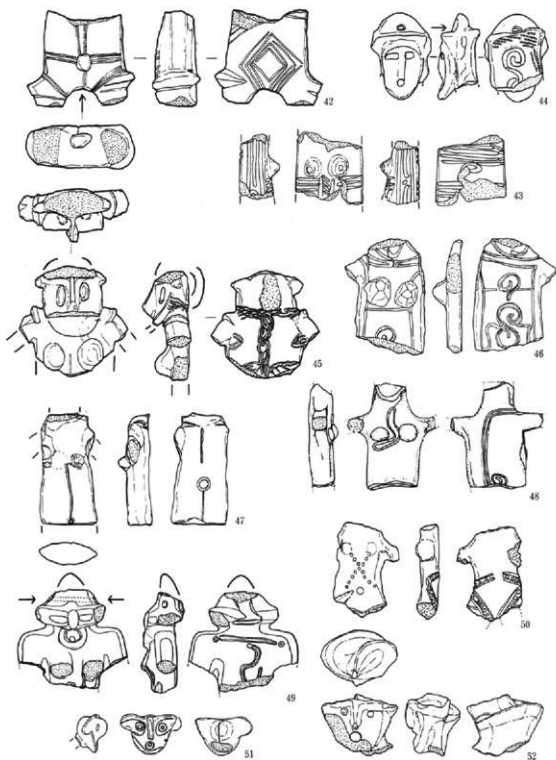


図 5 群馬県の土偶(4)

※34は写真から図化



※43・51は写真から図化

図6 群馬県の土偶(5)

なプロポーションが31に近似し、腰部には26・30の筒形土偶に類似した鋸歯状文や重三角文が巡る。36も35に似た形態で、体部正面に正中線と縦位の三角文を施す。37は31と同様にほぼ全形を留めた希少例であるが、顔面表現は31とは正反対にかなり写実的で、両側に突起状の耳部が付く。平坦な頭頂部上面と後頭部には入れ子状に楕円沈線文を、額部に2本の横位沈線文を施す。横位沈線文が多条化する点を除けば、正中線下端に刺突を施すことや腹部に文様が集中する点は、34・35とも共通する。手足には指が、また下腹部には性器状の表現がある。38は肩部に沈線文が回り、39は頸部背面に沈線文を、40の額部には刺突を施す。41は下腹部に性器状の隆起表現が見られるほかは全くの無文で、顔面部の眉・鼻も省略されている。42・43は活れない角張った体部形状が特徴的である。42の腰部にはバット状の突起を付し、背面には18の筒形土偶例に似た方形の渦巻文を施す。また下腹部に、刺突による臍や性器状の表現がある。43は正・背面と側面に多条の沈線帯を配し、間隙に「の」字状文を施す。

板状土偶 44～50は板状土偶を一括した。いずれも欠損品であるが四肢が付くと考えられ、基本的には非自立形式である。前方に僅かに突出する顔面の顎部(44・45)、体部の正中線と沈線表現の円文・S字状文(44～49)、後頭部の櫛状把手(45)や頭部の貫通孔(44・49)等に、31のハート形土偶との関連が窺える。しかし、凹点表現の眼・口部とT字状の眉・鼻(44・45・49)や活れの弱い長胴状の体部形状(45～50)は、むしろ38・42等との強い関係を示している。

44は後頭部にRL縄文とS字文を施す。45は鼻孔を1穴で表出し、顎部や後頭部の把手を欠損する。粗雑な点を除けば、背面の連鎖文は47の円文などと共に、各々27や17の筒形土偶のモチーフとも類似している。49は頭頂部が山形状に盛り上がり、後頭部に瘤状の貼付文をもつ点で先の土偶とはやや異質で、後述する55などの山形土偶に近いが、眼・口部表現や背面のS字状文、頭部の貫通孔等に前者らとの共通要素が見られる。50は正面にX字状の列点文、背面に菱形の沈線区画文内に列点文を施すが、下腹部にも沈線区画の列点文が巡る。

その他の土偶 51～54は後期中葉段階の頭部および脚部例である。51・52は刺突による凹点表現の眼・口部を有し、顔面が僅かに前方へ突出する。51は後頭部が瘤状に丸味を帯び、半円状の耳部が眼部横に付される点で特徴的である。52は頭頂部が螺旋状に作出される。53・54の脚部は断面形が丸く、足先を大きくして安定感をもたせており、自立が可能である。モチーフは異なるが、ともに沈線区画文内に列点文を施す点は、50とも類似する要素である。53はO脚状に大きく開き、腰部側面に42の意匠と近似した瘤状の突起を付す。やや膨らむ腹部の周囲に沈線を施し、背面には刺突列点文を充填した平行沈線文を施す。54はやや開きぎみに真っすぐ伸び、帯状の沈線文間に刺突列点文を充填する。

山形土偶 55～94は山形土偶である。体部文様の施文手法を中心に分類すると、A類：沈線文+縄文施文(55～57)、B類：列点文+沈線文(58～65)、C類：列点文(66～69)、D類：沈線文(70～80)、E類：円形貼付文(81～83)、F類：円形刺突文(84)、G類：無文(85～90)に分けることができる。背面を中心としたモチーフには、弧線文と連繋した渦巻文(58・59・61・63・64・71・

73・74・84)が多用され、他に横帯文(59・63・64・68・69)、入組文(55・56)、羽状文(60)、X字文(66)、格子目文(70)などが見られる。またA・B・D類を中心に、腰部に禪状の沈線区画文を施して列点文や沈線文を充填するもの(58~60・64・65・77~80)が存在する。正中線は、A・C・E・F類(55・56・66・82・84)に若干見られる以外は顕著でない。顔面部の表現は、眉と鼻が一体化したT字状隆帯で表出される点で各類とも共通するが、眼・口部表現はB~F類が沈線や刺突の凹点手法を主体とし、B類の一部とA類(55・57~59)に粘土貼付の隆起手法が認められる。後者は、顎部が肥厚して表現される点でも特徴的である。また少数ではあるが、各類を通じて眼(67・71・87)や眉・鼻(75・76・84・94)の省略されるものがある。耳部は小円孔で表現されるのを基本とするが、隆起手法の眼・口部を有するものを中心に表現されないもの(55・57・58・81・84・87)もある。また頭部背面には、鬚状の突起(55・81)やC字状隆帯(58・59・61・62・66・71・72・93)、あるいは列点文や沈線文で表出したC字文(67・75)を有するものが目立つが、特にB類に顕著である。形態面では、体軀は扁平な板状形式を基本とするが、若干の丸味を帯びたもの(59・79・80)も存在する。頭部は横位楕円形状のものが大半で、山形状を呈するものはA類に限定される。胴部の活れや腰部の張出しの強いものは、腹部全体を肥厚させるか(55・56・59・63・64・70・73・74・78・89)、同部位に小ぶりの瘤状の貼付を施すもの(58・60・69・77・85・90)に広範に認められる。

A類の55は、背面の入組文と弧線文による区画文内にL R縄文を充填する。山形状頭部の側面には、49・66と同様の横方向からの貫通孔がある。56の背面文様も55に類似するが、入組文内に刺突を施す。57は眉と顎の隆帯に刻み目を施し、頬部に4~5条の浅い凹線を引く。後頭部にはL R縄文、瘤状貼付、帯状の沈線区画文を施す。

B類の中では、58・59は異質な隆起眼部や顎部隆帯を有するが、口部表現は58が隆起手法であるのに対して59は凹点手法と異なる。全体的なプロポーションや肩部の横帯文・背面の渦巻文等には、共通性がある。横帯文については列点や沈線などその描出手法に差があるが、他のB類の60・62~65の首部や腰部にも認められる。また、60は背面に羽状沈線文を、61は顔面に縦位沈線文を施し、61の後頭部のC字状隆帯は剝落している。

C類の68・69は、B類と同様の列点状の横帯文とともに膝頭に瘤状貼付を施すが、この瘤状貼付はF類の85・90にも認められる。また、66は上腕部と頭部背面にそれぞれと類似した瘤状貼付を有する。

D類の72・73の背面文様は、肩部の横帯文と体部縁辺に沿った弧線状の渦巻文で構成されるが、B類の58・59とも共通する。また72は口部下に沈線文を施し、73の顎部は隆帯貼付により肥厚する。74の背面も同様の文様構成で、71は眼部表現や横帯文が認められない。75は隆起眼部や凹点口部、肥厚した顎部等の顔面表現を有する点でB類の59と、76は隆起口部を有する点でA類の57との関連性が窺える。しかし、75の頭部横位沈線文の施文や76の眉・眼・鼻の省略は、57・59とは異なった要素である。また75は後頭部にC字状隆帯と弧状の平行沈線文を施し、76は頭部に平

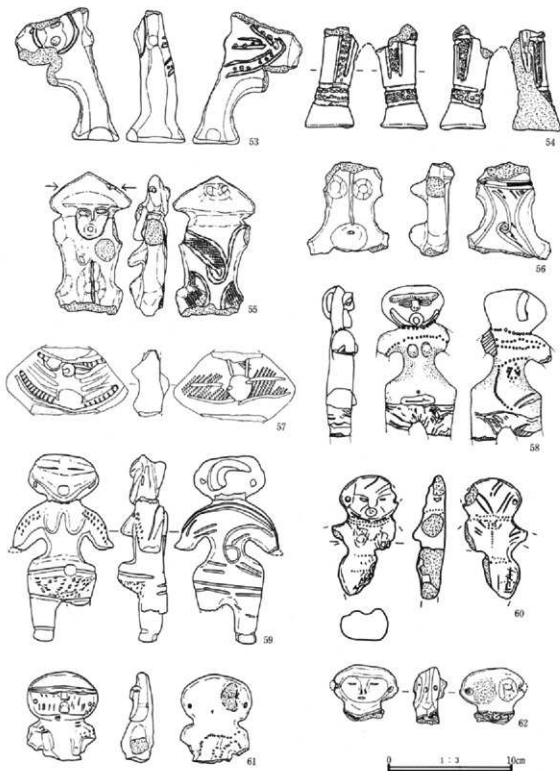


図7 群馬県の土偶(6)

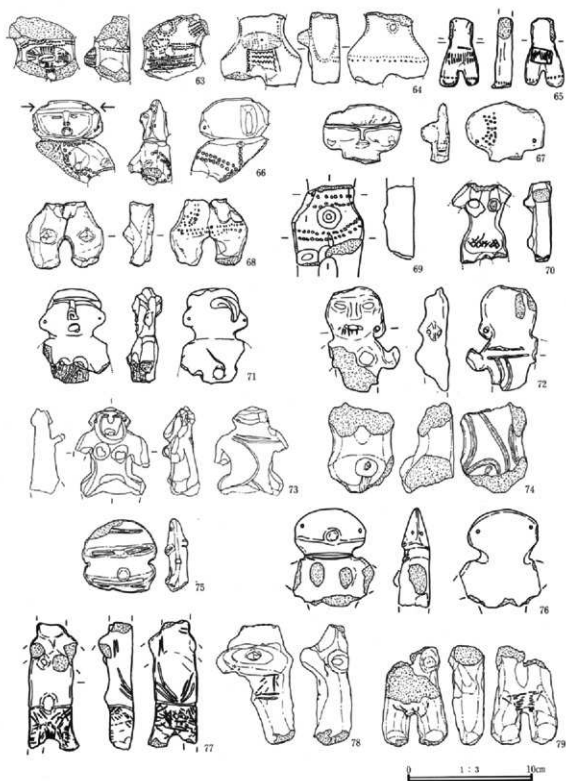
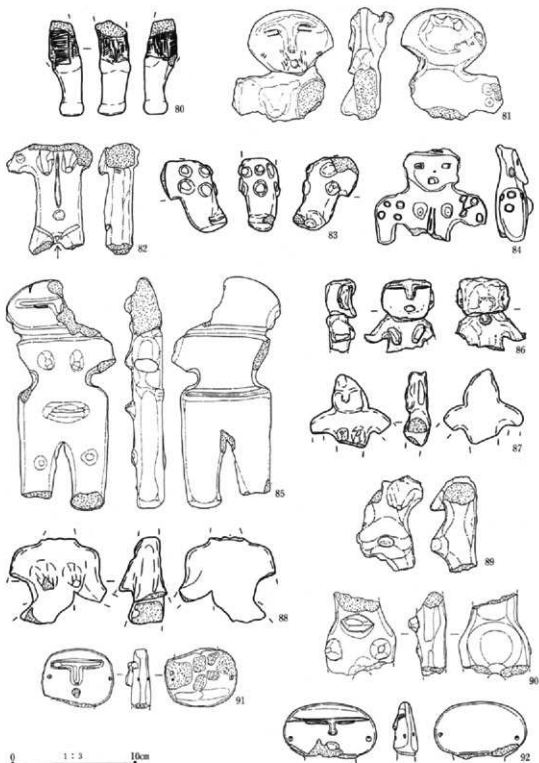


図8 群馬県の土偶(7)



※92は写真から図化

図9 群馬県の土偶(8)

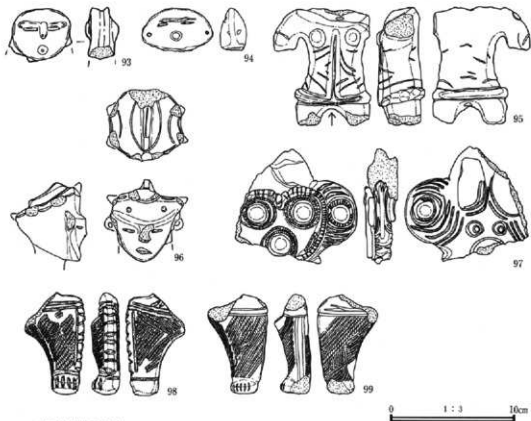


図10 群馬県の土偶(9)

行沈線文を施す。77は腹部に瘤状貼付をもつが胴部は括れず、腹部が膨れるタイプの中ではやや異質である。

E類の81～83は、肩部から腕部に集中して1列2～3個の円形貼付文を縦位に4～5列施すのが特徴的である。正中線等の表現は認められるものの、背面を含めて沈線や列点等の文様施文は極めて希薄である。81は口部周辺に髭状の沈線文を、82は臍状や性器状の凹点表現を施す。

F類の84は、E類のモチーフをそのまま円形刺突文に置換したもので、背面に平行沈線の渦巻文を施し、体部側縁に沿って列点文を加える。

G類の85～90は正中線や頭部背面のC字文状の表現が見られず、体部の装飾が希薄である。85は頸部が隆帯で表現され、頸部の周囲と背面腰部に、凹線状の整形痕が残る。86は乳房が肩から脇下にかけて弧状に付けられ、頸部背面には瘤状の円形貼付を施す。眉で区切られた平坦な頭部が特徴的である。87は耳・眼部を省略する。

91～94はB～F類のいずれかに該当する顔面部資料である。91～93はT字状の眉・鼻を有し、94は沈線で眉を表出して鼻は省略される。93の頭部の断面形は滑車状を呈し、瘤状の円形貼付が施された後頭部にC字状突起の剝落痕がある。

95・96は後期後葉に位置すると考えられるもので、前述の山形土偶とは異なった特徴を有する。95は正中線と腰部を巡る隆帯が一体化して表現され、小さな円形の乳房とO脚部が特徴的である。表面の風化で不明瞭だが、体部には菱形か矢羽根状のモチーフを描出するようである。頭部の接合部と股間部に刺突を施す。96は眉・鼻のT字状隆帯表現と眼・口部の沈線による凹点表現に、山形土偶との系譜関係が窺えるが、頭部の装飾や形態に大きな差異がある。頭頂部は平坦な六角形を呈し、その各辺側縁部には横位の短沈線を施す。また中央部には弧線文と髷状の突起が付き、その両側にも対弧状に弧線文を施す。さらに額部には2個の刺突が見られる。

ミミズク土偶 97～99はミミズク土偶である。97は円形貼付による眼・口部の周縁に2条の有節沈線文を巡らせ、顔面をハート形に縁どる隆帯や耳部には刻み目を施す。98・99は脚部破片で、足先に刻みを加えて指を表現し、98は側縁部にも刻みを施す。ともに腰部には横帯文が巡り、LR縄文を施文している。

(4) 晩期(100～145)

前半期では、後期末葉からの斉一性の強いミミズク土偶、東北地方からの影響によりかなり変容を遂げた山形土偶系統、ミミズク土偶から派生した土偶、いわゆるI字文土偶系統の土偶、それに在地的な変化を遂げた遮光器形土偶系統の土偶などが認められる。後半期は前半期に比べて量的に少ないが、千網式期に特徴的な浮線網状文をもつ土偶のほかに、終末段階の有髷土偶が認められる。

100～105は眼・口部の凹点手法や顔面形状・耳部の穿孔等から、山形土偶の系統と考えられる。100は太い隆帯により、鼻から眉にかけて数字の「3」が横転したようなモチーフを描く。これは101の眉とも共通しており、T字状隆帯の変化としてとらえることができよう。102・104は眉の隆帯上や顔面輪郭に沿って刻み目が施され、ミミズク土偶の影響が看取される。また、104の頭頂部が横方向にV字状に挟れる形状も、その影響と考えて良いだろう。100・101・103の体部文様には、沈線の渦巻文・円文や三叉文が施される。また101～103の口端部には、弧状や三角状のモチーフが描かれ、従来より説明されてきたように、東北地方の平行段階の土偶との系統的関係が想定される。

106～115は安行2式に後続する晩期のミミズク土偶あるいはその系統に連なる土偶である。109は頭頂部装飾が三単位の小突起からなるが、107・108・114は左右に二分割されるもので、114はより簡略化されている。115は頭頂部装飾がなく、眼・口部の円形貼付の上に刺突を加え、顔の輪郭部や体部にも刺突を施す。108の表裏面には入組文を施す。110はX字状隆帯とそれに規制された横・斜位の沈線文を施し、背面には蕨手状沈線文を付加する。113は入組文とやや崩れた玉抱き三叉文を施す中空土偶である。縄文施文は、108・109・113がRL、112・117がLR。106は楕円形状の隆起眼部や凹点口部、それに双環状の頭部装飾を有する点で107～109等とは異なる。

116～119は、遮光器形土偶の前段階の東北地方からの影響を強く受けて成立した土偶である。116と118は腰部のベルト状や正中線状の隆帯の有無により異なるが、ともに板状の中実土偶で入



図11 群馬県の土偶(00)

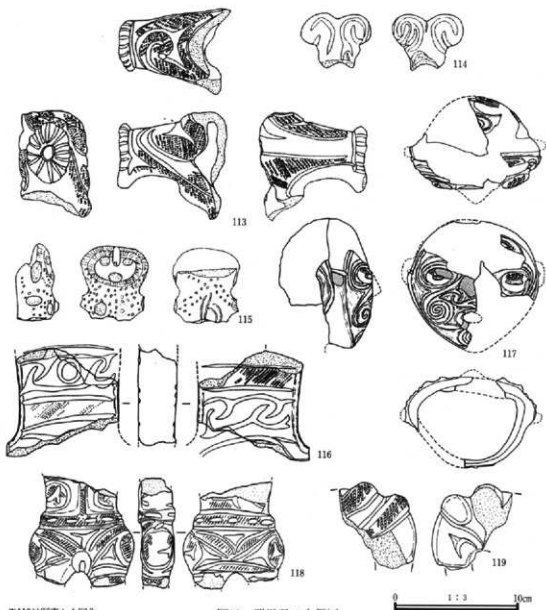


図12 群馬県の土偶①D

組文や三叉文が描出されている。117は浮彫的なS字状入組文と三叉文をもつ、かなり特異な大形中空土偶の顔面部であり、楕円形隆起眼の上端に縄文が施文される。119は左肩部の破片だが、肩バット状の隆帯装飾の裏面には三叉文が印刻されている。

120～127は形態や部分的な装飾において、忠実にはないが遮光器形土偶を模倣している一群である。120は頭頂部が開口する中空土偶で、遮光器形土偶との関係が「かろうじて後頭部表現、頸部、肩部、下腹部の鎖状隆帯につながりを見いだすことができ」、121は手部の二又表現や肩部との境の截痕列状の文様に、その類似性が指摘されている。縄文はともにLR。122・123は腰部

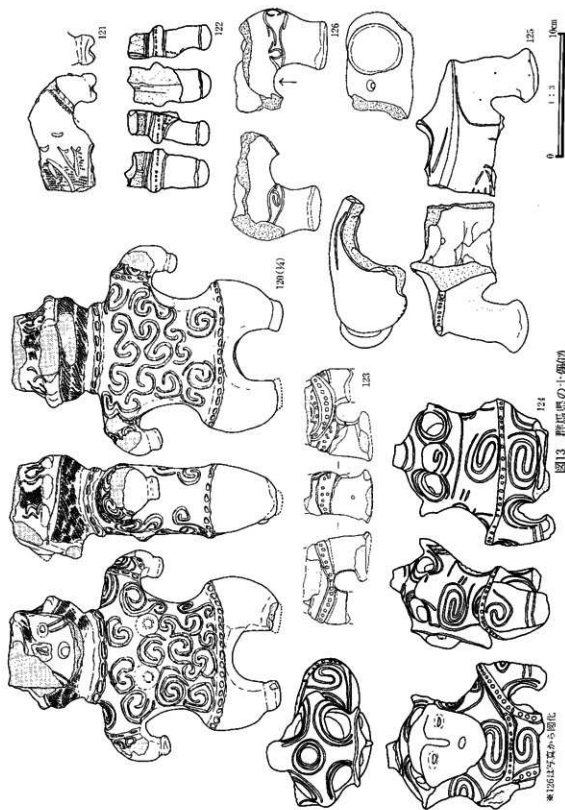


図13 群馬県の土師器

*126は写真から図化

を巡るの隆帯や刺突文、それにO脚状の脚部に類似性が認められ、122は腹部に鋸歯状の列点文が巡る。124～126も120と同様の中空土偶である。124は頭頂部に十字に交差する王冠状裝飾が施され、その交差部には中央の凹む臼状の突起が付される。肩部から体部には、列点文をもつV字状の隆帯が貼付される。顔面を除いて、渦巻き状の沈線文が施文されるが、120に見られるようなC字状の入組沈線文の中心先端部が相互に連結したものである。仮面状の顔面部や楕円隆起眼・凹点口部の表現方法は、120とも共通している。125は手の形状や文様施文がやや異なるが、肩部に124に類似した隆帯が巡る。126はO脚状の脚部付け根に、三叉入組文が簡略化されたレンズ状の区画文様が施され、股間部には穿孔がある。127は容器形を思わせる中空土偶で、頭部側面の3カ所が大きく眼鏡状に穿孔され、その内の2カ所が眼部表現となる。後頭部の穿孔周囲には突起状の裝飾が施され、頭頂部には「目」字状の隆帯が貼付されている。

128～130はいわゆる「I字文土偶」やそれに類似するものである。128は表裏面とも沈線文と三叉文により文様構成され、裏面は三叉文が沈線文で連結されて対向するモチーフが表出される。129はI字文の両端が相互に連結したモチーフで構成され、正中線や肩・胸・腰部の沈線区画内に列点文を充填する。胸部の正面に刺突を、背面に二重の円文を施す。130は腕部破片であるが、129に類似したI字文が施される。

131・132は浮線網状文やそれに類似した沈線文が施される中実土偶である。132は3～4本の浮線文が4単位で回り、集約部に縦位の短沈線が施される。131も同数の沈線文が巡るが、集約部は見られない。

133～143は前述の土偶以外の系統が不明瞭なものを一括した。133～136は凹点の眼部や口部を有する一群である。133は横長の凹点眼・口部をもつ。134は中実の体部中央から口部へと抜ける貫通孔をもち、頭部裏面にH字状に隆帯を貼付する。135は顔面が真上を向き、頭部に3本の横位沈線文、背部に隆帯の菱形モチーフを描く。口部を欠くが、肩から横方向に伸びる前足状の突起があり、動物土偶の可能性もある。136は眉上や目・口・耳部の周囲と頬に刺突を加え、頭頂部はV字状に決れる。137～139は、凸点眼部と凹点口部をもつ。137は134と同様に眉の表現がなく、裏面に隆帯の剝落痕がある。138・139はT字状の眉・鼻と楕円隆起眼をもつ。138は頭頂部にアーチ状の突起が付され、139は眼部上位に沈線文と両頬に細かい刺突を加える。140は明瞭な眼部表現がなく、T字状の眉・鼻と凹点口部をもつ。141・142は明瞭な顔面表現が認められないが、141は凸点眼が剝落した可能性もある。143は142と類似した作りの粗雑なもので、短い脚部をもつ。

144・145はいわゆる「有髻土偶」と呼称されている板状の土偶である。144は体部に比して大きな扇形の頭部を有し、体部下端を幅広に平坦化して自立機能をもたせている。左腕の接合部周辺には、タール状の付着物が見られる。顔面部は凹点眼部・隆帯口部と穿孔耳部が表出され、周縁部に沈線文を施す。145の頭部形状は144と類似し、顔面部は剝落しているがその周縁部に重弧状の沈線文を施す。

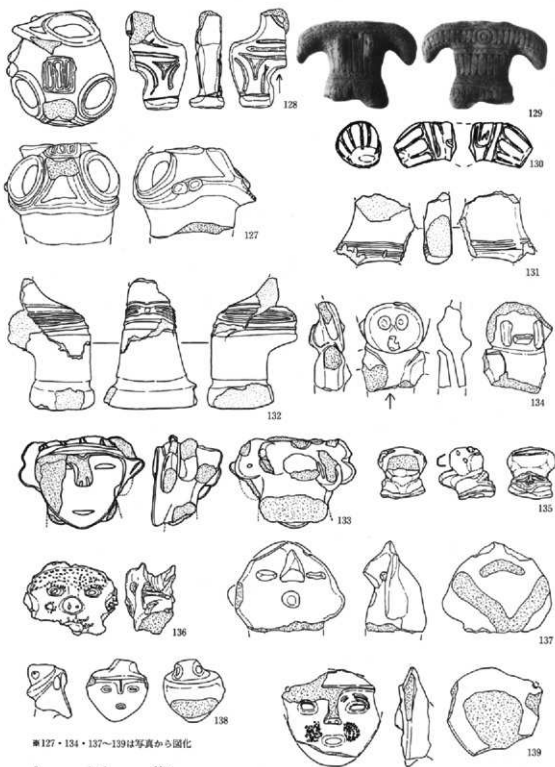


図14 群馬県の土偶③

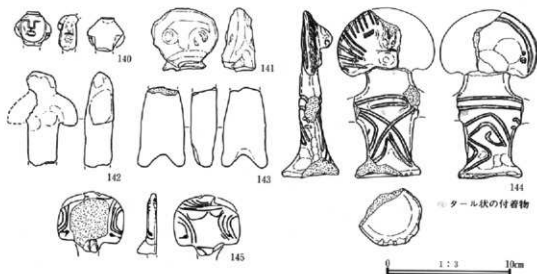


図15 群馬県の土偶14

4 土偶の時間的位置と地域的様相

前章で取り上げたの各土偶の時間的位置については、そのほとんどが遺物包含層からの出土であり、土器との相伴関係を基にした明確な位置付けのできるものは極めて少ない。しかし、近年何人かの研究者により、土器文様との対比を通じてその帰属時期や系統の変遷が論じられており、ここではそれらの論考を参照しながら、時間的な位置付けと共に地域的な様相の実態を探ってみたい。

(1) 前期

前期の土偶は、他時期に比べて土器型式との関係がかなり明瞭に把握できる。1～3は丘陵斜面に大量投棄された土器類と共に検出されたもので、土器は諸磯b式期に限定されることから、当該期に比定して良いだろう。4は丘陵斜面からの表採品である。土器は諸磯b式が主体であり、形態的にも3と共通することから、同時期の所産であろう。5～7はいずれも住居の埋没土中からの出土であるが、伴出土器は5が諸磯b式、6・7が諸磯c式であり、各々当該期に比定できよう。8は7と同一遺跡の古墳時代住居から出土したものだが、下半部の集合沁線文の特徴から諸磯c式期の土偶と考えられる。9は遺構外からの出土品で相伴の土器資料はないが、前述したように形態的特徴は他と共通しており、諸磯式期に含めて問題ないであろう。

現在のところ、前期土偶の検出例は諸磯b・c式期に限定されているが、文様施文の有無や顔面造作を主体とした形態には、若干のパラエティーの存在と時間的な変化が看取される。例えば、プロポーシオンではb式期に三角形状(1)と小形のバイオリン形状(3～5)の二者があるが、c式期ではバイオリン形状を基本とするようになり、形態的により斉一性の強まりを感じさせる。また顔面造作では、b式期が体部と一体の平面的なものであったのに対して、c式期には6のように立体的となる徴候がみられる。体部への文様施文もb式期にはなく、8のようにc式期になっ

て認められる。以上のことを要約するならば、b式期とc式期との土偶の間には、次のような変化の方向性を指摘することができる。それは、①平面的な顔面(頭)部から立体的な顔面部への変化、②無文から有文への体部の加飾傾向、③大形品の出現、の3点である。②・③については、埼玉県西大宮バイパス№4遺跡や千葉県夷塚遺跡の早期段階の板状土偶にも確認でき、諸磯c式期の特徴とは言い切れないが、これらの特徴が諸磯b式期には希薄であることから、早期からの系統の変遷ではなく、c式期に改めて出現するものであろう。

こうした変遷とは別に諸磯b式期の1・3・4やc式期の6・7に見られるように、形態や顔面表現にタイプ差とも言うべき特徴が認められるが、これらの系譜をどのように考えるのが問題として残る。これについては、既に小野正文氏⁹⁸や原田昌幸氏⁹⁹らの論考の中で触れられているので、参照してみよう。小野氏は、4を茨城県花輪台貝塚のバイオリン形土偶に系譜を求め、愛知県二股貝塚例を含めた形態的連続性をもつ一類型として位置付けている。また、3は愛知県大曲輪貝塚例による大曲輪タイプの系譜を引き、宮城県糠塚遺跡の土偶などとも脈絡を有する点が指摘されている。一方、原田氏は早期後半の東日本地域では土偶の存在が途絶えることから、同段階に中部・東海地方に定着した入海タイプにその系譜を求め、従来では大曲輪タイプに一括されてきた7のような頭部に数個の円孔をもつ土偶を、あらためて諸磯タイプと呼称している。また原田は平行期の東北地方で、主頭状頭部と胴部中央に円形の凹み表現を有する土偶が成立することを述べ、これを大木タイプと呼称している。

岡氏の考え方に大差は無いが、諸磯式期のバイオリン形土偶の系譜については、関東地方の早期後半で一旦断絶することを考慮すれば、原田氏の言うように入海タイプとの関係で把握することに整合性があるだろう。また、原田氏が設定した諸磯タイプは、諸磯式土器に伴う大曲輪タイプを呼び換えたものであるが、先述したように諸磯b式期にはこれとは別タイプの1や3が存在している。3に関しては、基本的なプロポーシオンにおいて、4と共に愛知県二股貝塚や入海貝塚の入海タイプの系譜上に位置付けることに問題はないだろうが、顔面部の刺突孔や主頭状の頭部形態等の点で、大曲輪(諸磯)タイプとは異なっている。むしろこれに類似する例は、宮城県糠塚遺跡例⁹⁹をはじめとした東北地方の大木タイプに広範に認められる。しかし、この大木タイプの系譜についても、東北地方の早期に求めることができないようであり、3なども含めて入海タイプから分岐・伝播したタイプの可能性も考えられる。この仮定が正しいならば、頭部相当の部位近くに刺突を施す三角形の1は、やはり糠塚遺跡等から出土している頭部を突起状に表現し、頭部の下位に円形の凹みを表出するタイプとの関連で把握することができるのではないかと。3はプロポーシオン的にも、大木タイプの胴部下半を省略化した形態に類似する点で示唆的である。また、7は円孔表現が大曲輪タイプと共通し、同タイプに比定し得るが、頭部の作出を欠いた全体的なプロポーシオンでは大きな違いを見せている。

資料的な制約もあり断定的な事は言えないが、前述のあり方を総合的に見れば、県内の諸磯式期土偶には少なくとも4つのタイプが存在するようであり、かつかなり広範囲な地域との関係を

窺うことができる。こうした背景には、諸磯b式土器の分布の広域性に象徴される文化の動向が、少なからず介在しているように思われる。

(2) 中期

各土偶は土器との伴関係をもつものが少なく、その詳細な時間的位置は判然としないが、他県域の資料も参考にしながら考えてみよう。10は腹部のやや膨らむプロボーションや乳房下位の弧線文、正中線下端のハート状文、下腹部に施された沈線表現の対称弧刻文、大腿部への文様施文の集中などに、中部地方の勝板式系土偶との共通要素が認められる。しかし、体部の表・側面に施文される渦巻文と剣先状の菱形文とが組み合ったモチーフ等は、それらの中に見出すことができず、当地域で在地化された要素と考えられる。時間的には、沈線化してはいるものの基本形を留めた対称弧刻文や全体的なモチーフからみて、勝板式末期段階に比定されよう。11・12は体部の角押文が、常陸・下総を中心とした関東地方東部に散見される中期中葉期の土偶に類似している。特に11のように、肩部に横位の角押文や有筋沈線文を重帯させるモチーフは、阿玉台式期の茨城県諏訪台遺跡例や大木式7b期の福島県七郎内C遺跡例に認められ、阿玉台式期の土偶の一要素とも考えられる。しかし、先の阿玉台式期土偶のプロボーションは、腕部がほぼ水平に横方向に延びて十字形となるものが多く、11のように垂下するものは見当たらない。このプロボーションは、東京都TN46・72遺跡等から出土した「多摩丘陵形態」と呼称される勝板式系土偶に認められ、11もこれらとの系統的な関係が考えられる。また腕部のみを対比すれば、10とも共通すると言える。13は頭部破片のみで判然としないが、頭部の沈線による有髪表現や顔面造作に、長野県波田町草原遺跡の曾利1～2式期の唐草文系土偶との類似性が見られることから、これに近い時期とみて良いであろう。14は加曾利E3式初頭段階の住居から出土したもので、同期に比定される可能性が高い。加曾利E式期の土偶については安孫子昭二氏の論考があり、それが「連弧文土器様式に伴う土偶」で多摩丘陵を中心とした関東地方西部域に多出することや、5段階の変遷と6つの基本形態を有することが明らかにされている。これに従えば、14はA2形態の第3～4段階に比定されるが、これは先の住居の出土土器とも時間的に整合している。15の腹部に付された円形の凹みは、宮城県黒塚貝塚例をはじめとした東北地方の前期板状土偶のそれとも類似するが、稚拙ながらも頭部や四肢の表現された全体的なプロボーションは、むしろ14と近似している。「連弧文土器様式の土偶」の第5段階は、体部装飾が省略されることや、同段階の稲城市平尾2遺跡出土例には胸部に円形の窪みが見られる点を考慮すると、15も第5段階すなわち加曾利E3式後半段階に比定されるものであろう。

集落遺跡の数量やその規模が前時期に比べてかなりの増大を見せ、しかも発掘による遺跡調査の機会が多い中で、土偶の発見総点数が前期と同数の10点しかないことは、中期における当県域内での土偶祭祀がいかに低調であったかをよく物語っている。こうした現象は、多摩丘陵などの西部域を除けば、関東地方のほぼ全域に認められるものであり、当地域もそうした文化的斉一性を共有すると理解することもできよう。しかし、土偶を多出する長野県域と隣接する地理的環境

を加味した場合、この点数は余りにも少なく、その背景には他の要素の介在を想定する必要があるように思われる。例えば、土器の分布圏との関係はどうだろうか。中葉段階の当地域は、勝坂式の存在が阿玉台式をかなり上回っているが、その勝坂式も長野県中・南部域のものとは異なり、「沈線爪形文土器」や「新巻類型」・「焼町土器」・「三原田式」といった在地的な土器型式を中心に構成されている。これらは勝坂式だけでなく、北陸の上山田式や東北地方南部の大木7b・8a式などの影響下に成立するものであるが、結論的に言えば、これらの土器型式を保持する集団が長野方面との深いつながりを持ちながらも、土偶祭祀をほとんど受容しなかったということに起因すると考えられる。

一方、阿玉台式土器も少なからず存在しているにもかかわらず、阿玉台式系土偶の存在が極めて希薄であるのはどのような理由によるのだろうか。現段階での阿玉台式系土偶の分布は、同式土器の分布圏のほぼ全域に認められるが、その中心は常陸・下総などの関東地方東部域であり、北部域はその周縁の様相を呈している。このことは、各地域の阿玉台式土器文化自体が、必ずしも等質に土偶を保有するものではなく、東部域の地域性として把握される可能性を示すものであろう。この背景には、阿玉台式土器とも密接に関連する「七郎内C遺跡第II群土器」の介在も考慮する必要があるように思われる。

いずれにしても全体的に見れば、中葉期の土偶は阿玉台式系の要素を僅かに含みながらも、勝坂式系を主体に構成されており、当地域が勝坂式系土偶文化圏の影響下にあったことを示している。そして後半期の加曾利E式段階では、西関東系の連弧文タイプとも言うべき土偶が前段階にも増して僅かに存在するが、それは県内での客体的な「連弧文土器様式」の存在とも軌を一にしている。

(3) 後 期

筒形土偶 筒形土偶については植木弘氏の体系的な研究があり、関東各地の資料を駆使して称名寺式期から堀之内2式期にかけての四段階の変遷を論じている。⁸⁸これらの論考中に当県の資料も取り上げられ、16は筒形土偶出現期の第1段階（称名寺式期）、17は第2段階（堀之内1式期古段階）、18は3段階（堀之内1式期新段階）への過渡期、26は第4段階（堀之内2式期）に比定されている。また、30は前者とは別タイプの「内匠タイプ」と呼称され、第4段階に比定されている。植木の時期比定は、胴部・顔面部の造作方法の変遷や体部文様を土器文様に對比させてのものであり、これに倣うならば、顔面部が胴部から独立するものの板状とならない20は第3段階、顔面部が板状となる19・21～24は第4段階であろう。また、板状の顔面部は第4段階と変わらないが、27にみる連鎖状・対弧状・三角形の沈線文モチーフや横帯文は、千葉県良文村貝塚区貝塚出土の注口土器や茨城県福田貝塚出土の鉢形土器のように、加曾利B1式期の土器に多用されることから、同期に比定することができる。形態上でも土器の底が抜けたようなプロポーションや、体部側面を貫通する円孔は、茨城県戸立石遺跡例のように第4段階にも認められ、前段階から引き継がれた要素であることが窺える。⁸⁹25・28も27の顔面部や体部文様との類似性から、加曾利B1

式期と考えて良いのではないだろうか。以上のことから、25・27・28は植木の第4段階に継ぐ第5段階とも言うべき位置を付与することが可能である。29は体部文様はやや異なるものの、下端がスカート状に開くプロポーションから30の「内匠タイプ」との関連が把握でき、これと近似した時期が想定される。

筒形土偶の終焉が堀之内2式期ではなく、加曾利B式期にまで下ることについては、栃木県後藤遺跡出土の土偶を分析した上野修一氏が既に指摘しているところであるが、27の例によってもその妥当性を再確認できよう。

ハート形土偶 この土偶については植木・上野氏らの論考があり、堀之内1式～加曾利B1式期までの変遷が論じられている。両氏の見解には若干の差があるが、31のような顔面表現や集合沈線文主体の体部文様は、堀之内1式期あるいは同2式期最古段階に位置付けている。また、34・35の腰部や36の体部の三角文は、堀之内2式土器の文様と対比されている。これに倣って42・43の背面文様をみれば、42は重菱文から堀之内2式期に、43が多条沈線の横帯文と「の」字文から加曾利B1式期に各々比定されよう。また、腰部に横位文様が集中し、眼・口部が凹点表現となる37も堀之内2式期に比定されているが、顔面表現の類似性から時期比定できるならば33・40・41も同期となろう。しかし、こうした顔面表現は堀之内1式土器に伴出した東京都東谷戸遺跡例に既に認められ、必ずしも新段階のメルクマールにはならないようであり、先の33などの時期比定には無理がある。背面に単独の渦巻文を施す38・39は、34や35の背面文様との類似性からすると、堀之内2式期であろうか。

ところで、植木氏はハート形土偶を7タイプに分類し、31を郷原タイプa、37を郷原タイプb、38を鳥名タイプとしている。これらに対比すれば、32は郷原タイプa、34・35は郷原タイプbに比定されよう。しかし、鳥名タイプとされた38については、腹部に顕著な膨らみが認められず、正中線や背面の渦巻文からすれば、むしろ郷原タイプbとすべきではないだろうか。あるいは、体部施文の希薄さや括れない長胴のプロポーションを重視すれば、39・40と共に別タイプを考えた方が良いのかもしれない。42・43などのプロポーションは、38の系譜上でとらえるとその変遷がスムーズである。また、41は無文であることやその長胴のプロポーション等から、東谷戸遺跡例との系統的な関係も考慮する必要があり、他の土偶とは別タイプとしての特徴を有している。

いずれにしても、31の直接的系譜下にあるものは極めて僅少で、多くはその傍流ともいうべき特徴を有する新段階のものである。換言するならば、東北地方南部の中心地域のハート形土偶に類似する31の存在そのものが異質であり、本県域は郷原タイプbやハート形土偶の特徴の希薄な一群を中心とした、その周縁の様相を示すものであろう。

板状土偶 44～50の板状土偶の時期も判然としませんが、背面文様を先のハート形土偶に対比すれば、44・46・49の単位文化したS字文は35との関係が想定できる。こうしたS字文は、31などの渦巻文に系譜をもちながらもより後出的なものとして³⁴いるが、実際に茨城県権俣貝塚出土の加曾利B1式の注口土器に施文されたS字文に類似することを考慮すると、加曾利B1式期に比

定できるのではないだろうか。また47・48の円文や渦巻文は34・38との関係が想定でき、やはり前者らに近似した段階と思われる。45は連鎖状沈線の横帯文が27の筒形土偶と類似し、これも加曾利B1式期であろう。これらの板状土偶は、体部文様や顔面造作から見て、ハート形土偶や筒形土偶と密接な関係を有していることが判る。また、時間的にも堀之内2式期や加曾利B1式期を中心とすることを考慮すれば、ハート形土偶の終末的一様相を留めたものという理解も可能であろう。視点を変えれば、ハート形土偶の板状化傾向という側面も窺える。

51～54の資料は時期判別の手掛かりに乏しいが、51の球状の後頭部や顔面脇に飛び出す耳状の表現は、古い段階の山形土偶にも認められる特徴である。また52の螺旋状の頭頂部は、加曾利B1式期の25のS字状の頭頂部装飾に脈通じるところがある。53は脚部の張り出しと僅かながら膨らむ腹部の表現が、堀之内2式新段階のハート形土偶の島名タイプに近似するが、沈線区画の列点文は54との関連性が強い。54は埼玉県赤城遺跡や千葉県新貝塚からの出土資料の中に類例を見出すことができ、森脇 淳氏はこれを加曾利B式期に比定している。円柱状の脚部や横帯文的な文様から見れば、関東地方東部の山形土偶との関連も想定される。おそらく51～54は、山形土偶が成立する時期に近接した加曾利B1～2式期に該当する土偶ではなかろうか。

山形土偶 山形土偶については、幾つかの論考がなされているが、内容的にそれらを包括した上野氏の論考に詳しい分析がなされている。⁽⁶⁾上野氏は関東地方の山形土偶を福田・椎塚・金洗沢・後藤の4系列に分類し、加曾利B2式期から曾谷式期までの4段階にわたる変遷を論じている。これに3章での便宜的な分類を対比するならば、体部に縄文を施文するA類(55～57)は福田系列と、列点文や沈線文で文様構成するB・C・D類(60～74・76～80)は後藤系列と、また眼・口部や顎部の表現が隆起手法によるB・C・G類の一部(58・59・73・75・85)は椎塚系列との関係が指摘できる。福田系列のうち、55の三角形の頭部形態は1段階(加曾利B2式期)の特徴であり、同段階の福島県上阿遺跡や同角間遺跡例とも共通した要素をもつ。56は背面を縁どる弧線文から、また57は後頭部の円形貼付と横帯文が千葉県井野長割遺跡出土の曾谷式期の異形台付土器に類似することや顔面を埋める沈線文から、各々4段階(曾谷式後半期)に比定されよう。後藤系列や金洗沢系列のB・C・D類は、横帯文や襷状の区画文、背面の弧線文や渦巻文、それに後頭部の隆帯・沈線・列点によるC字状表現などから見れば、そのほとんどが曾谷式平行の3～4段階であると考えられる。下腹部に椎塚系列の鋸歯状文からの変化と思われる格子目文をもつ70などは、3段階(曾谷式前半期)であろう。

それでは、肩部から腕部にかけて円形貼付文をもつE類や、類似したモチーフを円形刺突文により表出するF類は、どのような位置付けができるのだろうか。このE類については、東京都なすな原遺跡、⁽⁶⁾長野県新屋遺跡、⁽⁶⁾同中平遺跡、⁽⁶⁾山梨県金生遺跡、⁽⁶⁾同石堂遺跡等の資料に、またF類は同じく金生遺跡の資料中に同一の特徴を有したものを認めることができる。これらの中では、なすな原遺跡例が「堀之内様式後半」、⁽⁶⁾長野県例が加曾利B式後半に比定されているように、時間的な位置は確定していない。先ずは、この貼付文の系譜を探ることが必要であろう。上野氏は、

金洗沢系列と後藤系列の4段階に、頭部や体部に瘤を貼付した「瘤付土偶」が出現することをとらえ、この土偶が青森県風張(1)遺跡から出土した肩部に瘤を有する十腰内IV式期の屈折像土偶などに関連するとしている。後藤遺跡の「瘤付土偶」には、上腕部に1個の瘤を貼付した後藤系列の資料(第3群第6類)がある。この瘤のあり方はE類よりもC類の66と類似するが、これらと平行対比すればE類も4段階に比定できることになる。また、その簡略タイプとでも言うべきF類も、ほぼ同一の位置付けができればよい。

顕著な特徴のない無文のG類のうち、膝部や頸部背面に瘤状貼付をもつ85・86・90は先の「瘤付土偶」との関連が想定でき、4段階に位置付けられよう。また86には、顔面周縁部と眉の一体化や頭頂部の平坦化のほかに、肩部に連接して弧状に垂れ下がる縦長の乳房が認められる。これに類似した乳房は、埼玉県駒形遺跡例にも見られ、4段階の特徴の1つとすることができそうである。頭部資料の83~94は、横位楕円形状や顔面表現の部分的な省略等から4段階前後に比定されられると思われる。93のような滑車形の断面形状をもつものは後藤遺跡例の中にも存在し、やはり新しい様相として位置付けられている。

当地域の山形土偶を総体的にみれば、卓越した後藤系列の存在と僅かな福田・椎塚系列の存在を指摘できる。こうした点は、渡良瀬川・鬼怒川・那珂川の上・中流域の栃木県域とも共通し、言わば北関東的な地域性として把握されるものであろう。しかし、ここで後藤系列との関係でとらえたE類は、縦位多列の円形貼付文、沈線文・列点文の施文の希薄さ、沈線の正中線をもつ等の点で異なっている。さらに、E類に類似する土偶の分布が、関東地方西部や長野・山梨県などの関東山地寄りの地域に偏在する傾向を考慮すると、刺突列点文を多用する後藤系列とは別の系列化ができると考えられ、栃木県域とは異なる様相を示している。また、福田系列や椎塚系列に対比したものの中では、55・56が沈線表現の正中線であり、また55・73は眼・口部が、59は口部が各々凹点表現となる点で、厳密にはそれらの系列と同一ではない。これらは、後藤系列にみられるような山形土偶の地域的展開の中で、変容を遂げたものであろう。

時期的に見れば、1段階は福田系列のみで他の系列は存在せず、3段階は後藤系列、4段階は後藤・金洗沢・福田の各系列が認められるが、2段階の様相が全く不明となっている。これについては、後藤系列としたB~D類の中に、2段階にまで遡るものがあるのか、あるいは福田系列の55などが2段階にまで下り、1段階には53のハート形土偶系や54のようなものが収まるのか、今後更に検討が必要である。

先に見てきたように、体部に沈線の正中線を有する山形土偶は少数ながらも存在するが、それを隆帯で表現するものはこれまでのところ県内での検出例はない。この表現は関東地方東部から東北地方南部域を中心に認められるようであるが、その中には95のような正中線と腰部を巡る隆帯が一体化して表現される例は見当たらない。こうしたモチーフは東北地方の瘤付文土器第I・II段階の土偶に存在し、後期後葉段階とされる福島県窪田遺跡例にも認められるものである。前者との関係で平行対比すれば曾谷式~安行1式期とすることができるが、先述の山形土偶に認め

られないことや、体部の幾何学的な文様の存在も加味すれば安行1式期であろうか。

96は平坦な多角形状の頭頂部形態やその上面の対弧文状のモチーフ、側縁の沈線文等が特徴的だが、顔面部の表出法を除けば、千葉県余山貝塚⁹⁶や茨城県思案橋遺跡⁹⁷、同外塚遺跡⁹⁸で出土したミミズク土偶の祖型的なものに類似している。また、頭部の鬚状隆帯は千葉県殿台遺跡例⁹⁹とも共通している。これら各遺跡の土偶はいずれもミミズク土偶が成立する直前段階とされ、安行1式期に位置付けられている。おそらく96も同期に比定して問題ないだろう。余山貝塚例をはじめとした各例は、隆起手法による眼・口部表現を有する点で山形土偶の福田系列に系譜をもつとされ、これらのグループによる系列化も想定されてきている。これに対して凹点手法となる96は、後藤系列の山形土偶にその系譜を求めることができ、前者らとは別の系列化が可能であろう。いずれにしても、ミミズク土偶の成立直前の安行1式期にもこうした地域的様相の継続性を確認できることに注目しておきたい。

ミミズク土偶 97・98のミミズク土偶は、鈴木正博氏により埼玉県真福寺遺跡出土の安行2式期のミミズク形土偶と対比され、これと同段階に位置付けられている。眼・口部の貼付文周囲の有筋沈線文や平板的な頭頂部装飾、幅広の縄文施文部と幅狭い横帯文をもつ脚部等に安行2式期の特徴を窺うことができ、98とほぼ同様の99もこれと同段階とみて良いだろう。県内での安行2式期のミミズク土偶は類例に乏しいが、その様相は安行1式期とは異なり、関東地方東部などとも連動した斉一性の強まりを看取できる。

後期土偶の様相を概括すれば、中期後半からのブランクを置いて、他の形式に先駆けて称名寺式期に筒形土偶が出現し、加曾利B1式期まで存続する。ハート形土偶は堀之内1式末期から同2式初頭期に認められるようになるが、その主体はハート形土偶の傍流とも言うべき系統であり、板状土偶とともに堀之内2式をピークとして加曾利B1式期まで残存している。山形土偶は加曾利B2式～曾谷式期に、ミミズク土偶は安行2式期以降に存在するという状況である。しかし、筒形土偶やハート形土偶と山形土偶との交替期の様相はつまびらかではなく、また山形土偶も新しい段階のものを中心とすることから、その成立過程を克明に辿ることはできない。さらに、山形土偶については晩期初頭にまでその系統が存続することを考慮すると、今回は抽出できなかったものの、安行2式段階がミミズク土偶一色ではなく、山形系土偶の存在も想定されるところである。

(4) 晩 期

晩期土偶も土器との明確な共伴関係を有するものはほとんどないが、県内資料の幾つかが先の鈴木・植木の両氏や金子昭彦氏らの論考中¹⁰⁰で取り上げられており、ここではそれらを参照しながら各系統の土偶について概観してみよう。

山形土偶系 まず、100～105の山形土偶系であるが、100は頭頂部下に山字状の沈線文が施されている。これは安行2～3a式に平行する八日市新保I・II式土器の波頂部下に認められるモチーフとも類似するもので、これに対比する考え方もある。しかし、この山字状文を3b式段階の土

版の文様系統に比定する向きもあり、そのいずれなのか判断し難い。後期末葉から晩期初頭にかけて、山形系土偶の眉と鼻の隆帯はハート形やY字状に湾曲化するが、これをミズク土偶の影響として把握するのと、遮光器系土偶に先行する東北地方の土偶からの影響とみる考え方に分かれる。101などの土偶はその例であろうが、輪郭線に沿った刻文が見られないことや口端への弧状の加飾を考慮すれば、むしろ東北地方との強い関連が窺える。100の例も同様な動向の中での変化と把握できるならば、植木氏の言うように安行3b式期の所産であろうか。101～103についても、既述されているところであるが、口部両端の文様や顔面の刻み目等から安行3a式期に比定されよう。104は決めに欠けるが、V字状の頭頂部形態は、千葉県君津原 LOC39遺跡例に見られるような、安行3b式期のミズク土偶の頭頂部装飾に類似しており、基本的にはこうした形状の模倣と考えられる。おそらく、104もそれに近接した時期が想定される。また105は耳栓状の耳部装飾を考慮すれば、やはり101などと同様の段階であろう。

ミズク土偶 ミズク土偶の中の106～108に関しては、既に鈴木氏が論じているように、背面の入組文や頭部装飾から107・108が安行3b式期に、106は前者とは系統を異にするものの顔面輪郭の刻文の様相から3a式期に比定されるものであろう。一方、頭部装飾の異なる109も顔部に107と類似した刺突文があり、同期に比定できる。110・111は縄文施文を欠くが、X字状隆帯上の刻み目の存在から、また112は108の脚部文様との類似から各々3b式に比定できよう。列点文を多用する頭部装飾の省略化された115は3c式期と考えられ、双頭装飾のやや崩れた114も同期であろう。113は「赤城型」ミズク中空土偶との関係が想定されている。この土偶系統の存続期間は、安行3a式後半～3c式前半が安行3b～3c式なのか意見の分かれるところだが、113は体部の文様からみて3b式の前半期と思われる。

東北系の土偶 116～119のうち、116・118については三叉文や隆帯装飾の特徴から、前者が安行3b式期に、後者が安行3a式期に比定されている。117は土版や岩版の文様に類似したS字状入組文が展開するが、文様的には3b式期に該当すると考えられる。119は文様的に118と類似し、それと同期に比定されよう。

遮光器系土偶 120～126は、土版に類似した体部文様をもつ120が安行3c式期に、截復列をもつ121が遮光器系土偶との関係から同じく3c式前半期に比定されている。124は隆起眼手法や仮面状顔面が120と類似するものの、体部の渦巻き文様はやや後出的であり、3c式期後半から3d式期に比定されよう。122・123の時期は判然としないが、刺突文の在り方は3c式土器に類似し、同期であろうか。125は肩部の隆帯が124と類似することから、また126は三叉入組文のあり方からみて、124ともほぼ同期と考えられる。127の頭頂部の目字状モチーフは、安行3b・3c式に平行する「天神原式」に特徴的なものである。眼部の開孔や頭部の形状が、安行3d式期とされる栃木県御雲前遺跡例に似ることを考慮すれば、3c式後半期に比定されよう。

I字文土偶 128～130のI字文土偶は、堀越正行氏により安行3b～3d式末期にかけての5段階の変遷が論じられている。これに従えば、I字文の未完成な128は祖型的な段階として3c式

期に、1字文の末端が横位に連結した129・130が新段階(新)の3d式後半期に比定できるだろう。

浮線文系土偶 131・132は、腰部に巡る浮線網状文やそれに類似した沈線文を千網式土器に対比させることができ、同式期に比定して問題ないだろう。

その他の土偶 133～143は特徴に乏しく、明確な時期判別が難しい。134の口部から体部への食道状の貫通孔は、奈良県橿原遺跡のいわゆる「橿原系列」の土偶の中にも認められる。それらは大洞C1式期に比定されているが、これとの対比が可能ならば安行3d式期となろう。135の背面の弧状入組文を囲む菱形モチーフは、安行3b式土器の文様と関係を有すると思われる。136の頭頂部形態は、104の山形系土偶とも共通し、眉・口・耳部周辺の刺突文も含めて、ミミズク土偶との系統関係でとらえれば、104と同様の3b式期であろうか。また、右頬部の円文は105とも共通し、栃木県後藤遺跡の3a式期の土偶にも認めることができることを考慮すれば、3a式期にまで遡る可能性もある。138・139は判然としないが、楕円形隆起眼を有する点で晩期初頭段階の106・117や「福田系列」などと、何らかの系譜関係を有すると思われる。144・145は設楽博巳氏らによって荒海式期に比定されているが、系譜的には千葉県や埼玉・栃木県方面の有髭土偶とは異なり、長野県水遺跡例との関係が指摘されているところである。

以上、晩期土偶の時間的な位置を概観してみたが、量的に主体を占める安行3a～3d式期をまとめれば次のようになる。大枠でくれば、①山形土偶系、②ミミズク土偶、③東北系、④遮光器形土偶系、⑤I字文土偶の5系統が存在している。各々の主・客体関係は不明だが、3a～3b式期は①～③を中心とし、①は②と③の系統からの影響が色濃く見られる。②のミミズク土偶は、3b式期の後半にはモチーフを含めた造作の簡略化が著しくなり、3c式期には消滅へ向かうようであるが、その一方で3b式期には中空形式(赤城型)が出現し、新たな動きも認められる。この土偶は、遮光器形土偶の影響下に成立したとされるもので、県内では現在のところ113の明和村矢島遺跡例が唯一である。従来までの分布は、埼玉・茨城・千葉県などのかなり狭い範囲に限定されていたが、少なくとも本県の東部域はその圏内に入っていたことを示している。④の遮光器形土偶系については、3c～3d式期での存在が確認できるが、その様相は遮光器形土偶の直接的な系統ではなく、その「形態受容系列」とされるものである。ただ、120～127は中空・中実の別だけでなく、体部裝飾や頭部表現に大きな差異があり、複数の系列に分けられる可能性がある。それは、「天神原式」土器との密接な関係が想定される「目」字状のモチーフをもつ127の存在からも、窺い知ることができる。この遮光器形土偶系と時期的に重複して、3c～3d式期に⑤のI字文土偶が存在する。総数が4点と決して多くはないが、県内での分布は129の赤城村六万遺跡例が示すように、東部域に偏る事なく散在しており、当該期土偶の一角を占めている。

①～⑤以外の系統の存在については、判然としていない。133～143の中には、先の系統以外やそれらの「下位土偶」として把握されるべきものも含まれていると考えられるが、現段階での判別は難しく、もう少し資料の集積が必要な状況にある。

5 お わ り に

群馬県内出土の土偶について、その特徴の記載を主眼としつつ、各研究者の論考を借用して時期や系譜についても概観してみた。内容的には、従来より論及されてきたことの範囲を出るものではなく、むしろ本県の資料により各論考の内容を追認する作業をしたに過ぎないとも言えよう。ただ今回の分析を通じて、県内の土偶の中には後・晩期を中心に既存の系列把握から逸脱するようなものの存在が確認でき、鹽けながらも地域的様相の一端を垣間見ることができたように思う。

本稿で扱い得たものは、土偶の基礎的な資料集積にとどまり、その機能・用途をはじめとして縄文呪術体系の中における土偶祭祀の様相解明には遠く及ばないが、本稿が現在進行中の全国的な土偶研究に少しでも寄与できる点があるとすれば幸いである。不十分な点に関しては、今後の研究を通じて補って行きたいと思う。

本稿を草するに当たり、県内資料の収集過程で桐生市教育委員会の伊藤裕介・増田修の両氏、蕨塚本町教育委員会、赤堀町教育委員会の松村一昭氏や松村英子氏からは未発表資料にもかかわらず、多くの土偶の掲載に快諾を頂戴した。各資料の実見や表1の地名表作成に際しては、新井仁・小野和之・木村 収・塩月美智子・清水眞一・新藤 彰・大工原 豊・高橋浩昭・寺内敏郎・長谷川福次・平田貴正・福田義治・古郡正志・前原 豊・三宅敦気の各氏に貴重な時間を割いて頂き、文献の探索では瓦吹堅氏や原田恒弘氏、外山政子氏の手を煩わせた。また、英文要旨の作成にあたっては、Nathun Sturman氏に御指導をいただいた。そして、小林達雄先生や八重樫純樹先生、能登 健氏をはじめ「土偶とその情報」研究会の構成員各位からは、直接・間接につけて多大な御教示を頂いた。文末ながら記して各氏のご厚意に感謝申し上げる次第である。

尚、本研究の一部は、当事業団の平成6年度研究助成を受けて実施したものである。

(1995年9月29日脱稿)

〔追記〕

脱稿後、鈴木正博氏によるハート形土偶を中心とした後期土偶の論考(1995「土偶インダストリ論」から観た堀之内2式土偶—土偶の編年の位置は土器から、土偶間の動特性は土偶から—「茨城県考古学協会誌」第7号)の存在を知った。鈴木氏の分析手法は、ハート形土偶の文様を注口土器の文様変化に照応させて、その系統的理解や時期比定を行ったものである。本稿も含め、従来より漫然と土器文様との対比が行われてきた感のある当該期の土偶研究にとって、この論考には傾聴すべき点が多々ある。筆者らも図3—27や図6—46等の文様を注口土器のそれに対比したが、着想においては一致したものの、その内容は従来の時期比定方法の範疇を一步も出るものではあるまい。鈴木氏の手法に倣って当県の後期土偶を見直せば、郷原遺跡のハート形土偶(図4—31)を初めとして、その多くのものが時間的位置付けの変更を迫られることになる。鈴木氏の提唱する「土偶の編年の位置は土器から、土偶間の動特性は土偶から」という方針に学び、県内の土偶を再考する機会を得たいと思う。

註

- (1)a. 外山和夫 1981 「群馬の土偶」『群馬歴史散歩』47号 群馬歴史散歩の会
b. 外山和夫 1982 「群馬県における土偶・土版・岩版の集成1」『群馬県立歴史博物館紀要』第3号
- (2) 能登 健 1983 「土偶」『縄文文化の研究』9 雄山閣
- (3) 出土遺跡や総個体数の把握に当たっては、実物あるいは図・写真等で確認できるものに限定した。従って、報告書や市町村誌等にその出土事実が記載されているだけのものは、表1から除外してある。
- (4) 関根慎二 1987 「糸井宮前遺跡Ⅱ」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (5) 赤山容造・他 1980・1991・1992 「三原田遺跡」第1・2・3巻 群馬県企業局
- (6) 能登氏は、特異な出土状態を示す代表例として扱われてきた群馬遺跡のハート形土偶についても以下の問題点を上げ、再考の必要性を指摘している。①報告者の山崎義雄が土偶の出土状況について聴取した人物は、道路工事での発見現場を見ていない。②土偶が出土したとされる「石圍み状遺構」は、山崎との対話をもとにした江坂輝弥氏の想像図と考えられる。③江坂氏が共伴資料として紹介した土器は、中期の土器である。これらの点を踏まれば、群馬遺跡の事例を「土偶の特殊な出土状況」を示すものとして扱うことには、少なからず問題があるだろう。
能登 健 1992 「群馬県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
山崎義雄 1954 「群馬県原田遺跡出土の土偶について」『考古学雑誌』第39巻第3号 日本考古学会
- (7) 山本寿々雄・他 1973 「中谷遺跡」都留市教育委員会
- (8) 27Aは人面付き土器あるいは単孔土器として、原田昌幸氏や堀越正行氏らにより紹介されている。筆者らがこれを実見した折、調査担当者の伊藤晋吉・増田修四氏から近接した地点より出土した27Bの顔面部資料を拝見させていただいた。27Aの体部上端は欠損しているために27Bとの接合点はないが、体部上端の横断面の楕円形状の形態と口径が顔面部のそれと一致すること、それに縄文原形や油土・色調・研磨による精緻な造作等が共通することなどから、これらが同一個体の筒形土偶であると断定するに至った。
a. 原田昌幸 1995 「日本の美術2 土偶」No345 至文堂
b. 堀越正行 1995 「祭祀関連遺物」『土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』土偶とその情報研究会
- (9) 金子昭彦 1993 「関東地方の遮光器系土偶—東北地方の遮光器土偶との異同—」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- (10) 小野正文 1992 「山梨県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
- (11) 原田昌幸 1995 註8aの文献に同じ。
- (12) 藤原邦彦 1992 「宮城県土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
- (13) 井上義安・他 1991 「諏訪台遺跡」大宮町諏訪台遺跡発掘調査会
- (14) 松本 茂・他 1982 「七郎内C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告X』福島県文化センター
- (15) 東京都埋蔵文化財センター 1990 「資料目録4」
- (16) 安孫子昭二・山崎和巳 1992 「東京都の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
- (17) 小松 度・大久保知巳 1983 「東京遺跡」『長野県史 考古資料編 全1巻3 主要遺跡(中・南信)』長野県史編纂委員会
- (18) この住居は円形土器を有するが、この土器が縄文の埴田中のどれに該当するのかわ明記されていない。本稿では出土状況写真との照合を通じて、63頁埴田12の1または2の土器が埴田土器と判断した。
藤田芳雄 1970 「六、上平(大門)」『家の郷土史』茨城県土史編纂委員会
- (19)a. 安孫子昭二 1991 「多摩の土偶」『多摩のあゆみ』第62号 多摩中央信用金庫
b. 安孫子昭二・山崎和巳 1992 註16の文献に同じ。
- (20) 安孫子昭二 1991 註19aの文献に同じ。
- (21) 赤山容造 1991 「三原田遺跡」第二巻 群馬県企業局
山口逸弘 1988 「新巻遺跡出土土器について」『群馬県の考古学—10周年記念論集—』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (22) 松本 茂・他 1982 註14の文献に同じ。
- (23)a. 植木 弘 1990 「土偶の形式と系統について—東日本の後期前半における三形式の土偶をめぐって—」『埼玉考古』第27号
b. 植木 弘 1995 「筒形土偶の系譜とその周辺」『土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』土偶とその情報研究会
- (24) 山内清男 1939 「先史土器図譜」第1輯 先史考古学会
- (25) 山内清男 1939 註24の文献に同じ。
- (26) 瓦吹 堅 1985 「常陸の土偶—那珂郡東海村を中心として」『大森信英先生選評記念論文集 常陸国風土記と考古学』雄山閣
- (27) 上野修一 1989・1991 「北関東地方における後・晩期土偶の変遷について—栃木県藤岡町後藤遺跡出土土偶を中心として—(上)・(下)」『研究紀要』第6・8号 栃木県立博物館
- (28) 植木 弘 1990 註23aの文献に同じ。
- (29)a. 上野修一 1990 「ハート形土偶」『季刊考古学』30 雄山閣
b. 上野修一 1995 「ハート形土偶の系譜とその周辺」『土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土

- 例の終焉まで」土偶とその情報研究会
- 37 は手足に指の表現があり、後期の土偶とすることを疑問視する向きもある。1990年に天神原遺跡を発掘調査した大工原豊氏は、遺構・遺物分布の詳細な分析結果から、当該資料が縄之内式期の土偶であるとの結論を下している。
- 大工原豊・林 克彦 1994 「4 天神原遺跡」『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会
- 41 松本太郎 1993 「東京都北区東谷戸遺跡出土の後期土偶」『考古学研究』40-1 考古学研究会
- 42 中島広順 1994 「西ヶ原貝塚Ⅱ・東谷戸遺跡」北区教育委員会
- 43 植木 弘 1990 註23aの文献と同じ。
- 44 植木氏は註23aの文献中で35を板状形式bに分類しているが、本稿では34との形態・文様の相同性から自立形式と認定し、ハート形土偶に含めた。
- 45 上野修一 1995 註29bの文献と同じ。
- 46 川上博義 1979 「権塚貝塚」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』
- 47 浜野美代子 1988 「一土偶一」『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 48 森脇 淳 1995 「飯島コレクションの土偶・土製品」『史館』第26号
- 49 森脇 淳 1995 註37の文献と同じ。
- 50 上野修一 1991 註27の文献と同じ。
- 51 目黒吉明 1953 「上岡遺跡」
- 52 松崎 真 1990 「角間遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 8』福島県文化センター
- 53 内田儀久 1983 「千葉県佐倉市井野井部遺跡出土の異形付土器(Ⅱ)」『余和』21
- 54 中山清隆・塚原正典 1984 「土製品」『なすな原遺跡-No.1地区調査』なすな原遺跡調査会
- 55 森崎 健・他 1991 「新屋遺跡」上山町教育委員会
- 56 馬場保之・他 1994 「中村中平遺跡」飯田市教育委員会
- 57 新津 健 1989 「金生遺跡」山梨県教育委員会
- 58 南宮正樹 1987 「石堂B遺跡」高槻町教育委員会
- 59 安孫子昭二・山崎和巳 1992 註16の文献と同じ。
- 60 宮下健司 1995 「長野県における縄文時代後期の土偶」『研究紀要』第1号 長野県立歴史館
- 61 植木 弘・植木智子 1988 「第二の道具」『古代史復元3 縄文人の道具』講談社
- 62 この弧状の縦長乳房をもつ後期土偶は、山梨県石堂遺跡の土偶の中に見られ、小野正氏はこれを胸元の逆「の」字状文から加賀川B1式に比定している(註10文献)。しかし、関東地方の事例と比較した場合、肩部に連続して弧状に垂れ下がる縦長の乳房や腹部の脚状区画文は、埼玉県駒形遺跡例に見られるように4段階の特徴の1つであり、肩部から胸部にかけての刺突文もF期の84と共通している。また腹部背面の突起も、やはり4段階の86に認めることができ、「箱付土偶」と関連をもつ要素と考えられる。このように、石堂遺跡例は全体的にみれば曾谷式後平期にまで下る特徴を有しており、それは胸端部の外反や短足のプロポーションにも窺える。
- 63 上野氏によれば、後藤系列は福田・権塚系列とともに1段階の加賀川B2式期より出現するとされるが、後藤遺跡の後藤系列の中に1段階の資料はなく、同遺跡第7図47の胸部資料を端部の対弧状の沈線文のみで2段階とするには根拠が弱い。また同じ2段階の第9図93は、縄文施文の横帯文を有する点で、福田系列とすべきではないだろうか。この二つを除けば、他は全て3～4段階となる(註27文献)。これまで、後藤系列にも顕著な後頭部にC字状隆帯を貼付する山形土偶は、高井東式土器との関係で論じられてきたが、後藤系列の出現はこれに連動した時期の可能性も考えられる。また、上野氏が金洗沢系列とするものは、後藤系列の多くの要素を包含しており、両者の区別が不明確である。体軀形状を重視するよりも、むしろ眼・口部や頸部の隆起表現に着目して、本稿の図7-58・59などを金洗沢系列とした方がより整合性があるのではないだろうか。恐らくこれらは、後藤系列の影響を受けて権塚系列から派生したものであろう。
- 64 塚本勝也 1995 「渡良瀬川・思川流域の諸様相」『土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶-山形土偶の終焉まで-』土偶とその情報研究会
- 65 手塚 均 1994 「後期後半の東北南半」『土偶シンポジウム2 秋田大会 東北・北海道の土偶』土偶とその情報研究会
- 66 浜野三代子 1995 「東北部の動向」『土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶-山形土偶の終焉まで-』土偶とその情報研究会
- 67 国学院大学考古資料館 1986 「余山貝塚資料図譜」
- 68 河野辰男 1987 「思家橋遺跡」総和町教育委員会
- 69 川崎純徳 1985 「VI 土製品および土偶・土版」『外塚遺跡』下館市教育委員会
- 70 原田昌幸 1984 「成田市殿台遺跡出土の土偶」『余和』22 余和同人会
- 71 上野修一 1991 註27の文献と同じ。
- 72 鈴木正博 1989 「安行式土偶研究の基礎」『古代』第87号 早稲田大学考古学会
- 73 金子昭彦 1993 註9の文献と同じ。
- 74 外山和夫 1982 註1bの文献と同じ。
- 75 植木 弘 1993 「安行期土偶の研究 その1-山形土偶系統と遠光器土偶系統の展開-」『埼玉考古』第30号
- 76 新津 健 1993 「山梨県における後晩期土偶」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会

- 66 植木 弘 1993 註64の文献に同じ。
- 67 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- 68 山本哲也 1989 「君津地方の土偶」『君津都市文化財センター研究紀要』III
- 69 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- 70 川島正一 1995 「矢島遺跡河川敷部分試掘調査報告書」 邑楽郡明和村教育委員会
- 71 浜野美代子 1993 「選光器系土偶の考察(1)」『研究紀要』第10号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 72 植木 弘 1993 註64の文献に同じ。
- 73 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- 74 金子昭彦 1993 註9の文献に同じ。
- 75 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- 76 金子昭彦 1993 註9の文献に同じ。
- 77 林 克彦 1994 「VI-3 天神原遺跡の縄文後・晩期の土器群について」『中野谷地区遺跡群一本文編一』 安中市教育委員会
- 78 金子昭彦 1993 註9の文献に同じ。
- 79 棚越正行 1993 「I字文土偶、その系統と分布」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- 80 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- 81 上野修一 1991 註27の文献の第8図32。
- 82 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- 83 荒巻 実・設楽博巳 1985 「有翼土偶小考」『考古学雑誌』第71巻第1号 日本考古学会
- 84 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- 85 植木 弘 1993 註64の文献に同じ。
- 86 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- 87 鈴木正博 1982 「埼玉県高井東遺跡の土偶について」『古代』第72号 早稲田大学考古学会

図版・地名表の引用文献

- 1 小林徳助 1926 「利根郡一地方の出土品につきて」『上毛及上毛人』第116号 上毛郷土史研究会
- 2 金沢佐平 1929 「吾妻郡より発見の土偶に就いて」『上毛及上毛人』第171号 上毛郷土史研究会
- 3 中谷治宇二郎 1929 「吾妻郡各久田村赤坂出土の土偶に就いて」『上毛及上毛人』第142号 上毛郷土史研究会
- 4 群馬県利根郡教育会 1930 「利根郡誌 全」
- 5 田島宗二 1937 「邑楽郡小泉出土の石器時代土偶に就いて」『上毛及上毛人』 上毛郷土史研究会
- 6 鶴岡金光 1940 「利根郡白澤村出土の珍型土器」『上毛及上毛人』第280号 上毛郷土史研究会
- 7 上毛郷土史研究会 1941 「板倉沼出土の土偶 博物館へ陳列する」『上毛及上毛人』第291号
- 8 神林淳雄 1943 「筒形土偶に就いて」『人類学雑誌』第58巻第6号
- 9 山崎義男 1949 「群馬県原出土土偶について」『考古学雑誌』第39巻第3・4合併号
- 10 園田芳雄 1954 「千瀬谷戸」 岡毛考古学会
- 11 酒田伸男 1954 「群馬県神流川流域の遺跡」『人文学』14号
- 12 山崎義男 1958 「歴史 先史時代」『勢多郡誌』
- 13 江坂彌弥 1960 「土偶」 校倉書房
- 14 群馬県立博物館 1963 「『先史時代の美術展 目録』
- 15 川合 功 1964 「上野村中越出土の土偶」『こいのす』29号 群馬大学歴史研究部
- 16 野口義重 1964 「土偶」『日本原始美術 2 土偶・装身具』 講談社
- 17 白沢村誌編纂委員会 1964 「白沢村誌」
- 18 梅沢重昭 1965 「安中市中野谷天神原出土の土偶」『群馬県立博物館報』7 群馬県立博物館
- 19 梅沢重昭 1968 「下久保ダム水没地埋蔵文化財発掘調査報告書」 下久保ダム水没地埋蔵文化財調査委員会
- 20 園田芳雄 1970 「六、上平(大門)」『美の郷土史』 蕨町郷土史編纂委員会
- 21 鬼形芳夫 1973 「高崎市八幡山遺跡出土の土偶」『まえあし』14号 東国古文化研究所
- 22 大沢末男 1974 「第一章 原始から古代へ」『吉井町誌』
- 23 近藤義雄 1975 「(一)縄文式文化時代」『箕郷町誌』 箕郷町誌編纂委員会
- 24 高橋 徹 1975 「遺跡は語る」 喚呼堂
- 25 唐沢定市 1976 「原始古代」『中ノ条町誌』第一巻
- 26 永幸光一・水野正好編 1977 「日本原始美術大系 3 土偶・埴輪」 講談社
- 27 伊藤裕祐・増田 修 1978 「千瀬谷戸遺跡発掘調査報告」 桐生市教育委員会
- 28 伊藤裕祐・増田 修 1980 「千瀬谷戸遺跡調査報告」 桐生市教育委員会
- 29 松村一昭 1980 「五目牛洞山遺跡発掘調査概報」 赤堀村教育委員会
- 30 外山和夫 1981 「群馬の土偶」『群馬歴史散歩』47号 群馬歴史散歩の会
- 31 小島純一 1981 「稲荷山K1・安通、洞A3」 粕川村教育委員会

- 32 岡谷英治 1982 『大原道東遺跡発掘調査報告書』 館林市教育委員会
- 33 外山和夫 1982 『群馬県における土偶・土版・岩版の集成1』『群馬県立歴史博物館紀要』 第3号
- 34 前原 豊 1982 『第IV章第7節 谷地遺跡』『C4小野地区遺跡群発掘調査報告書』 藤岡市教育委員会
- 35 能登 健 1983 『土偶』『縄文文化の研究』9 雄山閣
- 36 能登 健 1983 『唐城遺跡』 吾妻町教育委員会
- 37 松村一昭 1983 『洲山古墳及び北通、虎巣遺跡発掘調査概報』 赤堀村教育委員会
- 38 茂木由行 1983 『黒熊遺跡群発掘調査報告書(3) 図版編』 吉井町教育委員会
- 39 藤巻幸男 1984 『Ⅲ-1 縄文時代の遺構と遺物』『小町田遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 40 寺内敏郎 1984 『7. 谷地遺跡』『第17回企画展 遺跡は語る』 群馬県立歴史博物館
- 41 藤巻幸男・坂岡正信 1984 『第5章 縄文時代の遺跡分布 図版解説』『新里村の遺跡—遺跡詳細分布調査報告—』 新里村教育委員会
- 42 岡谷英治 1985 『上ノ前遺跡発掘調査報告書』 館林市教育委員会
- 43 伊藤裕祐・増田 修 1985 『千綱谷戸遺跡発掘調査概報』 桐生市教育委員会
- 44 新藤 彰 1985 『新井第II地区遺跡群発掘調査概報』 榑東村教育委員会
- 45 能登 健 1985 『郷原遺跡』 吾妻町教育委員会
- 46 若月省吾 1985 『笠懸村誌』上巻 笠懸村誌編纂室
- 47 荒巻 実・他 1986 『C11 神II遺跡』 藤岡市教育委員会
- 48 石井克巳 1987 『狩猟採集と農耕の開始』『子持村誌』上巻
- 49 志村 哲 1987 『国道254号線埋蔵文化財発掘調査報告書—A3山間遺跡—』 藤岡市教育委員会
- 50 半田勝巳 1987 『石之塔遺跡』 榑東村教育委員会
- 51 関根慎二 1987 『糸井宮前遺跡II』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 52 寺内敏郎 1988 『第3章第2節 遺物』『C7神明北遺跡・C8谷地遺跡』 藤岡市教育委員会
- 53 上野修一 1988 『第23回企画展 祈りの原郷』 栃木県立博物館
- 54 内田憲治 1988 『城遺跡』『群馬県史 資料編1』
- 55 関根慎二 1988 『糸井宮前遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 56 茂木 努・志村 哲 1988 『藤岡北山遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 57 新藤彰・小宮俊久 1988 『下新井遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 58 新井嘉男・外山和夫・飯島義雄 1988 『清水遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 59 能登 健 1988 『群馬県史 資料編1 原始古代1 口絵』
- 60 下条 正 1988 『深沢遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 61 能登 健・藤巻幸男 1988 『布施遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 62 山下敏信 1988 『天神遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 63 小林敏夫 1988 『北米岡遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 64 岡谷英治 1988 『大原道東遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 65 茂木由行 1988 『黒熊第5遺跡』『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 66 山口逸弘・丸山公夫 1988 『深沢遺跡・前田原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 67 江坂輝彌 1989 『板倉遺跡 類に八の字文様のある中空土偶』『板倉町史 考古資料編 別巻9』 板倉町史編さん委員会
- 68 外山和夫 1989 『板倉遺跡発掘調査報告書』『板倉町史 考古資料編 別巻9』 板倉町史編さん委員会
- 69 金子正人・長島都子 1990 『羽賀北曲輪遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 70 女屋和志雄 1990 『(3) 表土出土遺物』『下佐野遺跡 I地区・寺前地区I』 縄文時代・古墳時代編① 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 71 伊藤裕祐・増田 修 1991 『千綱谷戸遺跡発掘調査概報』 桐生市教育委員会
- 72 川嶋正一 1991 『矢島遺跡発掘調査報告書』 明和村教育委員会
- 73 新藤 彰 1991 『茅野遺跡概報』 榑東村教育委員会
- 74 藤巻幸男・他 1991 『第4章 縄文時代の遺構と遺物』『大平台遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 75 近江屋成陽 1991 『大道遺跡』『横依遺跡群II(本文編)』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 76 西田健彦 1989 『大道遺跡』『阿弥陀井戸遺上・伊勢山・大道・山王・明神山』 群馬県教育委員会
- 77 増田 修・萩原清史 1991 『千綱谷戸遺跡91発掘調査概報』 桐生市教育委員会
- 78 山武考古学研究所 1992 『山武考古学研究所設立二十周年特別展 古代の西毛』
- 79 津金沢吉茂 1993 『第2章 縄文時代』『妙義町誌(上)』 妙義町誌編さん委員会
- 80 三宅敦気 1993 『縄文時代後・晩期のムラ—群馬県月夜野町矢郷遺跡—』『東国史論』第8号
- 81 新井 仁 1993 『内匠上之宿遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 82 藤巻幸男 1993 『五日牛清水田遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 83 長谷川福次 1993 『前中後II遺跡』『村内遺跡1』 北橋村教育委員会
- 84 大工原寛・林 克彦・他 1994 『4 天神原遺跡』『中野谷地区遺跡群』 安中市教育委員会

- 85 瓦次 堅 1994 『特別展 東国の土偶』 茨城県立歴史館
- 86 川島正一 1995 『矢島遺跡河川敷部分試掘調査報告書』 明和村教育委員会
- 87 新井 仁 1995 『下高瀬寺山道跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 88 大賀 健・他 1990 『15.下鎌田遺跡(本調査)』『山武考古学研究所年報』№7
- 89 1992 『20.五科II道跡』『山武考古学研究所年報』№9

参考文献

- 1 小林達雄 1977 「祈りの形象 土偶」『日本陶磁全集』3 中央公論社
- 2 水嶋光一 1977 「呪詛的形象としての土偶」『日本原始美術大系 土偶・埴輪』講談社
- 3 鈴木正博・鈴木加津子 1979・1981 『取手と先史文化』上・下巻 取手市教育委員会
- 4 鈴木正博 1980 「『曾谷式』研究序説」『古代探叢』
- 5 鈴木正博・鈴木加津子 1982 「安行36式研究の序—山内清男博士の学説から鈴木公雄氏の新説を批判する—」『土曜考古』56 小林康男 1983 「縄文中期土偶の一姿相—いわゆる河童型土偶について—」『長野県考古学会誌』46
- 7 鹿野光行 1983 「安行の土偶発見」『歴史公論』第9巻9号
- 8 米田耕之助 1983 「土版」同上
- 9 宮下健司 1983 「縄文土偶の終焉—容器形土偶の周辺—」『信濃』第35巻第8号
- 10 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究(1)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2
- 11 原田昌幸 1983 「発生期の土偶について」『奈和』21 奈和同人会
- 12 神村 透 1984 「下伊那性を示す有御尻張り立像土偶」『中部高地の考古学』III 長野県考古学会
- 13 奥山和久 1984 「中部山岳地帯に於ける縄文中期土偶の基礎的研究」『中部高地の考古学』III 長野県考古学会
- 14 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究集録』第5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 15 磯前順一 1985 「筒形土偶について」『常総台地』13
- 16 安孫子昭二 1988・1989 「加曾利B様式土器の変遷と年代(上)・(下)」『東京考古』6・7
- 17 津布繁一樹 1989 「益子町御堂前道跡出土の土偶」『Aesculus』1
- 18 鈴木保彦 1990 「筒形土偶」『季刊考古学』30 雄山閣
- 19 瓦次 堅 1990 「山形土偶」同上
- 20 山崎和巳 1990 「みみずく土偶」同上
- 21 浜野美代子 1990 「縄文土偶の基礎研究」『古代』第90号 早稲田大学考古学会
- 22 塚本節也 1990 「北関東・南東北における中期前半の土器様相—縄文地に有筋沈線を施文する土器群について—」『古代』第89号
- 23 瓦次 堅 1991 「水戸市金洗沢道跡の土偶」『茨城県立歴史館報』18
- 24 埼玉県考古学会・土偶とその情報研究会 1992 「シンポジウム 縄文時代後・晩期安行文化—土器型式と土偶型式の出会い—」『埼玉考古』別冊4
- 25 西田泰民 1992 「縄文土版」『古代学研究所 研究紀要』第2輯
- 26 寺内隆夫 1992 「浅間山東側からの視線、西側からの視線」『長野県考古学会誌』67
- 27 安孫子昭二 1993 「高井東様式大波状口縁深鉢」の編年と分布」『東京考古』第11号
- 28 土偶とその情報研究会 1994 「土偶シンポジウム2 秋田大会 東北・北海道の土偶」土偶とその情報研究会
- 29 土偶とその情報研究会 1995 「土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の経路まで—」
- 30 能登 健 1995 「土偶にこめられた縄文人の心」『東アジアの古代文化』84号 大和書房

Summary

Clay Figurines of Gunma Prefecture in the Jomon Period

— Their Changes and Local Features —

by FUJIMAKI Yukio and ISHIZAKA Shigeru

Clay figurines were symbolic artifacts which were used at magical ceremonies in the Jomon period. Their prevalence often differed with time and place in Japan. If we distinguish some types of clay figurines or examine the differences between them, we will be able to better understand the periodization of early society in which magic played an important role. That is the main aim of this paper.

Accordingly, we have tried to analyze the typological classification and systematic relations of clay figurines of present day Gunma Prefecture. The results of our study are as follows:

1) Clay figurines appeared in the eastern Kanto District (Central Japan) in the Incipient Jomon period earlier than elsewhere in Japan. In the area of present day Gunma, they first appeared in the Early Jomon period. They have been classified into a few types, which had systematic relations to clay figurines of the same period of the Tohoku (the northeast of Honshu) and Chubu (the center of Honshu) Districts. Clay figurines disappeared for a time at the end of the Early Jomon period in Gunma, as elsewhere in the Kanto District.

2) In Gunma Prefecture, a small number of clay figurines existed in the Middle Jomon period. They were styled after those of the Chubu and western Kanto Districts. They disappeared during the end of the Middle Jomon period. In Chubu District, about 3,000 pieces of clay figurines have been excavated up to now, and they account for 30 percent of all clay figurines in Japan. That is, there is a possibility that the structure of the rituals in the area of present day Gunma is different from that of Chubu, which is approximately 100 kilometers to the southwest, separated by mountains and other geographical barriers.

3) In the first half of the Late Jomon period, clay figurines of at least three types appeared in the area of present day Gunma. These were styled along lines of those from southern Tohoku District, but they slowly disappeared. In the latter half of the Late Jomon period, new type clay figurines appeared in the present day Gunma area. They were similar to those found in Tohoku, and were made in large numbers. There was a clear line of demarcation between the latter half and the first half of the Late Jomon period.

4) In the first half of the Final Jomon period, a few types had systematic relations to clay figurines of the latter half of the Late Jomon period. In addition, there was another type which was copied from Tohoku. In the latter half of the Final Jomon period, there were a few local types and a unique type which had been styled from the eastern Kanto area. At that time, the influence of the Tohoku area's artisans was minimal. In the end of the Final Jomon period, there were only a few clay figurines which had been copied from those of Chubu, and they subsequently went out of use.

As a result, clay figurines found in Gunma Prefecture had systematic relations with those districts, but these systematic relations varied with each stage in the Jomon period. Next time, we will analyze the social background of these local features of the present day Gunma area.

Key Words

Jomon period, clay figurines, magic, early society, systematic relations, Gunma Prefecture, local features, Tohoku District, Chubu District

* Gunma Archaeological Research Foundation 784-2 Shimohakoda Oaza Hokkitsu-mura, Seta-gun Gunma-ken Japan

紋様を剥がされた土器

——縄紋時代中期の土器廃絶例について——

土 肥 孝・中 東 耕 志・山 口 逸 弘

ま え が き

群馬県勢多郡北橋村房谷戸遺跡は、昭和58（1983）年に関越自動車建設に伴う事前調査として埋蔵文化財の発掘が行われた。その結果、旧石器時代石器群、縄紋時代中期の集落、古墳時代から歴史時代の集落と各時代にわたる遺物・遺構が発見され、その概要は房谷戸遺跡Ⅰ・Ⅱ⁽¹⁾として刊行されている。中でも縄紋時代中期の土器は、阿玉台・新道・勝坂式の各型式が混在して、利根川を介在して他地域と交流する赤城山西南麓の様相を良く示しているといえよう。これらの土器群のうち、10個がその様相を良く示すものとして、平成3年6月21日に国の重要文化財に指定された。

重要文化財指定を受けて、平成5年4月にこれら10個の土器の修理事業が計画され、筆者の一人である土肥が事業団を訪れて、修理計画をおこなった。修理は石膏によって整形された土器を解体・強化し、石膏部分を樹脂製の補填剤におきかえ、さらに再接合・再組み立てするものであった。その際、欠損部の紋様をどこまで復元して整形するかは重要な設計となる。それらの検討をおこなっている際、報告書口絵の第125号土壇出土深鉢形の口縁部紋様（耳状突起）の欠失の様子がおかしいことに気付いた。調査報告書作成および重要文化財指定調査作成の際には気付かなかったのであるが、これは、何らかの意図のもとに、耳状突起が剥がされたのではないかと考えられたのである。そのような観点から、この欠失した楕円形区画はあえて復元しなかった。これらの欠失がいかなる意味をもつのか推察するのが本論の目的である。

1 土 器 の 観 察

a 出土状態・遺存状況

本論の対象となる125号土壇出土土器は、房谷戸遺跡全体では集落の南側の居住区に近い部分の土壇群中に存在する。土壇の中位から下位にかけての深さ（検出面から30cmの深さであるが、実際には当時の遺構面はさらに地表面近くにあったと想定されるから30cm以上の深さに土器の最下部が存在したと考えるべきであろう。そうすると突起頂部から底部までの全高は、当時の地表面に露出しない。また、盛土をせずに土壇内に納まるサイズの土器であったことが判る）から出土した。覆土中にはこの土器の他に、同時期もしくはやや新期に属すると思われる勝坂式土器の胴部破片（1図）と大形の角礫が2個出土している。

125号土壇の遺構図（1図）をみると、口縁部を下にして深鉢形土器を倒置している状態が把握できる。それが、地傾斜その他の自然的要因による土圧の影響によって南側に傾いた出土状態で

あった。割れた破片の一片一片が比較的大きいため、この状況は土器を破壊して土壌内に投棄したものでないことを示している。また、本土器は耳状突起の一部・胴部紋様の一部の2ヶ所を除いて完形である。器体としての残存率は99パーセントを越え、完形品として土壌内に存在していたと考えられる。2ヶ所の欠失部は、埋蔵されていた期間中に土圧で割れた破片の、発掘調査時の採集エラーでなかったかと考えられる範囲のものである。このような状況下で、大突起周囲の対象部の耳状突起の欠失は、採集エラーとは考えられず、当初から欠失した状態で125号土壌内に置かれたといえよう。

125号土壌の規模は、長径（南西～北東方向）1.1m、短径（南東～北西方向）で0.9mである。これは、検出面での規模である。実測図では掘り込み面での土壌の断面図は正確に土壌の長径・短径を直交させて描かれてはいないが、西壁中位に段をもつ。そして、東側部分は一段深くなっているが、その深くなった部分には「3」（暗褐色土）と記される土壌が充填している。「3」の土壌は墳底を平坦するために入れられた土と考えられる。倒置された土器の口縁部は西壁中位の段の面から約5cm浮いた状態である。

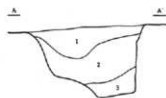
中位の段の長径は70cmであるが、土壌北東部は傾斜があるため、中位の段での有効空間スペースは、長径で1m以上となる。これらの観点から、125号土壌中位の段のスペースには成人男子を南西～北東方向に屈葬させることは充分可能である。これは、前期末～中期初頭の関東地方にみられる、土器を倒置したいわゆる「被壙葬」と認識できるものであろう。大形の角礫もその「被壙葬」に伴う遺物とすることができよう。これらが、「抱石」であったかどうかは決定しがたいが、出土位置からみるとその可能性は考えられる。

以上のような諸点より、本土器は、125号土壌の中位に置かれた遺体の頭部に倒立状態で被されたものであり、欠失する耳状突起は、土壌内に入れられる前に既に剝がれていたとみることができる。

b 文様の剝がれ方の観察

本土器は実測図に示されるごとく（1図）、大突起を中心とした左右対称部の、口縁部紋様の最も大きな割合を占める部分の隆起紋様が欠失している。欠失する紋様は楕円形紋であり、その両側にみられる耳状突起と同様な、上部が太く高い粘土紐、下部がやや細く低い粘土紐で施紋されていたと考えられる。紋様は左右対称ではなく、大突起左側の楕円形紋は、楕円区画の中にさらにもう一つ楕円形紋のみが欠失し、その外を囲むような楕円形紋の隆線の一部が残存している（1図、巻頭写真参照）。

欠失した楕円形区画は、大突起右部では左から下部にかけての部分、大突起左部では下部の一部で隆線が辛うじて残存している。上部と右下部は剝落が激しい。この点より、耳状突起風の楕円形区画は、土器を正立させて、区画上部の太く高い粘土紐（隆線部）をつまむような形で右下部へ引き剝がれている状況が観取できる。楕円形区画内には耳状突起区画内にみられるような矢羽根状の角押紋が施されていたとみられるが、欠失した楕円形区画内には、角押紋の押圧痕跡は

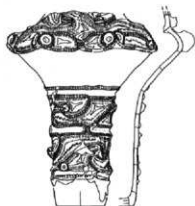


- 1 黒褐色土 SP粒を少量含む
 2 暗褐色土 SP粒・ローム粒を多量に含む
 3 暗褐色土 2に類似。やや暗い
 SP=浅間白糸台パミス An-SP



第1図 房谷戸遺跡125号土坑・出土土器

認められない。楕円形区画内は、器形を造り上げた後にさらに表面に粘土を上塗りし、その後に上塗り粘土上に矢羽根状の角押紋を施すという、いわゆる「化粧がけ」手法がとられていたものと考えられる。「化粧がけ」は土器断面の観察で判明するが、新道式・勝坂式土器にはしばしば見られる。房谷戸遺跡でも585号土壇出土品(2図)などに見られるが、量的には極めて少数である。



第2図 房谷戸遺跡585号土壇出土土器

「化粧がけ」した部分は、粘土上に粘土を「接着」するわけであるから、急激な環境変化(土器焼成時)に割れやすい。しかし、本土器のように大突起の左右対称位置で、それも測ったように楕円形部分のみが割れ落ちることは考え難い。そして、そのような「撥ね物」であれば、あえて土壇内に供することはしないと考えられる。本土器は内面に煤が付着しており、何らかの目的で使用された土器であることは間違いない。これらの諸点からも、楕円区画紋様を意図的に割がし、土壇内に持ち込んだと推察できるわけである。ここで注意しなければならないことは、縄紋時代中期の同時期に、割れやすいよう、壊れやすいように焼成される土偶⁽⁵⁾が存在することである。房谷戸遺跡では土偶が1点も出土していないということは注目すべきである。紋様を割がすという行為は「本来完全なものを意図的に損なう」という点において共通している。この点については別項で考察したい。

c 土器について

本論において検討する土器について記述しておきたい。本土器は大・小2個の突起をもち、口縁部はゆるやかに湾曲する。胴部から頸部にかけてはやや傾きの強い外開きとなる。

胴部は下半においてやや膨らみ、底部に至る。本土器の最小径は、胴部紋様帯を二分する区画線にあたる隆線付近となる。実測図の断面形で表現される以上に、実際はメリハリのつく土器である。

口縁部に付く大突起は菱形を呈し、周縁に貼り付けられた断面蒲鉾状の隆線には、幅広の爪形紋が施されている。また、口縁端上にはさらに同じ幅広の爪形紋が1条巡らされ、突起上半では、2条の幅広の爪形紋が縁取り風に巡らされている。突起下半は2条の隆線が巡る。これは、突起上半の2条の幅広の爪形に対応するもので、蒲鉾状の隆線に同様の爪形が施されている。その2条の隆線の間、そして突起上半の隆線の内側には細かい矢羽根状沈線は角押紋風になっている。菱形突起の中央には粘土紐を貼付けた円紋が配され、隆線上には幅広の爪形、その外周には矢羽根状沈線が角押紋風に施される。この円紋の内部には粘土粒が充填される。この円紋を囲むように三角形彫刻紋が三方に配され「玉抱き紋」の意匠を表現している。

小突起は突起部分にあたる半円部に、大突起上半部と同様に2条の幅広の爪形が施される。半

円状の突起内には左回り（反時計回り）の隆線が貼付され、その末端は耳状突起を配する区画隆線と合致する。この円紋の内部には、大突起と同様に粘土粒が充填されている。小突起の裏面には、表面と同様、左回り渦巻きが隆線で施される。表裏面とも隆線上には幅広の爪形紋、隆線間に矢羽根状沈線を施すのは大突起部と同一手法であり、この手法が口縁部・胴部紋様の各所に一貫して採用されている。

大突起下に隆線の円紋を施し、この円紋の中心部には刺突の円紋を配している。この刺突の円紋は、大突起中心部の粘土を詰め込む円紋と凹と凸という対置装飾となる。小突起下には1条の垂下する隆線を施し、「円と直線」という、これまた対置装飾となっている。

口縁部紋様は、この大・小突起下に施される「円と直線」によって2分割された面に施される。この2分割された各面には3つの楕円形区画が割り付けられ、その左右の各区画内にはいわゆる「耳状突起」が各1個配される。「耳状突起」は、上半の半円部が粘土紐を指でひきのばした形で盛り上がっている。下半の鋸歯部は他の各部で用いられる蒲鉾状の隆線となっている。

「耳状突起」と楕円形区画の空隙部には、蛇行状の矢羽根状沈線・三角彫刻紋が加えられる。この配置は大・小突起各々を中心としてみると、向かって右側には三角彫刻紋、左側には蛇行状の矢羽根状沈線が配される。これは明らかに意図された紋様配置であり、本土器は口縁部紋様では、上下・前後・左右という視点において、対置装飾法が採られていることが理解できる。

欠失した中央部の楕円形区画は大突起に向かって右側は単純な楕円形区画なのに対し、左側は楕円形区画の内にさらに楕円形区画を配する「複合楕円形区画」となっている。右側の楕円形区画の周辺には三角彫刻紋が配され、左側の「複合楕円形区画」の周辺には蛇行する矢羽根状沈線が配される。大突起に向かって右側の面は三角形彫刻、左側の面は蛇行する矢羽根状沈線で装飾しようとする意図が明確にうかがわれる。楕円形区画を構成する隆線はその両側の耳状突起と同様に、上半部は粘土紐を指で引き伸ばし、盛り上げていたものと考えられる。下半はその残存状態から蒲鉾状の隆線で構成されていることが分かる。このような区画紋であったため、上半部の盛り上がった部分を指ではさみ、土器を正立状態で右下方に力強くひき剥がした状況が復元できる。

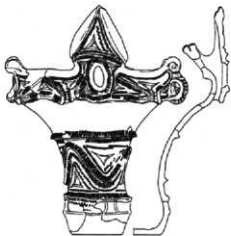
胴部紋様は頸部および底部の無紋帯の間に施される。3本の横走する隆線によって上・下2帯に分けられ、上帯と下帯の紋様帯幅は3:5となっている。横走する隆線のうち最下部は隆線上に幅広の爪形紋が部分的に施されるのみである。

上帯は蛇行する隆線が一周する。隆線上には幅広の爪形、隆線の両側には矢羽根状沈線が角押紋風に施される。大突起に向かって右側部の2カ所には三角彫刻紋が施される。口縁部紋様と同様、大突起の右側部分に三角彫刻紋を配するという意識をうかがえる。下帯は円紋と蛇行する隆線を組み合わせた意匠で構成される。大突起下の円紋部のみ玉抱き三叉紋風に三角彫刻紋が施される。これは大突起を意識した紋様配置であり、この結果、大突起部分は上から下に円紋（凸）

〈玉抱き三叉紋〉・円紋（凹）・三角彫刻紋・円紋（凹）〈玉抱き三叉紋〉という構成になる。これ

は明らかに大突起を中心とした紋様配置法をとっていたといえよう。

本土器は前述した幅広い爪形紋(キャタピラ紋)・縁取り風の矢羽根状沈線紋(ペン先状刺突紋)などの手法、そして玉抱き三叉紋様などの特徴より、「新道式」とされる土器である。口縁部紋様を特徴づける「耳状突起」は、阿玉台式によくみられる手法をとり込んだものといえよう。本土器に極めて近い特徴をもつ土器は、三原田遺跡7-A'⁽⁶⁾26(口) - pit出土の土器である(3図)。房谷戸遺跡と三原田遺跡については、同一遺跡説と別遺跡説があるが、現地形状況からみると谷一つ隔てた別遺跡とするべきであろう。特徴的な大・小2つの突起をもつ点は同一であり、三原田遺跡のそれはさらに2つの突起を加え、4単位としている。突起下に円紋をもつのは共通するが、口縁部の紋様区画は崩れ気味である。胴部紋様は1帯となる。全体として三原田遺跡出土土器の方が新相を呈しているが、ともに同一型式内に収まる特徴的な土器といえよう。本土器は土壌内より正立状態で出土しており、紋様を剥がされた痕跡はない。



第3図 三原田遺跡7-A'26(口) - pit
出土土器

2 房谷戸遺跡土壌出土土器の検討・他遺跡の類例

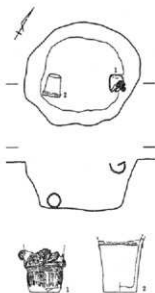
a 房谷戸遺跡土壌の土器出土状態の分類

これまで、紋様を剥がれたと考えられる房谷戸遺跡125号土壌出土の土器について観察したが、本項では、その他の房谷戸遺跡土壌出土土器について検討してみたい。土壌出土土器は住居址内出土土器に比べて空間的密閉度は高く、かつ当時の人間もしくは後世の環境変化によって変形を受けにくいといえよう。

房谷戸遺跡報告書では「土壌分類基準」として、A群からE群に類別されている。土壌は総数894基が確認されているが、これらのうち墳底が平坦で、掘り込みが深く、土器が土壌検出面上部に存在せず、土壌内土器の出土状態(当時の設置状態と換言しても良い)が明瞭なものを事例的(サンプル的)にとり出して解説してみたい。

事例1 ……30号土壌(4図左上)

土壌内より2個の深鉢形土器が出土している。2個体共、器体を横にして据えられている。1の土器は土壌検出面上部からの出土で、一部を後世の擾乱で欠失するが、本来この状態で据えられていたと考えられる。本例は2個とも胴部以上を欠いている。

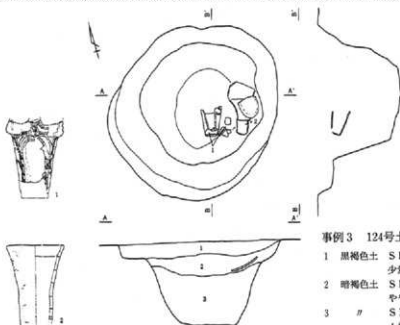


事例1 30号土壌



事例2 77号土壌

- 1 黒色土 均質で包含物は少ない
- 2 〃 S P粒・ローム粒を含む
- 3 暗褐色土 S P粒・ローム粒を含む
- 4 褐色土 ローム粒を多く含む



事例3 124号土壌

- 1 黒褐色土 S P粒・ローム粒を少量含む
- 2 暗褐色土 S P粒を少量含む。ややしまりは乏しい
- 3 〃 S P粒・小型のローム塊を含む

第4図 事例1・2・3

事例2 ……77号土壇（4図右上）

土壇中央に大形の自然石が壇底より若干浮き気味に存在し、その自然石の長軸に直交するように深鉢形土器を横位に据えている。深鉢形土器は突起部を欠いている。

これと同様な例は88号・142号土壇である。88号は土壇中央に大形の自然石と石皿が置かれ、深鉢形土器は壇底より若干浮き気味に横位に据えている。本例は胴部以上を欠いている。142号には深鉢形土器・浅鉢形土器各1個体と大形の自然石1個が存在する。深鉢形土器は口縁部と底部を欠き、浅鉢形土器は倒立状態で突起部を欠いている。自然石は浅鉢形土器の上にかぶさるようにして置かれており、土器が据えられた後に石が置かれた手順を把握することができる。

77号・88号・142号土壇の深鉢形土器を横位に据えた状態は偶然の所産ではなく、意図的なものであろう。77号・88号の深鉢形土器は土器内に土を詰め「枕」のように使用したか、頭頂部付近に副葬品に置いたものと考えられる。142号は長軸方向との関係から浅鉢を「被覆」とするのは難しい。深鉢形土器は、上部からの圧力で潰れた状態であるが、横位に据えて遺体の頭部を土器上に据えれば、このような潰れ方となる。142号土壇は深鉢形土器上に遺体の頭を据え、遺体を仰向けにした左側に浅鉢形土器を副え、さらに遺体の胸・腹部に石を置く「抱石」と考えられる。この想定手順から77・88号の大形の自然石も「抱石」と考えられる。

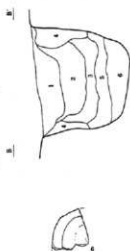
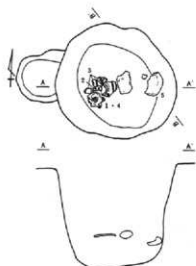
事例3 ……124号土壇（4図下）

土壇の中・上部に深鉢形土器2個と大形の自然石が存在する。2の土器は底部を欠き、全周の半分だけが遺存する。1は4単位の突起と底部を欠失する。本土壇は先述の125号土壇と同様3という土を充填し、平坦にして2の深鉢形土器の1/2破片を板状に敷いて、その上に自然石を置いている。自然石の位置は、遺体の頭部に当たり「枕」として機能していたものであろう。横位に据えた1の深鉢形土器は前述の77・88・142号の石に当たり、胸・腹部にのせられていたのであろう。

124・125号土壇のように土壇壁に段をもつものとしては、他に137号・154号・479号・484号・493号土壇などがある。これらの土壇内から見つかった遺物はほぼ例外なく土壇底より浮いた状態で発見されている。かつて別の目的で掘った土壇に土を詰め、底を平坦化し、さらに掘形を大きくした作業を手順がうかがわれる。

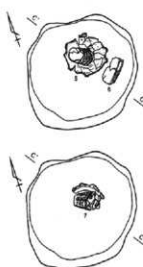
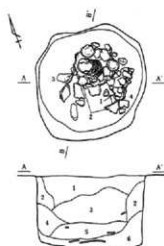
事例4 ……461号土壇（5図上）

壇底より若干浮いた状態（土壇断面をみると、6の土が充填されている）で、土壇の長軸方向に石皿片2個と深鉢形土器口縁部破片3個（内2個は突起破片）と小形鉢形土器紋様部大形破片1個がまとまって出土している。461号土壇も墓壇と考えるならば、土壇を掘り、6の土を土壇底部に敷き、5の石皿片を「枕」状に置き、さらに遺体を据え、5の石皿片を抱石、土器破片を副え物として置かれた状況が明らかになる。注目すべきは腹部上と想定される4個の土器破片であり、殊に1・2の突起破片は明らかに土壇外で深鉢形土器の突起を打ち欠いて、土壇内に置いた状況を示している。突起の欠失する深鉢形土器の扱われ方を考える上で重要な情報を提供しているといえよう。



事例4 461号土壌

- 1 黒褐色土 SP粒を極少量含む。比較的均質でしまりは良好
- 2 SP粒・ローム塊を少量含むやや暗い
- 3 SP粒・ローム粒を多量に含む。しまりは乏しい
- 4 褐色土 ローム粒主体の層。しまりは良好。壁崩壊土か
- 5 暗褐色土 小型のローム塊、炭化物を多く含む。しまりは乏しい
- 6 暗褐色土 大型のローム塊を多く含む



事例5 585号土壌

- 1 黒褐色土 SP粒・暗褐色土塊を少量含む。しまりはやや良好
- 2 暗褐色土 ローム粒・炭化物を少量含む暗い。しまりは乏しい
- 3 黒褐色土 SP粒・小型のローム塊、炭化物を多く含む
- 4 暗褐色土 SP粒・ローム塊を多く含む。しまりは乏しい
- 5 黒褐色土 SP粒・ローム塊を少量含む。しまりは乏しい
- 6 暗褐色土 大型のローム塊を多く含む。しまりはやや乏しい



第5図 事例4・5

事例5 ……585号土墳（5図下）

墳底部から覆土中位にかけて10個体の深鉢形土器と浅鉢形土器がまとめて出土している。そのうちの6個体の深鉢形土器のうち1・2・4と浅鉢形土器6は打ち欠かれた紋様部の破片である。3は底部のみ残存、5は突起部・底部打ち欠き（ただし、C—C'の断面では底部の一部が残存している）、7は口縁部・底部打ち欠きの土器である。585号土墳では、土壌が掘られた後、7の土器を「枕」状に横位に据え、5の土器を「被壺」し、6の土器を傍らに副えた状況がうかがえる。

その若干上部から出土した石や土器破片は遺体の周辺に副えられたもので、明白な「抱石」状態はうかがえない。土壌の規模からみると、頭部をB'・脚をB方向に据え、立て膝屈葬位で遺体を安置し、「被壺」として設置された土器周辺に石や土器片を置いた後に、「被壺」の土器底部・遺体の膝部がかくれる深さ（30～40cm）まで土を詰め、その時点でさらに底部破片を副えた手順が想定できよう。

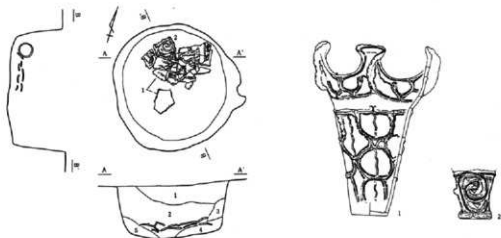
事例6 ……533号土墳（6図上）

墳底部から若干浮いた状態で2個体の深鉢形土器が出土している。口縁部紋様が欠失する2の土器は横位に据えられ、大破片に割れた深鉢形土器は533号土墳の西側にある530号土墳内出土の破片と接合してほぼ完形となった。この状況から、530号・533号土墳は極めて密接な関係にあった土墳であり、同時に構築された（ただし530号は袋状土墳に詰まっていた土を掘り出し、再利用された可能性が強い）組になる土墳とすることができよう。533号土墳は土器の置かれ方・A—A'の土層の観察から土壌の略東西側に4・5の土を詰め、その結果凹み状となった中央部に2の土器をブリッジ状に渡し、横位に据えている。これは既述してきた「枕」状の設置であり、この状況によってB'（北西）方向が頭部・B（南東）方向が脚部であったと考えられる。⁽⁷⁾

北西—南東方向に遺体を安置後、533号土墳内に1の土器を完形で持ち込み、押し潰すかもしくは縦割りするように破壊し、⁽⁸⁾1の土器の全周の2/3を紋様面が展開するように、紋様面を上向き（一部下向きになっている部分もある）にして、遺体に布団を掛けるような状態で置いている（A—A'断面参照）。B—B'では「枕」の土器の下部に1の土器の破片が潜り込んでいるが、頭部が「枕」にのっていたとすれば、この部分が頸椎部にあたり、遺体の溶解過程では、最も早期に骨が移動・消滅する部分である。1の土器破片が2の土器の下部に潜り込んでも何ら不思議ではない。また、土壌内の土の詰め方からみても、この部分は若干下がった部分に当たり、上からの土圧等の影響を受け易い部分である。一方（533号土墳）に1個の土器の2/3を紋様面上向きに、他方（530号土墳）に1/3を紋様面下向きに据えるという対比的な行為は、土壌の絶対同時・一対概念を明らかにするだけでなく、埋葬行為全体を理解するうえで注目すべきであろう。

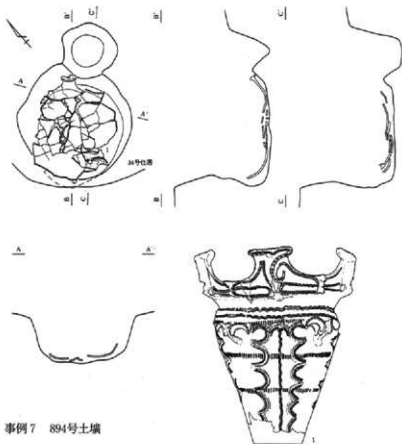
事例7 ……894号土墳（6図下）

袋状土墳の底面に深鉢形土器1個分が割られて敷かれた状態で出土。深鉢形土器は底部と突起を欠くが、これは敷くことを目的として不要部を除去した結果である。敷かれた土器の両端は80



事例6 533号土壌

- | | | | |
|--------|--------------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗褐色土 | SP粒・ローム塊・少量の炭化物を含み暗い。しまりはやや乏しい | 3 暗褐色土 | SP粒・ローム塊を多く含む。しまりはやや良好 |
| 2 黒褐色土 | ローム塊・炭化物を多く含む。しまりは乏しい | 4 // | SP粒・ローム塊を多量に含みやや明るい |
| | | 5 黄褐色土 | SP粒を多量に含みやや暗い。しまりは乏しい |



事例7 894号土壌

第6図 事例6・7

cm弱で、緊縛し、強度の屈葬にすれば埋葬できる規模であるが、洗骨の可能性も考えられる。⁽⁹⁾ 火葬骨が発見されたことで著名になった燐窓村今井東平遺跡⁽¹⁰⁾の土壌でも同様に土壌底面に土器が敷かれているが、土壌規模は本遺跡に比してはるかに小規模である。

土壌底面に土器を割って敷く方法は、遺体もしくは遺骨の安置床を作ることであり、この「土器床」葬法は一般化せず、むしろ洗骨に制約される「土器棺」や「配石土壌」に引き継がれる。本土壌は住居址床面下で見つかったが、住居址に伴うものではなく、住居址構築以前の遺構である。発掘所見から、土器敷面上に別個の土器が存在していた痕跡はうかがわれない。

以上、房谷戸遺跡で発見された土壌のうち、「土器扱い」が比較的明らかになる事例を7項ほどとり上げて解説した。これらの他にも自然石だけを土壌内に遺存するもの、土器片のみを土壌内に遺存するものなど様々な埋葬行為を示すものが存在するが、本項では上述の7事例を主として土器の残存状態を考えてみたい。これらの検討の結果、

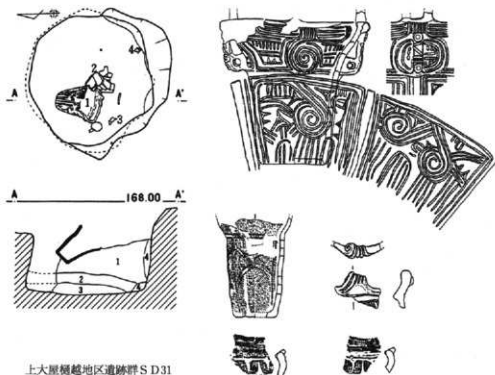
- 1 完形のまま遺棄
- 2 突起を打ち欠いて遺棄
- 3 打ち欠いた突起のみを遺棄
- 4 紋様を削して遺棄
- 5 胴部以上を打ち欠いて遺棄（底部のみを遺棄）
- 6 底部を打ち欠いて遺棄
- 7 胴部以上・底部を打ち欠いて遺棄
- 8 紋様で最も目立つ部分を遺棄

という遺棄方法が羅列できよう。

b 県内における中期の類例

ここでは、前節で指摘した「土器扱い」が明瞭な土壌を群馬県内の縄文時代中期遺跡に類例を求めた。しかしながら、県内全域の中期遺跡を検索・包括をしておらず、調査例の比較的多い赤城山西～南麓・県北域の調査遺跡の報告書を基本に選んだ。故に、房谷戸遺跡周辺の遺跡が主となり、比較的狭い範囲の類例にとどまった。ただ、資料の検索を通して、同様な例は県西部や東部にも見られ、これらの遺跡の報告が刊行されれば、類例は県全域に広がるものと確信している。また、資料の時期も房谷戸例に倣い中期中葉を中心としたが、中期初頭期や前半期、中葉末段階にも良好な例が見られたため、一部を掲載した。

次に、資料検索に際しては、土壌図と土器実測図が完備した資料をなるべく選ぶように心がけたが、各報告書の記載方法の差により、出土レベルの判断ができない土壌もあり、そのような土壌は遺構図版写真を参考に判断した。⁽¹¹⁾ また、土器の破損部位は把手等の特徴的な部分の破損を中心に記述した。



第7図 事例1の中期類例

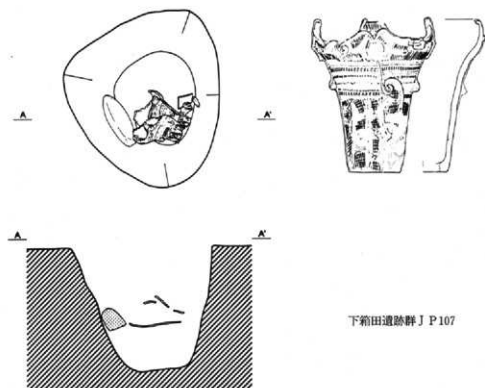
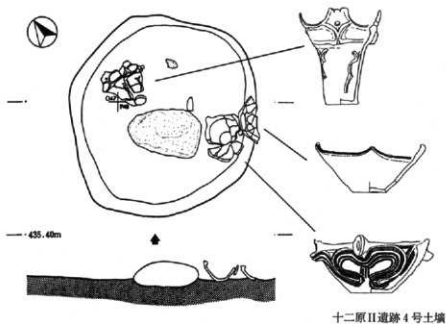
事例1 2個体の土器—1個体は土壌底面に、一方は上層に出土した例である。

勢多郡大胡町上大屋・橘越地区遺跡群H・I区SD31（7図）が比較的近似する出土状態である。土壌の形態は径1m前後の不整円形で、緩やかな袋状を呈す断面形を示す。土壌底面は平坦で、南壁において僅かな段を有する特徴を見せる。

出土遺物として、土壌内より2個体の深鉢と突起を含む数点の口縁部破片が報告されている。遺構図と写真図版の判断からは、自然石も伴出しているようだ。

深鉢2個体は上～中層にかけて、ほぼ横位・斜位の状態で1箇所にとまって出土しており、2個体の関係の深さがうかがわれよう。写真図版からの判断であるが、深鉢1が上層斜位に、深鉢2が1の直下で横位に出土している。房谷戸30号土壌のように土壌底面の出土ではないが、土層2（にぶい褐色土）・3（暗褐色土）の上に深鉢2を据え、遺体を安置した可能性が高い。

なお、深鉢1は北陸系、深鉢2は東関東系の土器と捉えられ、異系統土器の共伴例としても好資料である。深鉢1の口縁部突起と口縁部の一部、深鉢2の口縁部全体は欠損している。前項で指摘した遺棄方法2と5にあたる。さらに、伴出する口縁部突起3にも注意を払うと遺棄方法3も該当しよう。



第8図 事例2・3の中期類例

事例2 1個体の土器と大型の自然石の出土。土器は土壇底面における「枕」、自然石はやや浮いた「抱石」としての葬法を考えた。

類例として月夜野町十二原II遺跡⁹⁴4号土壇(8図上)を挙げる。掘り込みが浅く、土壇そのものの遺存状態は不良ではある。規模は、径1.5m前後の不整円形を平面形としており、土壇底面は緩やかな傾斜を持つもののほぼ平坦面を築いている。

出土物として、土壇底面中央に大型の自然石が確認され、土壇北側に小型深鉢1が横位に潰された状態で、南側に浅鉢2・3が副えられた状態で出土した。ただ浅鉢2は土壇壁面と壁外にかかる状態で、後世の破壊を受けた可能性がある。

自然石及び土器3個体とも土壇底面の出土であり、房谷戸事例2とやや趣を異にするが、調査・報告者の菊池 実氏は、この自然石に「抱石」としての性格を示唆されているように墓壇として位置付けられよう。すなわち、小型深鉢1を横位に据えられた「枕」、浅鉢2・3を副え物として捉えられ、房谷戸事例2と同等の葬法として考えた。なお、小型深鉢1と浅鉢2は阿玉台I b式、浅鉢3は勝坂1式に比定される。

欠損状態は、小型深鉢1が波状四単位口縁部のうち一単位が欠損、浅鉢2は半完形、浅鉢3は図裏面口縁部突起周辺が欠損している。遺棄方法としては2(小形深鉢1)や8(浅鉢3)にあたるが、浅鉢2は出土状態が不良のため判然としない。

事例3 事例2と逆に自然石が「枕」、土器を遺体胸腹部に置いた状態を想定した。

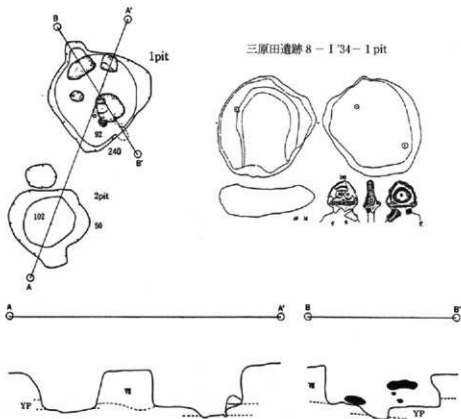
時期は若干遡るが、北橋村箱田遺跡群J P107の石皿と深鉢の出土状態が近い形態であろう(8図下)。土壇平面形は、径約90cm前後の不整円形を呈し、深さ132cmを測る。断面形は、袋状を呈さず土壇底面も平坦ではないまでも、壁中に緩やかな段を有し、段より下位で、底面より浮いた状態で石皿と深鉢が出土している。おそらく、石皿・深鉢以下の土層は埋土として考えられよう。石皿は壁に掛かるように接し、深鉢は横位に押し潰された状態である。石皿はおそらく「枕」として、深鉢は「抱き物」として置かれたものと位置づけられる。本土壇も房谷戸124号土壇と同様に土壇壁に段を持ち、遺物は浮いた状態で出土しており、土壇再利用の可能性も念頭に置いておきたい。

出土した石皿は図示してはいないが欠損品であり、深鉢も四単位波頂部のうち三単位の突起側縁が剥落し、胴部下半も約1/2が欠損している。波頂部突起片側の欠損は、遺棄方法2あるいは4であり、明らかに打ち欠かれたものと考えられ、胴部下半の欠損もその可能性を考えておきたい。

なお、深鉢は中期前半期に比定されるが、異系統の文様要素が多く混在しており、類例の少ない希少な資料である。

事例4 石皿片と突起片の共伴。石皿片が「枕」あるいは「抱石」として、突起片や土器片を副えものとして置いた行為を想定した。遺棄方法としては3にあたる。

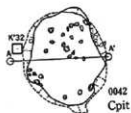
良好な類例としては、三原田遺跡8-I'34-1 pitが挙げられよう(9図)。径1m前後の不整円形を呈し、深さは約60cmを測る。断面形は筒状である。大型の自然石と石皿、人面状の突起部



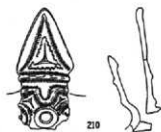
第9図 事例4の中期類型(1)

分のみが出土している。土壌底面の大型の自然石(a)が「枕」・石皿が「抱石」として位置づけられ、人面状突起が副えられたものと考えられよう。突起の出土する土壌は、他の中期遺跡でも多く、上大屋越地区遺跡群S D30や三原田遺跡7-J'31-C pit等にも見られ、房谷戸遺跡214号土壌では横位深鉢、自然石、人面突起という組み合わせの出土が見られる(10図)。これらの突起は深鉢口縁部上の突起であり、側体の正面性を確定付ける文様要素である。さらに三原田8-I'34-1 pit例や房谷戸214号土壌例のように人面状突起が出土する現象は、埋置対象が突起に注がれた行為が想起できよう。

このように、口縁部上の突起に対して「副えもの」としての位置づけも可能である。土器製作時の突起のあり方、正面性の問題等に関しても興味ある出土状態であり、正面突起と土壌埋置行為の関係は、今後吟味しなければならない課題である。また該期土器群に属々見られる人面状突起や抽象的な突起が正面性以外に持つ役割の一端が、本例のような出土状態に現れたのではないだろうか。本来は土器文様の一部である口縁部上の正面突起が、土器文様再利用の重要な部位でもあり、再利用の対象が一葬法の道具として位置づけられよう。



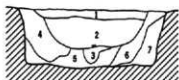
282.00M



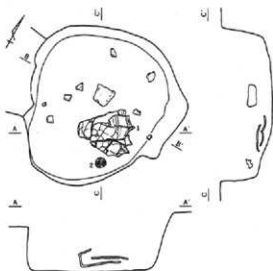
三原田遺跡 7-J'31-Cpit



167.90



上大屋樋越地区遺跡群 S D30



房谷戸214号土壇

第10図 事例4の中期類例(2)

事例5 5個体以上の土器の共伴が見られ、「枕」と「被壺」として位置づけられる例ではあるが、良好な類例が見られなかった。

敢えて図示した三原田遺跡7-H'29-Gpitは5個体以上の土器と石皿や大型の自然石が出土している(11図上)。径約90cm、深さ約110cmの不整円形で袋状の土壇であるが、埋土に焼土塊が存在することから、報告者の赤山氏は貯蔵穴を墓壇に転用したと判断できる資料としている。土壇底面には深鉢(155)が横位に置かれ、同時に自然石も据えられている。その上部に深鉢(157・158)・浅鉢(159)・完形の石皿、さらに上部に深鉢(156)⁰⁸が出土している。深鉢156が逆位のため「被壺」とも位置づけられるかも知れないが、特定はできない。ただ土壇底面の横位深鉢と自然石はいずれかが「枕」として使用された可能性が高く、遺体安置後、土器(156~159)や石皿を上部に据えた状況も否定できない。

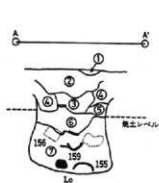
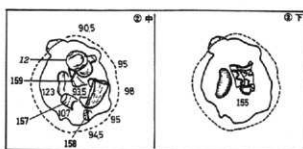
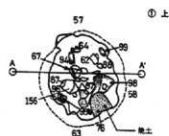
155は口縁部と胴部の一部が欠損、156は口縁部の一部が欠損、157は胴部~底部のみ残存、158は胴部のみ残存、159は口縁部1/4が欠損する。

事例6・7 良好な類例はなかったが、波川市御幸田山遺跡2A区1号土坑を挙げたい(11図下)。時期はやや下り中期中葉段階と捉えられよう。本遺構は2×1.3mの不整形で深さ約24cmのやや浅い鍋底状の断面形態を呈す。大型の深鉢が南側坑底面で土坑主軸に直交するように、横位に潰れた状態で出土している。また北側坑底面にも土器が1個体出土しているが、遺存状態が悪く資料化されていない。坑底面からはその他に磨製石斧が1点見られる。

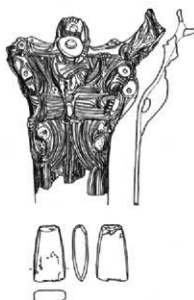
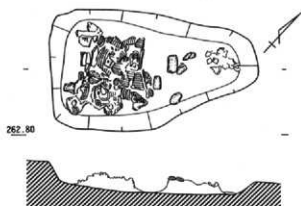
出土状態は事例1としての可能性もあるが、出土した土器が大型の土器であることから、房谷戸533号土壇や894号土壇との共通性を考慮して、事例6・7の類例とした。

この他に、事例7の類例としては、三原田遺跡8-H'36-2pitが好資料ではあるが、断面形や出土レベルが報告書に掲載されておらず、ここでは割愛した。大型の阿玉台式が出土している。以上のように、事例1~7の類例を群馬県内にあたってみたが、房谷戸例に全く合致する類例は少ない。しかしながら、多くの共通性を看取することができ、この共通性が群馬県域の中期地域性の一側面を現しているとも考えられた。共通性を整理して列挙すると、

- 1 土壇形状は、円形・不整円形の平面形が圧倒的に多く、楕円状の例は希少である。また、断面形も袋状ないしは近い形態を見せており、貯蔵穴の再利用も考えておきたい事象である。
- 2 出土土器の共伴数は多くても5個体前後であり、通常1~3個体である。これは南東北から北関東栃木県地域に見られる袋状土壇内の完形土器の多量の出土とは性格を異にするようだ。
- 3 出土遺物は、深鉢・浅鉢・石皿・打製石斧(剝片石器)が主に見られるが、浅鉢の占める割合も非常に多い。⁰⁸
- 4 口縁部上の突起・把手の出土例が目立つ。何らかの意味付けが存在すると考えられよう。などの共通性が見られる。無論この他にも、特徴的な土壇や内部の出土例が見られるが、概して群馬県域-利根川上流域の中期中葉段階の土壇遺物出土状態には、上記のような共通性を一般とした理解ができよう。⁰⁸



三原田遺跡 7-H'29-Gpit



御幸田山遺跡 2 A区 1号土坑

第11図 事例5・6の中期順例

c 月夜野町深沢遺跡^③の土壌 一県内における後期の事例一

前項において中期の事例を取り上げたが、次に後期でどのようなになっているか、配石墓が多数発見された深沢遺跡の土壌を中心にして概観してみる。まず、深沢遺跡はAからE区に分けて調査された。後期初頭から中葉にかけての、C区を中心とした配石遺構と土壌で形成されている。確認された配石遺構は49基で、土壌は65基である。本稿では土壌からの遺物出土状態を分析してみる。このうち、土器および石が出土した土壌は、16基である。

事例2・3 D区1号土壌、D区9号土壌(12図上)

1号土壌は長軸108cm・単軸100cmで南北に長いほぼ円形を呈している。土壌中央の黒褐色上面には、50cm余りの扁平な丸石があり、その下部からは堀之内2式の深鉢の他、80点ほどの土器破片が出土している。9号土壌は長軸80cm・単軸78cmでほぼ円形である。中位に板石が2点出土している。土器は1点のみである。この両土壌は、土器の出土状態は異なるのであるが、中央部に「抱石」をするように埋葬した方法は類似している。また、「抱石」の下部からの土器の出土は、事例5の土器がまとまって出土したケースに類似する可能性もあろう。

事例3・4・7 D区2号土壌(12図中)、D区16号土壌(12図下)

2号土壌は長軸82cm・単軸72cmで南北に長いほぼ円形を呈している。墳底は平坦で深さ54cmであり、南北方向に標が5個列び中央部から堀之内2式の鉢形土器が出土している。16号土壌は長軸148cm・単軸122cmでほぼ円形を呈している。中位の黒褐色土から加曾利B1式段階の注口付双口土器が、確認面近くから注口部を下にして出土している。報告では頭部を北に埋葬されたかと仮定して、本土器は腹部にのせられたものと推定している。両土壌ともに「枕」とした土器ないし石は明確に検出できなかったのであるが、土器を腹部に添える方法は一致している。また、事例7で指摘したごとく墳底に土器を敷き詰める方法は、後期の配石遺構構築段階の土壌底面に認められる敷石と共通していると考えられよう。

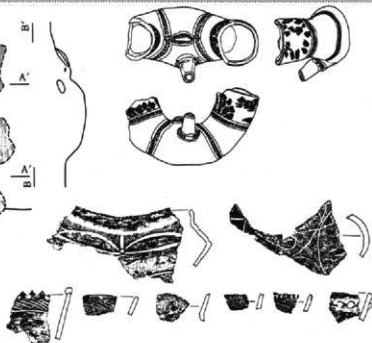
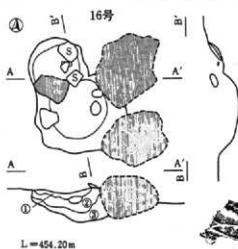
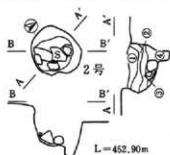
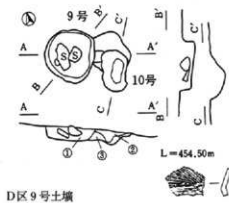
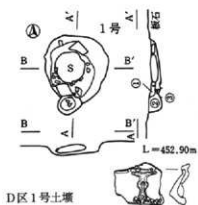
事例6 C区中央土壌(13図左上)

中央土壌は長軸71cm・単軸56cmの長方形に近い形態を呈し、断面は浅い丸底状で深さ30cmである。土壌内には南北に列をなす状態で、加曾利B1式段階の土器が3点検出されている。中央部には浅鉢が逆位で、北端に鉢と南端に壺が正位で出土した。また、浅鉢と壺の間と、浅鉢の北東位置には、2個の板石が設置されている。

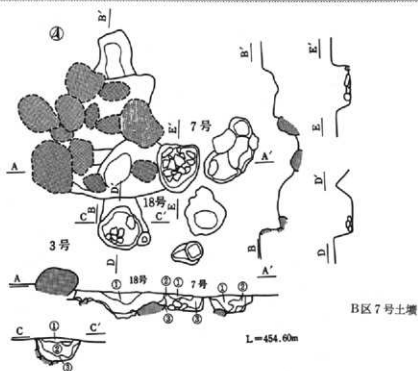
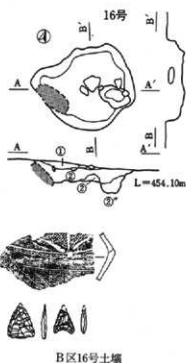
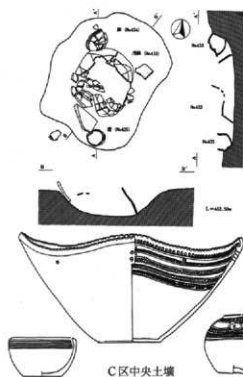
本遺跡の中心部に位置する遺構であり、報告では規模が小さすぎることと、3個体の土器の特殊な出土状態から、「……何らかの儀礼に伴い土器を埋納したものと考えられ、配石中央部において、何らかの儀礼行為を行ったことを窺わせる。」と考察されている^④。本稿では確かに極めて小規模の土壌ではあるが、墓墳として再検討してみた。

事例7 B区7号土壌(13図(下))、B区16号土壌(13図(右上))

7号土壌は長軸75cm・単軸69cmの円形を呈し、墳底は平坦で深さ29cmである。底面近くには華大の河原石13個が敷かれている。16号土壌は長軸170cm・単軸137cmの不整円形を呈し、墳底は平



第12図 事例2～4・7の後期類例（深沢遺跡）



第13図 事例6・7の後期類型(深沢遺跡)

坦で深さ38cmである。確認面近くに拳大の河原石が多数検出されている。加曽利B3式の深鉢破片が出土している。その他、B区27・30号土壌が本事例に該当するであろう。

以上のように、後期の深沢遺跡においては、中期の墓域からの系統を引く様相も確認された。特に、事例7の墳底に土器を敷き詰めるのと、敷石にする方法は共通した事象と考えられる。また、「抱石」や腹部の位置に土器を伏せて埋設する方法は、伝統的な方法と解釈されよう。

一方、深沢遺跡の土壌群と配石遺構の関連を分析すると、墓域全体の構成としては前者が配石墓群を取り巻くように位置している。土壌群は配石墓の外周部を構成していることになる。今後の検討課題であるが、完形土器は配石墓からは出土せず、土壌群から検出されている。配石墓が主体になった後期の段階で、中期からの葬法がどのように変化したか、配石墓自体の葬法も含め、より詳細な分析を行っていきたい。

結びにかえて

前項において埋葬及び葬法における「土器扱い」を述べたわけであるが、「土器扱い」は

① 埋葬および葬法において合理的発想から行われる「土器扱い」

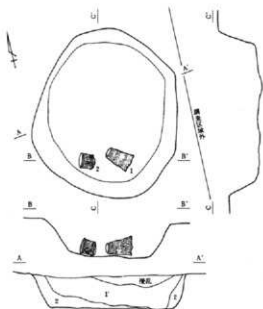
② 残された人間の哀惜の結果としての「土器扱い」

に大別して考慮しなければならないだろう。

本遺跡土壌内で多く見られる横位に据えた深鉢形土器は、大形の自然石・石皿破片(これら石皿も打ち欠かれた可能性が高い)と同様に、遺体を設置する「枕」として扱われていたものと考えられる。「枕」として用いられたと考えられる深鉢形土器には、全く打ち欠かず完形の例(224号・454号)もあるが、極めて少数である。深鉢形土器を「枕」にするというのは、ある意味では合理的発想であるが、その大半が何らかの打ち欠きが行われている点は、「枕」に転用されたと考えられる石皿に完存品が無い点と共通する。ここには完存品ではなく、何らかの加工をし、原形を損ねたものを土壌内に置くという規制があったものと考えられるのである。その好例は530号・533号土壌での「土器扱い」に見られる。少なくともこの2つの土壌出土例では、「壊れたものを選んで」土壌内に持ち込んだものではないことを示している。530号・533号土壌出土の土器は土壌内で破壊したと考えるが、他の例では土壌内で破壊したとすることはできず、大半は土壌に持ち込まれる以前に口縁部なり、底部部なりを打ち欠いている。

土器なり石皿なりを打ち欠くということは、換言すれば、本来その道具がもっている用途・機能の「停止」である。本遺跡ではこのような行為が既に前期末からみられる(133号土壌、14図)土壌内には口縁部・底部を打ち欠かなくとも、十分に完存品を設置できるスペースはある。したがって土器を打ち欠く行為は決して合理的発想とはいえない。

本遺跡では突起が意識的に打ち欠かれていたことを明瞭に示す例がある。それが事例5として記述した585号土壌の深鉢形1・2・4と浅鉢形6の打ち欠かれた紋様部の破片である。打ち欠か

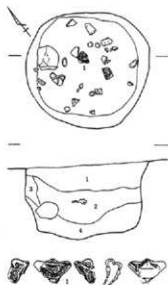


133号土壌

- 1 黒褐色土 S P粒・ローム塊を含む。ややしみに乏しい
- 2 黄褐色土 小型のローム塊を主体とする

341号土壌

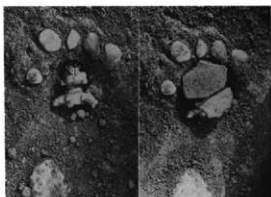
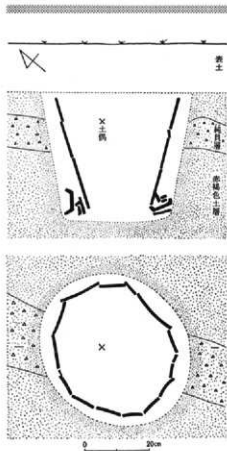
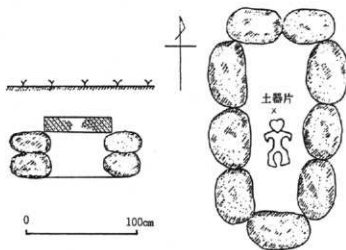
- 1 暗褐色土 S P粒・ローム塊・炭化物を含むしまりは乏しい
- 2 黄褐色土 S P粒・炭化物を多く含みしまりは乏しい
- 3 褐色土 ローム塊主体の層
- 4 黒褐色土 S P粒・大型のローム塊・炭化物を含む。しまりは乏しい



第14図 房谷戸遺跡133号土壌・341号土壌

れた土器がより哀惜的な意味合いをもって扱われている例は、341号（14図）・461号土壌である。341号土壌では平面的には自然石とともに散在する状態であり、461号土壌は自然石1個とともに1ヶ所に集中するように置かれている。両土壌とも「枕」となる石（461号は石皿片）が置かれている。遺体設置後341号は石・土器をばらまくように、461号は遺体の腹部付近に副えるようにまとまって置かれている。この2土壌の遺物出土状況は遺体設置後の哀惜行為の二態を示しているといえるだろう。この2つの土壌では打ち欠いた突起部片もしくは最も装飾的な紋様部片は死者を哀惜する行為の重要な道具になっている。花や食物・衣服など土・石以外の有機物質も副えられたかも知れないが、それらは物証としては残っていない。

本論の表題である「紋様を剥された土器」は埋葬および葬法における「土器扱い」の中で推察しうる例である。本土器は原形を損なっていない。しかし、その重要な紋様部の突起を剥すこと自体が用途・機能の「停止」行為の範疇の中に含まれる破壊行為、換言するならば「土器」という道具を道具でなくすることによって、または製作時から煮沸などの生活用具としてでなく、死者の副え物（死者の「被覆」に用いられた）にする行為であった。本遺跡で、突起部を打ち欠き、その一部を哀惜の意を表わす行為に用いられた点は明らかになったと思われる。しかし、紋様を



第15圖 土偶出土狀態

(上/郷原遺跡 左下/加曾利南貝塚 右下/雨滝遺跡)

刺す例は顕在化したのは一例のみであった。従来、土器の突起部・紋様の欠失については特に問題視されて扱われたことは少なく、「哀惜の意を含めた意図的破壊」という視点は遺構内での出土状況の把握と併せて必要になると思われるのである。

さらにもう1点注目すべき点は、本遺跡では住居址・土壌を中心とする集落内から1点も土偶が出土していない点である。少なくとも本遺跡においては、埋葬および葬法に用いられる道具の中に土偶は存在していない。しかし、縄紋時代後期（堀之内式期）になると埋葬および葬法に用いられる例が見られる。群馬県郷原遺跡1号石囲遺構出土例⁽¹⁵⁾（図上）・加曾利南貝塚⁽¹⁶⁾遺構内土偶出土例（図左下）はその好例であろう。

郷原例は、伝聞ではあるが、北向き埋葬人骨の腹部に副え物として置かれた状況が、本遺跡461号の突起部破片を遺体腹部付近に副え物として置かれた状況と酷似する。墓墳の形態は異なり、時期差もあるが、比較的近い地域での類似現象に興味を覚える。時間的連続でみるならば、死者の腹部に副え物として置かれた突起破片が土偶に置き換わった現象がうかがえるのである。

加曾利南貝塚例は2個の深鉢形土器を破壊し、その割れた2個体分の破片全てを用いて土壌内で井筒状に組み立てる。報告者も疑問を呈しているように「土器で土偶を囲みことであれば完全土器をそのまま利用した方が容易である。」し、合理的である。しかし、それは土偶の頭部が本土壌の祭祀主体と考えるからであり、本土壌の主体は洗骨された人骨であったと考えるべきであろう。先ず2個の底部を含む土器片を「裏込め」あるいは「支え」風に設置し、大形破片を組み上げていく。大形破片は断面図でみると3段になっているが、ある高さまで進めば掘った土壌と大形破片の隙間に裏込め風に土を詰めていったものと考えられる。この手順を繰り返して出来上がった中央の空間部には洗骨された人骨が置かれ、土を人骨にかぶせた後、土偶が出土した高さで面を作り、土偶を副え物として置いたものと考えられるのである。この埋葬手順は前述の事例5、585号土壌の底部破片を副える状況と同一である。土器を破壊する行為は、土偶を祭祀主体と考えず、遺体を土壌内の主として考えれば充分理解できる現象である。ここでも副え物であった土器破片が土偶破片に置き換わっているとみることができよう。

縄紋時代中期土偶は山梨県釈迦堂遺跡で究明されるごとく、破壊されることを前提として製作されることが多いとされている。本遺跡ではこの土偶のあり方と近い「土器扱い」を受けたのが「紋様を剥された土器」と考えることは可能である。意図的に刺すこと目論で製作した可能性も充分考えられるのである。また、用途・機能の「停止」という点でみれば、土器や石皿を打ち欠くことも土偶を打ち欠くことも同一の行動とすることができる。土偶は「誕生」に係る儀礼の道具とする考えが一般的であるが、加曾利南貝塚や郷原遺跡では、後期段階で「死」に関する道具と考えられる例も存在する。また「誕生」に関する道具と考える場合、房谷戸および三原田遺跡で1個も出土しない点はどのように考えれば良いのであろうか……。いくつかの解釈は可能であるが、今後の群馬県内の出土例の蓄積をまって検討したい。この問題の解決には「紋様を剥された土器」が極めて重要な位置を占めているように思えてならないのである。

近年、墓と考えられる土壌から出土した土器・土製品・石器・石製品を分析した論考は、山梨⁸⁰⁾や北海道⁸¹⁾で発表されている。山梨例は土壌墓・土器棺再葬墓への視点であり、北海道例は土壌墓・出土遺物の分析からの儀礼形態（祭祀要素）への視点である。房谷戸遺跡の諸事例と両地域のあり方は共通するもの・しないものがある。

これらの行動痕跡が地域的にまとまるものか、あるいは広範に共通項で括られるものかは今後に期したいが「墓」と考えられる遺構についての遺物分析はより精密に追究されねばならないだろう。

なお、「まえがき」・第1章・第2章のa項と「結びにかえて」は土肥が執筆し、第2章のb項を山口が、第2章のc項を中東が分担執筆した。

注

- (1) a 小野和之・山口逸弘他 「房谷戸遺跡Ⅰ」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
b 谷藤保彦 「房谷戸遺跡Ⅱ」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (2) 註1 a 文獻において、口絵カラー図版に本土器は127号土壌と記載されているが、これは125号土壌の誤りである。
- (3) 房谷戸遺跡は基本的には関越自動車道の道路部分の調査であった。住居址および土壌群の平面配置、および道路の立地する丘陵の地形をみると、調査地は集落中心部を南北方向にめくった結果となる。道路は環状を呈し、中央に土壌群そしてその周辺に住居址を配するものであったと考えられる。なお、地形図から、結果としての環状集落の西側は利根川の攻撃面にあたり、後世に削られたものと考えられる。
- (4) 報告書では「東壁中位」となっている。註1 a 文獻
- (5) 山梨県釈迦堂遺跡など。
- (6) 森山啓造 「三原田遺跡」第二巻 群馬県企業局 1990
- (7) 断面図ではB-B'と記されているが、平面図の遺物出土の位置関係からB'-Bの誤記と思われる。
- (8) あるいは1の土器を530・533号土壌周辺で押し潰すか、もしくは縦割して、533号土壌では全周の約2/3を紋様を上向きにし、530号土壌では全周の1/3を紋様を下向きにして据えたかと考えることもできる。しかし、533号土壌では紋様面上向きの状態で、かなりの部分が二重になっており、土壌外で土器を破壊して持ち込んだとは言い難い状況である。
- (9) この時期に既に洗骨風習は存在していたが、本遺跡の土壌規模・遺物の散乱状況から、そのほとんどが遺体のまま土葬したものと思われる。
- (10) 榎窓村今井東平遺跡は1995年榎窓村教育委員会の調査が行われており、中期配石遺構や火熱を受けた人骨を出土した埋蔵が検出されている。
- (11) 西毛地区では、上信越自動車道開通の調査で例えば、下鎌田遺跡や南蛇井増光寺遺跡等で中期土壌が検出されている。さらに東毛地区では笠形町清原寺裏遺跡・桐生市三島台遺跡等でも確認されている。
- (12) 竪穴住居跡や出土土器に比重を置いた報告書もあり、良好な遺物の出土を見る土壌にしても、平面図に遺物の記載がなかったり、断面図に遺物のレベルが表示されていない例も見られ、今回の資料検索は十分とはいえない。反省材料である。今後調査に際しては注意を要する。光沢土器が出土する土壌等は、1/20～1/30で報告書への掲載が望ましいだろう。発掘調査時より心がけたい。
- (13) 山下歳信 「上大屋・榎越地区遺跡群」大胡町教育委員会 1986
- (14) 菊池 実 「三俣沢遺跡・十二原遺跡Ⅱ」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (15) 長谷川福次 「山口「北橋村稲田遺跡群出土の縄文中期前半期の土器」(群馬考古学手帳5) 群馬土器研究会
註13と同じ。報告書によると、他にも土壌覆土より断片が多く出土している。平面図の記載に2点の把手（突起）が記されていることから、出土遺物の中でも特筆される存在が窺われよう。
- (16) この他にも、実例図示されていないが、深鉢底部が出土している。おそらく石皿（12）の直下の出土と思われる。底部のみ残存で、垂下隆縁の下端部が看取されることから、阿玉台式の深鉢底部と思われる。
- (17) 大塚昌彦他 1987 「行幸田山遺跡」茨城県教育委員会
- (18) いわゆる「焼刀子器」（野村一寿1984）「焼刀子型」（山口1989）である。他の遺跡では静寂式後半～終末段階の土器との共存が知られる。
- (19) 石皿の埋葬施設・祭祀施設への埋置を示唆された鈴木保厚氏の論文（鈴木1991）や大塚石皿の土壌内出土を副葬品として位置付けられた神谷原遺跡SK86の例（竹迫・小林1982）からも、本論で扱った土器以外にも、石器の副葬も考えなければならぬ課題である。また、浅鉢に関しては逆位出土と正位出土の差から被覆や副葬との差が顕微され、さらに深鉢との対比も検討を要しよう。

- ㉒ 本稿ではここに掲げた土壌を全て墓壇として位置付け、その出土状態を遺体の安置状況を想定しつつ、当時の葬法のいくつかを事例として挙げた。しかし、この土壌内埋葬以外にも、例えば住居内埋葬を示唆する例も確認・報告されており、本稿は、中期中葉段階の埋葬手法の一端を提示したにすぎないのである。今後、科学分析等の結果を踏まえて、該期の埋葬手法を明らかにしなければならないだろう。
- ㉓ 下城 正・女屋和志雄 『深沢遺跡・前田原遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- ㉔ 註22と同じ。「6、まとめ ④C区配石遺構について」
- ㉕ 山崎義男 「群馬県原出土土偶について」『考古学雑誌』第39巻3—4号 ただし図14上は伝聞を基に作成された模式図といわれる。本稿では、米田耕之助 『考古学ライブラリー21 土偶』 ニューサイエンス社 1984より図を引用した。
- ㉖ 杉原莊介編 『加曾利南貝塚』中央公論出版 1976
- ㉗ 報告では壺形土器1個・鉢形土器1個とされているが、本土器は2個とも深鉢土器と考える。註26文献
- ㉘ 長沢宏昌 「甲府盆地周辺に見られる縄文時代中期の土壌墓と土器棺再葬墓—井戸尻Ⅲ式〜曾利Ⅰ式期の場合」『研究紀要10』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1994
- ㉙ 阿部千春「ハマナス野遺跡における祭祀要素—円筒下層期の環状集落における精神的な遺物および遺構の事例報告」『北海道考古学』第31輯 1995

参考文献

- 赤山智造 1990 『三原田遺跡』第二巻 群馬県企業局
- 新井輝二他 1984 『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・南遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂他 1988 『勝保沢中ノ山遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大賀 健他 1985 『関越自動車道（新橋線）埋蔵文化財調査報告書』月夜野町遺跡調査会
- 大塚昌彦他 1987 『行幸田山遺跡』茨川市教育委員会
- 小野和之他 1986 『中晩遺跡・諏訪西遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 女屋和志雄 1989 『下佐野遺跡Ⅰ』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 菊池 実他 1986 『三後沢遺跡・十二原遺跡Ⅱ』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 木村 収他 1992 『内匠諏訪前遺跡・内匠日影岡地遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 『群馬県史 資料編1 原始古代Ⅰ』1988 群馬県史編さん委員会
- 下城 正他 1989 『大平台遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 下城 正他 1987 『深沢遺跡・前田原遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 杉原莊介編 1976 『加曾利南貝塚』中央公論出版
- 鈴木保彦 1991 『第二の遺物としての石皿』『縄文時代』2 縄文時代文化研究会
- 芹沢良介 1960 『石器時代の日本』築地書館
- 都丸 肇他 1985 『見立瀬井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教育委員会
- 中西 光他 1982 『神谷原Ⅱ』八王子市野田遺跡調査会
- 野村一寿 1984 『塩尻市柳町遺跡Ⅰ号住居址出土土器とその類例の位置付け』『中部高地の考古学』Ⅲ 長野県考古学会
- 羽鳥政彦 1986 『田中田・窪谷戸・見取遺跡』富士見村教育委員会
- 羽鳥政彦 1987 『向吹強・岩之下・田中・寄居遺跡』富士見村教育委員会
- 右島和夫他 1986 『分郷八崎遺跡』北橋村教育委員会
- 山崎義男 『群馬県原出土土偶について』『考古学雑誌』第39巻3—4号
- 山口逸弘他 1989 『所谷戸遺跡Ⅰ』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山口逸弘・長谷川福次 1995 『北橋村箱田遺跡群出土の縄文中期前半期の土器』『群馬考古学手帳5』群馬土器観会
- 山下歳信 1986 『上大屋・越後地区遺跡群』大胡町教育委員会
- 米田耕之助 1984 『考古学ライブラリー21 土偶』ニューサイエンス社

首長墓成立の一背景

——群馬県前橋市、今井神社古墳とその周辺集落の動向——

坂 口 一

1 はじめに

前橋市街地の東方約10kmの今井町には、5世紀後半に築造された前方後円墳である今井神社古墳が立地している。この古墳は墳丘長74.5mの規模をもち、⁽¹⁾周堀の発掘調査によって円筒埴輪が検出されており、これらの編年観からこの周辺地域で初出の前方後円墳であるとの位置付けがなされている。

一方、この古墳が立地する前橋市今井町の周辺では、沖積低地に隣接した台地上で集落遺跡が発掘調査され、特にこの古墳に最も近接している荒砥北三木堂遺跡では、この古墳が成立する時期に集落の急激な増加があることが判明している。⁽²⁾また、荒砥北三木堂遺跡に隣接する沖積低地では、古墳時代の水田跡の存在が発掘調査によって明らかになってきた。⁽³⁾さらに、古墳の西側を南流する貴船川を挟んだ西側に位置する筑井八日市遺跡では、5世紀後半の豪族居館である可能性が高い遺構も検出されており、⁽⁴⁾この地域は墳墓のみならず集落やその生産の基盤である水田をも含めて、総合的に遺跡の動向を検討することのできる資料が整いつつある。

したがって、ここでは今井神社古墳が成立する5世紀後半の時期に集落や水田などで起きている諸現象を整理した上で、これらと古墳との関わりを検討し、この古墳の成立の背景を探ることを目的としたい。

2 今井神社古墳周辺の遺跡の概要

今井神社古墳の周辺には数多くの遺跡が分布している。ここでは、この周辺に分布する主な遺跡についてその概要を記したい(図1)。

(1) 墳 墓

今井神社古墳は赤城山の南麓の末端部に立地し、赤城山を南流する荒砥川の左岸に位置している。墳丘長74.5m、後円部径44m、前方部前幅50mの規模をもつ2段築成の前方後円墳で、後円部を北側に向けて台地の縁辺部に構築されている(図2)。⁽⁵⁾周堀の発掘調査によって出土した円筒埴輪は、外面に二次調整のB種ヨコハケを施すものと、一次調整のタテハケを施すものの2種類が存在し、川西宏幸氏はこれらを氏による円筒埴輪の編年のIV期に位置付けている。⁽⁶⁾

これらの円筒埴輪は、群馬県下では富岡市に所在する下高瀬上之原遺跡4号墳出土のものに形態が近似し(図3)、二次調整のB種ヨコハケを施すものと、一次調整のタテハケを施すものの量比も近い。⁽⁷⁾下高瀬上之原遺跡4号墳からはTK-208型式に比定できる須恵器把手付碗が出土していることから、今井神社古墳の年代は須恵器型式のTK-208型式～TK-23型式に平行する時期で、5



- 1：今井神社古墳 2：荒砥北原遺跡 3：荒砥北三木堂遺跡 4：今井道上遺跡 5：今井道上道下遺跡
6：今井白山遺跡 7：荒井八日市遺跡 8：沖積低地1 9：沖積低地2

図1 遺跡位置図（2万5千分の1 「大胡」）

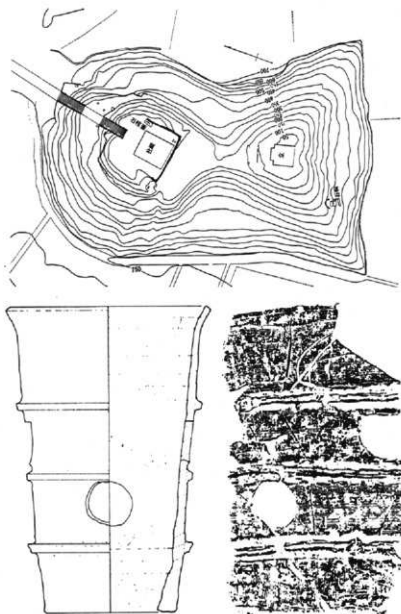


図2 今井神社古墳及び埴輪

世紀第3四半期を中心とする年代に比定することができよう。

なお、この古墳に隣接して3基の円墳が発掘調査されているが、いずれも6世紀以降に比定されている。⁽⁸⁾ また、荒砥川に沿った約1km程北側に位置する荒砥北原遺跡では、4世紀代の方形周溝墓⁽⁹⁾が発掘調査されているが、周辺に古墳時代前期に比定される前方後円墳は存在しない。

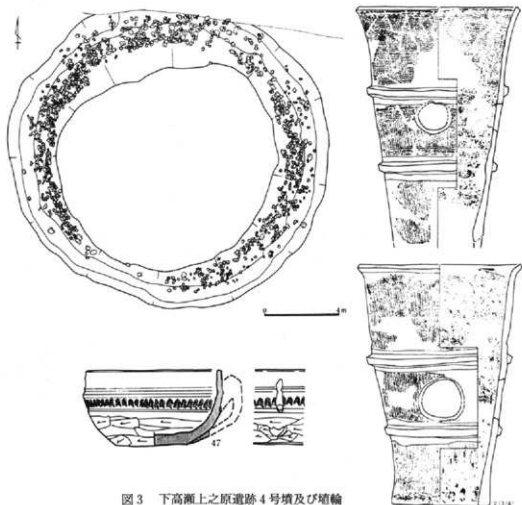


図3 下高瀬上之原遺跡4号墳及び埴輪

(2) 集落

荒砥北三木堂遺跡^{DB}

この遺跡は今井神社古墳の北側に位置する沖積低地の縁辺部に立地し、弥生時代中期から平安時代にわたる78軒の竪穴住居が検出されている。このうち、弥生時代の住居は中期後半に属す5軒のみで、その後に継続性はみられない。一方、古墳時代の竪穴住居は60軒で、その消長をみると、5世紀初頭で出現した竪穴住居がその後半で最も増加し、6世紀前半で消滅する。すなわち、この遺跡で検出した竪穴住居の大半が5世紀代に営まれている(図4)。

なお、5世紀代に分類できる55軒の住居のうち、約35%にあたる20軒の住居から初期須恵器・古式須恵器が出土し、この時期における須恵器の出土頻度は県下でも突出した高さを示している。

今井道上遺跡^{DB}

この遺跡は今井神社古墳の北東側に位置し、今井神社古墳の北側に位置する沖積低地の東側の台地上に占地している。古墳時代中期から平安時代にわたる35軒の竪穴住居が検出され、この大

半は古墳時代に属し、5世紀後半から7世紀後半にかけて継続した集落の営みを認めることができる(図5)。この調査区域からは8世紀代の竪穴住居の検出例はないが、隣接する同一遺跡の今井道上道下遺跡にはこの年代の住居が存在している。

今井道上道下遺跡

この遺跡は今井神社古墳の北側に位置し、今井道上遺跡と同一の遺跡である。この遺跡は古墳時代前期から平安時代にあたる64軒の竪穴住居が検出され、これらは各年代による住居の増減はあるものの、4世紀代から10世紀代にかけてほぼ継続的な集落の営みが認められる(図6)。

なお、この遺跡は今井道上遺跡と同一の遺跡であることから、両遺跡を通じた竪穴住居の推移をみると、6世紀代をピークとして4世紀代から10世紀代にかけてほぼ連続した集落の営みが認められることになる。

今井白山遺跡

この遺跡は今井神社古墳の西側に南流する荒砥川の扇状地上に立地し、縄文時代から平安時代にあたる52軒の竪穴住居が検出されている。このうち縄文時代は敷石住居が1軒で、他は古墳時代以降であり、古墳時代前期の4世紀代から10世紀代の平安時代にかけて、ほぼ継続的な集落の営みが認められる(図7)。

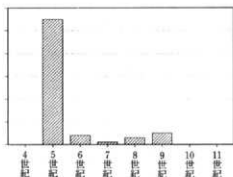


図4 荒砥北三木堂遺跡竪穴住居変遷図

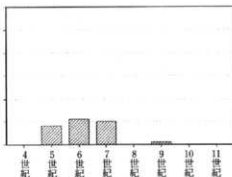


図5 今井道上遺跡竪穴住居変遷図

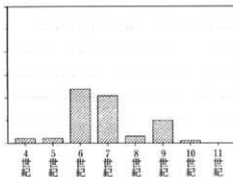


図6 今井道上道下遺跡竪穴住居変遷図

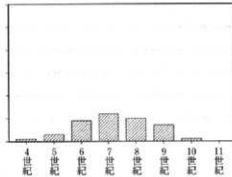


図7 今井白山遺跡竪穴住居変遷図

(3) 水 田

貴船川の低地を挟んで今井神社古墳の西側に位置する筑井八日市遺跡では、低地部で天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石層(As-B)に埋もれた平安時代の水田を検出している。また、この遺跡では古墳時代の水田遺構は確認できなかったものの、6世紀初頭に降下した榛名山ニツ岳降下火山灰層(Hr-FA)と、4世紀前半の浅間C軽石層(As-C)の直下の層のプラント・オパール分析を行った。その結果、Hr-FAの直下の層では稲作を行った可能性があり、Hr-FAの直上の層では稲作を行った可能性が高く、As-Cの直下の層では稲作の可能性がないという分析結果が出ている(図1-9)⁹⁸。つまり、この遺跡ではHr-FAが降下した6世紀初頭前後の時期から、稲作を行った可能性が高いと判断することができる。



図8 筑井八日市遺跡居館推定図

また、今井神社古墳の北側に位置する沖積低地では(図1-8)、As-B、Hr-FA、As-Cの各テフラの直下の層でプラント・オパール分析が行われ、As-BとHr-FAの直下で稲作が行われた可能性が指摘されている⁹⁹。つまり、この沖積低地でも4世紀代のAs-Cの段階では稲作耕作が行われた可能性が低く、Hr-FAが降下する6世紀初頭を前後する時期から稲作耕作が行われ、As-Cの直上の層でも少量のプラント・オパールが検出されていることから、この沖積低地における稲作耕作の開始年代は5世紀代まで遡る可能性が高いと判断することができる。

(4) 居 館

筑井八日市遺跡では、豪族居館と推定される遺構の一部が確認されている(図8)⁹⁸。この遺構は広瀬川低地帯と貴船川の低地に挟まれた台地の先端部に位置している。遺構の全体は確認されていないものの、幅8m、深さ1.5mの溝が、南北160m、東西200mの規模で方形に巡るものと推定できる。溝の底面に密着して出土した土師器坏と、溝の底面の直上に堆積したHr-FAの状況から、5世紀後半の築造と考えられる。

内部構造が全く不明であることから豪族居館と断定することはできないが、少なくとも2条の溝が東西200mの間隔を置いて台地を寸断することは事実である。

3 周辺遺跡の動向と画期

今井神社古墳が立地する前橋市の東部から勢多郡にかけての地域は、古墳時代前期の4世紀代から7世紀代にかけて方形周溝墓や古墳が営まれている。この地域は後の律令期に勢多郡域として推定できる地域である。徳江秀夫氏によれば、4世紀代には堤東原遺跡、荒砥東原遺跡に前方後方形周溝墓が成立する。次に5世紀前半に墳丘長約59mで帆立貝式の赤堀茶臼山古墳が成立し、5世紀後半にこの今井神社古墳が出現する。

さらに、6世紀の初頭から後半にかけては、墳丘長93.7mの前二子古墳、同111mの中二子古墳、同85mの後二子古墳の3基の前方後円墳が相次いで成立し、その後7世紀代には小稲荷6号墳、富士山古墳などの円墳が立地するという見解が示されている³⁰⁾。

また、右島和夫氏は、赤城山の南麓地域は富田遺跡群、西大室遺跡群などの5世紀後半から出現する初期群集墳が成立する地域のひとつで、これらの群集墳と今井神社古墳などの有力前方後円墳の成立から、この時期における中小首長層の大規模農耕開発と、小地域を単位とした新たな地域統合が行われたという見解を示している³⁶⁾。すなわち、今井神社古墳の周辺地域は、4世紀代から継続的に方形周溝墓や墳墓の系列を辿ることができる。しかし、今井神社古墳が成立する5世紀後半以前には前方後円墳は存在しない。やがてこの古墳が成立する5世紀後半になると初期群集墳が出現し、さらに6世紀代には県下を代表する前方後円墳が成立する地域となる。つまり、この地域の墳墓の形成過程において、今井神社古墳はひとつの大きな画期になると解釈できよう。

一方、今井神社古墳に近接した集落遺跡である荒砥北三木堂遺跡、今井道上遺跡、今井道上道下遺跡、今井白山遺跡における竪穴住居数の推移をみると、個々の遺跡では集落の断絶する時期が存在したり、出現の時期に差が認められる。しかし、周辺部を総合的にみみると集落は4世紀から10世紀にかけて継続的に営まれ、さらに5世紀の段階で急激な増加を示していることが分かる(図9)。特にこの傾向は荒砥北三木堂遺跡で最も顕著であり、この遺跡では今井神社古墳の成立する時期の5世紀後半に異常にもみえる集落の増加が認められるのである(図10)。

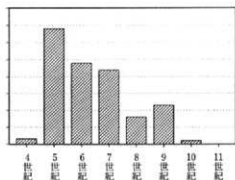


図9 今井神社古墳周辺遺跡の竪穴住居変遷図

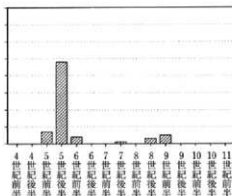


図10 荒砥北三木堂遺跡の竪穴住居変遷図

また、今井神社古墳に近接する沖積低地では、水田そのものは確認できないものの、プラント・オパール分析から Hr-FA の降下した 6 世紀初頭前後の時期から稲作が行われており、この開始時期は 5 世紀代まで遡る可能性が高い。さらに、筑井八日市遺跡では今井神社古墳に近接した時期の豪族居館と推定される遺構が出現している。

さて、今井神社古墳の周辺における遺跡の動向をみてきたが、今井神社古墳が成立する 5 世紀後半の時期にこの古墳の周辺で起きている現象は、次のように要約することができる。すなわち、①有力な前方後円墳が出現する、②近接する集落遺跡群の竪穴住居が、急激な増加傾向を示す、③集落遺跡に接する沖積低地で、水田耕作が開始された可能性がある、④貴船川を挟んだ筑井八日市遺跡で、豪族居館の可能性が高い遺構が成立する、の 4 点である。

4 今井神社古墳の成立の背景

かつて能登健氏は、表面採集による遺跡分布調査に基づいて集落の継続性による遺跡の分布パターンを設定した。¹⁹⁾さらに、発掘調査された遺跡によってこの分類を実証し、農耕地の拡大を前提とした居住域の拡大過程を明らかにした。つまり、集落の拡大過程を農耕地の拡大という視点で捉えたのである。

この考え方に従えば、5 世紀後半の時期に急激に増加する今井神社古墳周辺の集落には、この時期において農耕地が大幅に拡大されたと想定することができる。このことは今井神社古墳に近接する沖積低地において、稲作農耕が 5 世紀代から開始された事実を傍証とすることができる。

さらに、今井神社古墳に近接する北三木堂遺跡において、この古墳が成立する時期の竪穴住居が急激に増加し、TK-208 型式～TK-23 型式に比定できる多量の古式須恵器の出土が見られることは、この古墳と北三木堂遺跡の集落との間に、密接な関係を認めざるを得ない。

すなわち、今井神社古墳の成立には、この周辺地域における農耕地の大幅な拡大をその背景として想定することができるのである。換言すれば、今井神社古墳はこの地域における水田耕地の開発を目的とする拠点として成立したものと見えよう。

こうしてみると、この地域の遺跡は今井神社古墳が成立する 5 世紀後半を契機として大きく変貌していることが看取でき、この古墳はこの地域における社会変化の大きな要因としての役割を果たしたと考えられる。

5 おわりに

今井神社古墳の成立の背景を、周辺地域における遺跡の動向という視点でみてきた。筆者はかつて同様な視点での分析を、群馬郡群馬町に所在する三ツ寺 I 遺跡の居館とその周辺の集落で試みた。²⁰⁾結果として、三ツ寺 I 遺跡の周辺で起きている現象を、この地域にも認めることができた。そして、これはこれらの地域のみならず、おそらく各地に同じ現象を予測することが可能である。

そして、こうした分析にはひとつの遺跡に限定することなく広範囲な遺跡群を対象とした研究

が必要であり、個々の遺跡における適確な集落動向の把握がその分析の糸口になるものと確信している。

小稿を草すについて、当事業団の右島和夫・大木紳一郎・徳江秀夫・南雲芳昭・桜岡正信・津島秀章氏には有益な御指導と助言を賜った。また、英文要旨については Nathan Sturman 氏、奈良国立文化財研究所の松井章氏にご指導を頂いた。文末ながら記して深甚なる感謝の意を表す次第である。なお、本稿は「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団平成6年度職員自主研究活動」の助成金を受けて実施した、研究成果の一部である。

注

- (1) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『今井神社古墳』 1992
- (2) 坂口 一 『今井道上遺跡の集落構成と変遷』 『今井道上遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- (3) 前掲注(2)に同じ
- (4) 坂口 一 『瓦井八日市遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- (5) 前橋市 『前橋市史』 第1巻 1971
- (6) 川西宏幸 『円筒埴輪総論』 『考古学雑誌』 第64巻2・4号 日本考古学会 1987
- (7) 坂口一・南雲芳昭 「下高瀬上之原遺跡4号墳、5号墳の出土遺物について」 『下高瀬上之原遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- (8) 石坂 茂 『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (9) 前掲注(8)に同じ
- (10) 石坂 茂 『荒砥北三木堂遺跡I』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (11) 前掲注(2)に同じ
- (12) 大木紳一郎 『今井道上道下遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- (13) 飯島義雄 『今井白山遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (14) 前掲注(4)に同じ
- (15) 前掲注(2)に同じ
- (16) 前掲注(4)に同じ
- (17) 徳江秀夫 『古墳時代の地域概念』 『群馬における地域性の変遷』 群馬県地域文化協議会 1994
- (18) 右島和夫 『上野における群集墳の成立』 『東国古墳時代の研究』 学生社 1994
- (19) 能登 健 『里棲み集落の研究』—集落からみた農耕地の拡大過程とその背景— 『内陸の生活と文化』 地方史研究協議会編 雄山閣 1986
- (20) 坂口 一 『5世紀代における集落の拡大現象』—三ツ寺I遺跡居館の消長と集落の動向— 『古代文化』 第42巻2号(財)古代学協会 1990

Summary

An Aspect of Formation of the Chieftain's Mounded Tomb in the Kofun Period

— The Trends in the Imaijinja Mounded Tomb and the Settlements Surrounding It in Maebashi City, Gunma Prefecture —

by SAKAGUCHI Hajime *

This article aims to analyze the formation of the Imaijinja mounded tomb which is located in Maebashi city, Gunma Prefecture by trends of the settlements and wet-rice fields which were excavated around the tomb recently.

The Imaijinja mounded tomb has a 74.5 m length and Keyhole shapes and it is thought to be from the late 5th century AD by chronological sequence of Haniwa earthenware cylinders which were excavated in the ditch surrounding this tomb. In the area surrounding the tomb, there are several tombs which continued from the 4th to the 7th century AD, but the Keyhole shaped mounded tomb did not exist before the late 5th century AD. Then the early cluster of mounded tombs appeared in the late 5th century AD and then some large mounded tombs which have the Keyhole shapes appeared in the 6th century AD. That is, this tomb is an epoch-making one in terms of the changes of tombs in this area.

By the way, several settlement sites have been excavated at the heights neighboring the lowlands surrounding the tomb, namely Aratokitasangido site, Imaimichiue site, Imaimichiue-michisita site and Imaihakusan site. In these sites, pit houses existed in continuity from the 4th to the 10th century AD, but they suddenly increased in the late 5th century AD.

Moreover, a wet-rice field which was covered with Mount Asama's volcanic pumice in 1108 was excavated at Utsuboiyokaichi site which is located west of the Imaijinja mounded tomb. It had been previously covered with a layer of Mount Haruna's volcanic ash in the early 6th century AD and was identified as a wet-rice field by opal phytolith analysis on the site. In the lowland which is located between Aratokitasangido site and Imaimichiue site, a layer which was covered with Mount Haruna's volcanic ash in the early 6th century AD was identifiable as wet-rice field by opal phytolith analysis. So, cultivation of rice was begun before or after the 6th century AD when Haruna's volcanic ash was deposited and there is a possibility that the beginning of cultivation of rice dates back to the 5th century AD in this area.

Phenomena which happened in the late 5th century AD surrounding the tomb, are as follows:

- 1) A type of large mounded tomb of the Keyhole shape appeared.
- 2) The number of pit houses sharply increased in the settlements.
- 3) There is a possibility that wet cultivation of rice began in the lowlands.

As a result, in the late 5th century AD when the tomb was built, wet-rice fields expanded substantially, so settlements grew in this area. In another way, the Imaijinja mounded tomb is a focal point in the development of wet-rice fields in the late 5th century AD.

Key Words

Kofun period, Chieftain, Settlement, Wet-rice fields, Expansion, Mounded tomb

* Gunma Archaeological Research Foundation 784-2 Shimohakoda Oaza Hokkitsu-mura, Seta-gun Gunma-ken Japan

紡錘車の基礎研究(1)

——群馬県内を中心として——

中 沢 悟

1 はじめに

2 研究史

3 紡錘車の基礎研究

(1) 年代観の問題

(2) 形の問題 —— 三角形 長方形 薄台形 厚台形

(3) 材質の問題 —— 石材の種類と鉄製品

(4) 大きさと重さの問題 —— 最大径 孔径 重量

4 ま と め

5 お わ り に

付表 紡錘車出土遺跡報告書一覧

1 はじめに

紡錘車は繊維に撚りを掛けるときに使用される弾み車であり、弥生時代から平安時代に至るまでの多くの遺跡で発掘される一般的な遺物である。筆者の調査した多野郡吉井町の矢田遺跡からも112個出土しており、群馬県内からは1100個以上出土している。このように珍しい遺物でもなく形の変化も乏しいためか、紡錘車に焦点を当てた研究は以外と少ないようである。最近の膨大な発掘調査の成果から導き出された、土器や集落の研究の進展と比較すると寂しい状況である。このように研究が少ないのは内容が充分明らかにされているためではなく、不明であるためどのような視点で研究すればいかなる研究成果が明らかになるのかという見通しがなかなかもてないことによるのではないだろうか。

紡錘車の研究を進める場合、どのような形・材質・大きさ・重量が存在し、それが時代の移り変わりの中でどのように変化しているのか、また紡錘車の製作・供給・所有・使用はどのような状態となっているのか。このような基礎研究を最初に行う必要がある。

2 研究史

紡錘車についての研究や記述は明治時代以降多くの研究者により紹介されている。しかし石製・土製・鉄製の紡錘車の出現段階から平安時代に至るまでの時代を対象とした研究はほとんど認められないようである。以下に筆者の知る限りにおいて研究史の概略を紹介する。

古くから意欲的に取り組んでいる研究者として、八幡一郎氏をあげることができる。八幡一郎

著作集第3巻『弥生時代文化研究』の中にまとめられている紡錘車に関する小論や論文は以下の通りである。

「弥生土器の布目」『人類学雑誌』46—9 昭和6年9月

「日本における紡織技術の起源」『あんとろぼす』2—4 昭和22年12月

「弥生時代紡錘車覚書」『末永先生古稀記念古代学論集叢』昭和42年10月

「北海道の紡錘車について」『北海道考古学』4 昭和43年3月

「朝鮮半島の古代紡錘車資料」『朝鮮学報』第49輯 昭和43年10月

「紡錘車について」『歴史と地理』231号 昭和49年12月

「東アジアの紡錘車」『韓』3—1 昭和49年3月

「イラン国アルボルス山中の古墓出土の紡錘車について」『上智史学』14 昭和44年10月

「寮東半島の古代紡錘車」『日本民族と南方文化』昭和43年9月

このように世界史的な視点から紡錘車の基本的な研究が行われてきた。筆者も多くの知識をこの論功から得ることが出来た。

佐原 真氏は『紫雲出』1964年の報告書の中で弥生時代の紡錘車に就いて触れ、最初から土製の紡錘車として造られたものをA種とし土器破片を加工して穿孔したものをB種とし、石製も同様にA・B種とした。そして材質と重量の違いから地域差と時代差を指摘した。円板状土製品と紡錘車の区別をどのように考えるかによってこの結論は異なってくると思われる。⁽¹⁾ 全国を対象とした最初の研究として渡辺智信氏「紡錘車の研究1」『海上文化1』1966がある。氏は北は岩手県から南は鹿児島県まで約300個の紡錘車を集成し時期別・出土遺構別・材質別・類型別に分類し研究を行い、集落や古墳出土の紡錘車の検討と紡錘車の回転運動の問題について研究を行っている。大規模開発の始まる以前の資料の少ない中での研究のため扱った資料に限界はあるが、紡錘車に意欲的に取り組んだ研究と言える。その後鉄製紡錘車について、角山幸洋氏が『改訂増補版日本染色発達史』1968において、また松田真一氏が『宇陀・丹切古墳群』1975年の中で集成し研究が行われている。滝沢 亮氏は「古代東国における鉄製紡錘車の研究」『物質文化』1985の中で、大規模発掘とその後の研究成果を援用し奈良・平安時代を中心とした遺跡から出土する鉄製紡錘車に就いて研究成果を明らかにしている。氏は論功の中で神奈川・東京・埼玉・千葉・茨城県より出土する鉄製紡錘車を詳しく分析し、鉄製紡錘車は古墳時代からでなく8世紀以降に出土し9世紀代になると増大していくこと、また鉄製紡錘車が出現後も石製紡錘車は消えることなく共に使用されていることを指摘した。井上唯雄氏は「線刻をもつ紡錘車について」『古代学研究』115 1987の中で群馬県内における事例を中心として文字の書かれた紡錘車を集成し、詳しく紹介と分析を行っている。その中で書かれた文字の内容は、地名や人名が多く吉祥文字も含まれており、墨書土器と共通する様相がうかがえる。また文字の刻まれた紡錘車は群馬県に多く、近県では群馬県に近い埼玉県北部に多いが他の県では少ないため、群馬県を中心として分布しているのではないかと指摘している。同氏はまた『芳賀団地遺跡群 第2巻』1988の中で線刻紡錘車について紹介

をしている。櫻井久之氏は「古墳時代の算盤玉形紡錘車」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第32回）資料』1995の中で古墳時代中期の算盤玉をした紡錘車が北部九州と近畿に出土し朝鮮半島との関係を指摘した。小地域を対象とした紡錘車の研究も少ないながら行われており、常総地方を対象としたものとして渡辺 明・川崎純徳「常総地方の所謂「紡錘車」について」『常総台地 6』1972があり、十王台の時期の所産であるとおもわれる紡錘車を多く紹介している。群馬県を対象としたもので中沢悟 春山秀幸 関口功一「古代布生産と在地社会」『群馬の考古学』1988がある。群馬県内出土の総数458個の紡錘車を集成し、形状・時代・地域・材質・重量等の分析を行い、弥生時代から古墳時代前期までの断面の形状が長方形を呈する土製紡錘車が、古墳時代中期以降断面の形状が台形を呈する石製に大きく変化して行くこと、また鉄製紡錘車が9世紀以降急激に増加して行くことを指摘した。これらの事実と矢田遺跡から出土した紡錘車の出土形態から集落内における紡錘車の所有形態には、(1) 特定の住居に集中することなく、多くの場合単独で散在的に所属する型 (2) 複数が特定の住居群に集中的に所属する型の2つの形態が存在することを指摘し、前者は自家消費に対応するための所有形態であり、後者は律令制下の徴税に対応するための所有形態であるとした。春山秀幸氏は前述の成果の上に「矢田遺跡出土の紡錘車から」『矢田遺跡』1990の中で矢田遺跡出土の紡錘車を中心に紡錘車の形状と法量・紡錘車の使用痕・堅穴住居の出土例から見た紡錘車の使用状況等について論をすすめた。

(1) 円板状土製品に就いては「怒智遺跡」瓜生堂遺跡調査会1980 「山賀」大阪府教育委員会1984の中で詳しく触れている。

3 紡錘車の基礎研究

紡錘車の集成や研究を始めてから7年が経過した。きっかけは矢田遺跡から多く出土する紡錘車に興味を持ち始めたことである。県内の資料集成と矢田遺跡の分析を行いその成果は中沢悟 春山秀幸 関口功一「古代布生産と在地社会」『群馬の考古学』1988という形でまとめられた。後に『多胡蛇黒遺跡』1993の中で842個の紡錘車を集成し一覧表を用いて明らかにした。その後も少しずつ集成を重ね1123個と増加した。現在これらの増加した資料に対応するためにパソコンを導入し、基本的データと実測図を呼び込み1個の紡錘車に対し1枚のカードを用いてデータの分析をおこなっている。現在までの集成の成果が第1表である。約100年間を時間軸とするこれらのデータをもとに細かく分析を行うとかなり複雑になり、筆者の力量不足や時間的な制約等から今回の報告は紡錘車の基礎的な資料分析結果の紹介とした。時代区分は便宜上弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の4時代区分とした。時代の不明なものや、孔径0.1～0.3mmのものまた紡錘車として疑問なもの、その他分析に適さない物は対象からはずした。また表やグラフを多く用いて、特徴が理解できるように工夫した。

(1) 年代観の問題

紡錘車がどの時代や時期に属しているのかを知るのは紡錘車を理解するうえでの最も基本となることである。しかし紡錘車自体に独自の年代観が確立されているわけではないため、伴出する

土器を中心とした遺物から年代観を与えることとなる。この遺物の年代観は時代や研究者により必ずしも一致していないことも多いが、報告書に記載されている年代観を基本的に採用し、記載されていないものについては筆者の年代観により決定した。筆者の年代観は、古墳時代の前期から後期までは『矢田遺跡VI』1996、奈良時代・平安時代については従来明らかにしてきたものに加え、来年度『矢田遺跡VII』1997（予定）の中で明らかにする。

(2) 形の問題

古来より、紡錘車の形については外形の特徴から円筒形・截頭円錐形・円盤形・偏平円盤形・餠頭形・笠形・算盤玉形・碁石形等区別され呼称されてきた。どのような呼称が最も適当なのかはわからないが、ここでは新たな試みとして比較的わかりやすい断面形態での違いに注目し、以下の名称で呼称することとした。紡錘車の中で最も多い截頭円錐形は断面形が台形である。厚いものと薄いものがあるため、薄台形と厚台形と分けた。円筒形や偏平円盤形は断面形が長方形と思われる。餠頭形と笠形は断面形が三角形と思われる。算盤玉形は断面が菱形である。台形の狭い面の径と広い面の径を広径・狭径とし、厚さの違いを分類の基準として三角形・長方形・厚台形・薄台形・菱形の5種類とした。以下使用する形態とは断面形態を意味する。なお菱形は近畿と九州の一部しか現在のところ出土していない。形の決定は視覚では一定性に欠けるため、次のような数式をパソコンに条件設定し自動的に決定できるようにした。

If((広径 \leq 0) or (狭径 \leq 0), " ", If((広径-狭径) \leq 広径/10, "長方形", If((広径-狭径) \geq 0.7 \times 広径, "三角形", If(厚さ/広径 \geq 0.4, "厚台形", If(厚さ/広径 $<$ 0.4, "薄台形", "E"))))

この条件設定で使われている広径・狭径・厚さ等の意味は第28図を参照にして欲しい。

第3表で明らかのように、全体としては三角形が最も少なく、長方形も少量である。厚台形は237個で薄台形が309個と多い。台形総数としては546個となり全体の78%を占めており圧倒的に多いことを示している。

時代と共に採用された形が異なることもこの表から理解できる。

弥生時代は長方形が主体を占めており、66個で弥生時代の中で88%となっている。三角形は6個で台形は3個と少量出土している。

古墳時代になると全く様相が異なり、厚台形が2個から130個に、また薄台形が1個から97個に一気に増加している。逆に三角形は6個から5個に、長方形は66個から37個に減少している。このように使用される形の主体が完全に交代している。主体となる薄台形と厚台形は合わせて古墳時代の中で84%となっており、両者では厚台形が多く採用されたようである。

奈良時代になると三角形は完全に姿を消して、長方形も37個から14個へとさらに減少してくる。主体を占める厚台形と薄台形は奈良時代の中で91%を占めている。古墳時代と異なり厚台形より薄台形が多く採用されている。

平安時代になると長方形が少し増加している。これは最初から長方形として造られたのではなく、土師器や須恵器の破片や底部を再利用して造られた転用紡錘車が多く登場することによる。

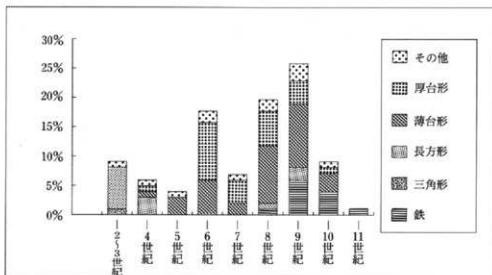
第1表 紡錘車の時期別・形態別・材質別出土数一覧表

時代	時期	鉄製品	三 角 形		長 方 形		薄 台 形		厚 台 形		形不明	合 計
			土	石	土	石	土	石	土	石		
弥生	前期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0個
	中期	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3個
	後期	0	6	0	60	3	1	0	2	0	9	81個
古墳	前期	0	3	1	28	1	4	2	4	2	7	52個
	中期	0	0	1	1	3	2	22	1	3	6	39個
	後期前半	2	0	0	1	2	1	47	11	73	20	157個
	後期後半	4	0	0	1	0	0	16	2	29	7	59個
奈良		5	0	0	4	8	2	83	2	53	19	176個
平安	前期	49	0	0	11	10	11	87	2	30	24	224個
	中期	29	0	0	0	0	2	23	0	12	7	73個
	後期	8	0	0	1	2	1	0	0	3	2	17個
時期不明		15	1	0	35	8	7	56	5	35	55	217個
その他		0	0	4	1	4	0	2	0	1	13	25個
合 計		112個	10個	6個	146個	41個	31個	338個	29個	241個	169個	1123個

弥生時代の長方形が復活したわけではない。依然として厚台形と薄台形が多く使用されており、平安時代の中で87%を占めている。厚台形と薄台形の比率の差は拡大し、厚台形の約3倍の数が薄台形として使われている。

次にこれらの形態別の紡錘車を土製と石製に分けて示したものが、第4表と第5表である。

弥生時代では土製が71個で石製が3個と圧倒的に土製が多い。三角形・薄台形・厚台形では全て土製である。長方形でも土製が62個で石製が3個となっており圧倒的に土製が多い。



第1図 紡錘車の時期別・形態別出土率

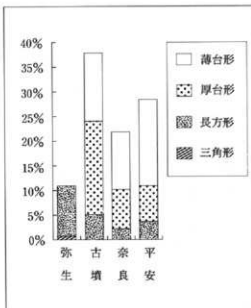
第2表 紡錘車の時期別・形態別・材質別出土率一覧表

	鉄製品 (鉄)	三角形 (土・石)	長方形 (土・石)	薄台形 (土・石)	厚台形 (土・石)	その他	合 計
1 c	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
2 ~ 3 c	0%	1%	7%	0%	0%	1%	9%
4 c	0%	0%	3%	1%	1%	1%	6%
5 c	0%	0%	0%	3%	0%	1%	4%
6 c	0%	0%	0%	6%	10%	2%	18%
7 c	0%	0%	0%	2%	4%	1%	7%
8 c	1%	0%	1%	10%	6%	2%	20%
9 c	6%	0%	2%	11%	4%	3%	26%
10 c	4%	0%	0%	3%	1%	1%	9%
11 c	1%	0%	0%	0%	0%	0%	1%
合 計	12%	1%	13%	36%	26%	12%	100%

第3表 紡錘車の時代別・形態別出土一覧表

	三角形	長方形	厚台形	薄台形	合 計
弥生時代	6 1%	66 10%	2 0%	1 0%	75個 11%
古墳時代	5 0%	37 5%	130 19%	97 14%	269個 38%
奈良時代	0	14 2%	57 8%	86 12%	157個 22%
平安時代	0	25 4%	48 7%	125 18%	198個 29%
合 計	11個 1%	142個 21%	237個 34%	309個 44%	699個 100%

(鉄製品は省く、材質不明品含む)



第2図 紡錘車の時代別・形態別出土率

第4表 土製紡錘車の時代別・形態別出土一覧表

	三角形	長方形	厚台形	薄台形	合 計
弥生時代	6 4%	62 37%	2 1%	1 0%	71個 42%
古墳時代	3 2%	31 19%	18 11%	7 4%	59個 36%
奈良時代	0	4 3%	2 1%	2 1%	8個 5%
平安時代	0	12 7%	2 1%	14 9%	28個 17%
合 計	9個 6%	109個 66%	24個 14%	24個 14%	166個 100%

















三角形 ((広-狭) ≥ 0.7 × 広) 長方形 ((広-狭) ≤ 広/10)
厚台形 (厚さ/広 ≥ 0.4) 薄台形 (厚さ/広 < 0.4)

第5表 石製紡錘車の時代別・形態別出土一覧表

	三角形	長方形	厚台形	薄台形	合 計
弥生時代	0	3 1%	0	0	3個 1%
古墳時代	2 1%	5 1%	112 21%	87 17%	206個 39%
奈良時代	0	8 2%	53 10%	83 16%	144個 28%
平安時代	0	12 2%	45 9%	110 21%	167個 32%
合 計	2個 1%	28個 5%	210個 40%	280個 54%	520個 100%

















古墳時代になると弥生時代に主体であった長方形には土製が多いが、厚台形と薄台形では、土製が25個で石製が199個となっており石製が圧倒的に多くなる。

奈良時代では厚台形と薄台形で土製が4個、石製で136個となっている。平安時代では厚台形と薄台形が土製で16個、石製で155個となっている。このように弥生時代では土製が多いが古墳時代以降になると石製が圧倒的に多くなっていることが明らかである。

<p>前橋市 富田 西 大塚 弥生時代 後期 96号住居 2~3世紀 土</p>  <p>三角形</p> <p>0.6 特大 重量</p>	<p>甘楽郡 白土下 弥生時代 後期 白土C区90 号住居 2~3世紀 土</p>  <p>三角形</p> <p>0.4 中 軽量</p>	<p>利根郡 渡野町 城野・園 弥生時代 後期 1号住居 2~3世紀 土</p>  <p>三角形</p> <p>0.7 中 軽量</p>	<p>利根郡 渡野町 城野 弥生時代 後期 遺構外 2~3世紀 土</p>  <p>三角形</p> <p>0.6 特大 中量</p>
<p>群馬県 群馬 水沼 弥生時代 後期 第3号A住 居跡 2~3世紀 土</p>  <p>三角形</p> <p>0.8 大 重量</p>	<p>群馬県 群馬 水沼 弥生時代 後期 第3号A住 居跡 2~3世紀 土</p>  <p>三角形</p> <p>0.6 特大 重量</p>	<p>沼田市 石巻 古墳時代 前期 A区14号住 居 4世紀 土</p>  <p>三角形</p> <p>0.6 大 軽量</p>	<p>高崎市 熊野臺 (2) 古墳時代 中期 4区2号住居 5世紀後半 石 (砂蔵岩)</p>  <p>三角形</p> <p>0.6 大 重量</p>
<p>前橋市 富田 西 大塚 弥生時代 後期 97号住居 2~3世紀 土</p>  <p>長方形</p> <p>0.7 大 重量</p>	<p>前橋市 内堀遺跡 群4 古墳時代 前期 89号住居 4世紀 土</p>  <p>長方形</p> <p>0.6 中 中量</p>	<p>前橋市 内堀遺跡 群3 古墳時代 前期 11-10号住 居 4世紀 土</p>  <p>長方形</p> <p>0.9 特大 重量</p>	<p>前橋市 内堀遺跡 群3 古墳時代 前期 11-10号住 居 4世紀 土</p>  <p>長方形</p> <p>0.7 特大 重量</p>
<p>前橋市 内堀6 古墳時代 前期 26号住居跡 4世紀前半 土</p>  <p>長方形</p> <p>0.8 大 重量</p>	<p>前橋市 内堀6 古墳時代 前期 33号住居跡 4世紀前半 土</p>  <p>長方形</p> <p>0.8 中 中量</p>	<p>前橋市 内堀6 古墳時代 前期 33号住居跡 4世紀前半 土</p>  <p>長方形</p> <p>0.6 小 中量</p>	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 11-81号住 居 9世紀後半 石 (角礫石・安山岩)</p>  <p>長方形</p> <p>0.9 特大 重量</p>

















第3図 三角形・長方形紡錘車の出土例

0 10 cm

<p>前橋市 荒砥北三木堂1 古墳時代後期 2区15号住居 6世紀前半 石(礫石)</p> <p>0.7 小 中量</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 荒砥上川久保 古墳時代後期 5区29号住居 6世紀前半 石(礫石)</p> <p>1.0 特大</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 荒砥盤原 古墳時代後期 E区16号住居 6世紀前半 石(凝灰岩)</p> <p>0.70 小</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 元越社明神1 古墳時代後期 H-30号住居 6世紀前半 石(木明)</p> <p>0.6 小</p> <p>厚台形</p> 
<p>前橋市 荒砥天之宮 古墳時代後期 D区47号住居 6世紀後半 石(木明)</p> <p>0.8 小 中量</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 小神鳴4 古墳時代後期 G区2号住居 6世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.7 小</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 鳥居-J・K 古墳時代後期 K-65号住居 7世紀後半 石(凝灰岩)</p> <p>0.8 中</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部団地2 古墳時代後期 H-157号住居 7世紀後半 石(かんらん岩)</p> <p>0.6 中</p> <p>厚台形</p> 
<p>前橋市 今井白山 古墳時代後期 1区11号住居 7世紀後半 石(凝灰岩)</p> <p>0.7 小 軽量</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部団地2 古墳時代後期 H-122号住居 7世紀後半 石(かんらん岩)</p> <p>0.6 中</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 鶴谷2 奈良時代 30号住居 8世紀前半 石(礫石)</p> <p>0.8 中</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 鶴谷2 奈良時代 30号住居 8世紀前半 石(礫石)</p> <p>0.8 中</p> <p>厚台形</p> 
<p>前橋市 二之宮 荒砥大日蓮 奈良時代 A区22号住居 8世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.8 大 軽量</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部団地2 平安時代前期 H-487号住居 9世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.8 中</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部団地2 平安時代前期 H-212号住居 9世紀後半 石(かんらん岩)</p> <p>0.7 小</p> <p>厚台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部団地2 平安時代前期 H-81号住居 9世紀後半 石(凝灰岩)</p> <p>0.9 小</p> <p>厚台形</p> 













第4図 厚台形紡錘車の出土例

0 10 cm

<p>前橋市 関原鎮南 古墳時代後期 4号住居 6世紀 石(礫石)</p> <p>0.7 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 荒砥天之宮 古墳時代後期 D区73号住居 6世紀前半 石(不明)</p> <p>0.7 大 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 荒砥天之宮 古墳時代後期 D区15号住居 6世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.7 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 荒砥北三木堂I 古墳時代後期 2区15号住居 6世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.7 中 中量</p> <p>薄台形</p> 
<p>前橋市 荒砥天之宮 古墳時代後期 C区21号住居 6世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.6 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部団地1 古墳時代後期 H-314号住居 7世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.7 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 荒砥久保連團地7 奈良時代 H-20号住居 8世紀 石(礫石・5人墓)</p> <p>0.6 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 荒砥土井二本松 奈良時代 20号住居 8世紀後半 石(凝灰岩・礫石)</p> <p>0.7 中 中量</p> <p>薄台形</p> 
<p>前橋市 列賀東部団地2 奈良時代 H-140号住居 8世紀前半 石(不明)</p> <p>0.7 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 二之宮 奈良時代 2区22号住居 8世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.8 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 二之宮 奈良時代 2区22号住居 8世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.7 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 荒砥土井二本松 奈良時代 20号住居 8世紀後半 石(凝灰岩・礫石)</p> <p>0.7 中 中量</p> <p>薄台形</p> 
<p>前橋市 小神町5 奈良時代 1号住居 8世紀後半 石(片石・礫石)</p> <p>0.7 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部団地2 奈良時代 H-350号住居 8世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.8 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 荒砥小學校II・III 奈良時代 20号住居 8世紀後半 石(不明)</p> <p>0.8 中 中量</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 荒砥久保連團地VI 奈良時代 65号住居 8世紀後半 石(礫石)</p> <p>0.9 中 中量</p> <p>薄台形</p> 

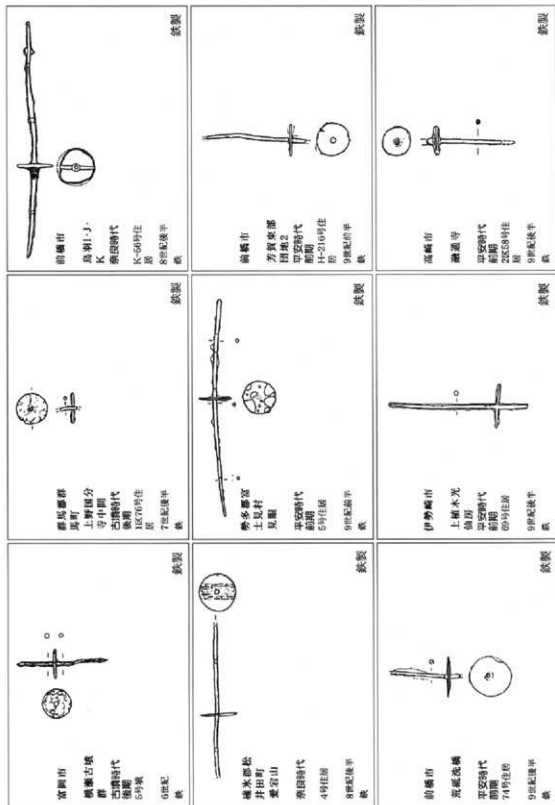
第5図 薄台形紡錘車の出土例(1)

0 10cm

<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-191号住 居 9世紀前半 石(蛇紋岩)</p> <p>0.7 中</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-133号住 居 8世紀後半 石(かんらん岩)</p> <p>0.6 中</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-253号住 居 9世紀前半 石(蛇紋岩)</p> <p>0.9 大</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地1 平安時代 前期 H-77号住 居 9世紀後半 石(蛇紋岩)</p> <p>0.8 中</p> <p>薄台形</p> 
<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-341号住 居 9世紀後半 石(かんらん岩)</p> <p>0.8 中</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地1 平安時代 前期 H-382号住 居 9世紀後半 石(蛇紋岩)</p> <p>0.9 中</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-253号住 居 9世紀前半 石(蛇紋岩)</p> <p>0.9 大</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-77号住 居 9世紀後半 石(蛇紋岩)</p> <p>0.9 大</p> <p>薄台形</p> 
<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-341号住 居 9世紀後半 石(かんらん岩)</p> <p>0.9 中</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-382号住 居 9世紀後半 石(蛇紋岩)</p> <p>0.9 中</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-253号住 居 9世紀前半 石(蛇紋岩)</p> <p>0.8 中</p> <p>薄台形</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-77号住 居 9世紀後半 石(蛇紋岩)</p> <p>0.8 中</p> <p>薄台形</p> 

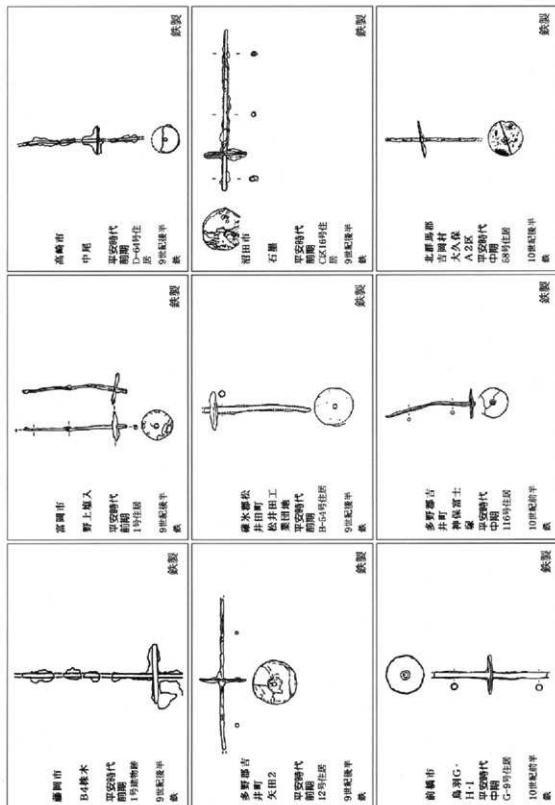
第6図 薄台形紡錘車の出土例(2)

0 10cm



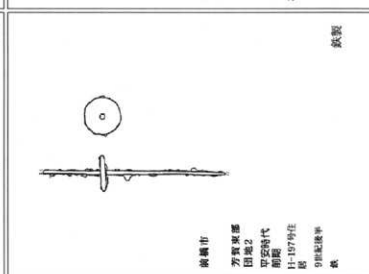
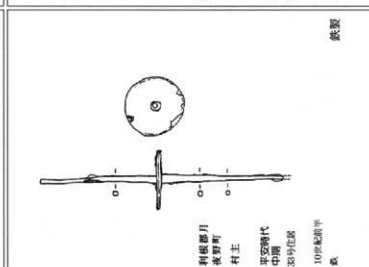
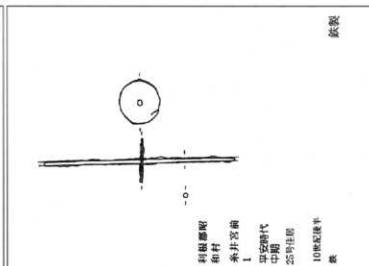
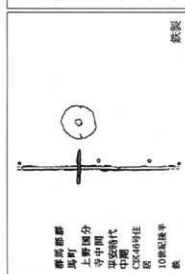
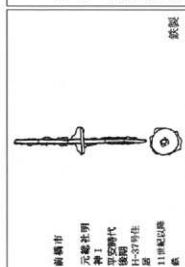
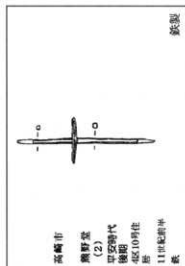
第7図 鉄製紡錘車の出土例(1)

0 10cm



第8図 鉄製紡錘車の出土例2)

0 10cm



第9図 鉄製紡錘車の出土例(3)

0 10cm

(3) 材質の問題

紡錘車の材質は土・石・鉄・木・骨・角・ガラス等が知られている。群馬県内からは土・石・鉄・角の例が知られている。石の場合材質が問題となる。大部分は蛇紋岩・滑石片岩であるがほかにも流紋岩・凝灰岩・角閃石安山岩・軽石・かんらん岩・砂岩・安山岩等で造られている。今回の分析で用いた材質名は、基本的に報告書に記載されていたものとし、報告書に記載されていないもので見ることの可能な紡錘車の石材名は、陣内主一氏(前群馬県立自然科学資料館解説員)と飯島静男氏(群馬地歴研究会)に現物を見ていただき記載したものもある。

第6表で明らかなように、材質では石が574個と最も多く、全体の約66%を占めている。土製は193個で、鉄製は最も少なく97個となっている。

形態同様に材質も時代による特徴を示している。

弥生時代は土製が最も多く79個と弥生時代の中で95%以上を占めている。石製はわずか3個である。

古墳時代になると土製が79個から65個となり、石製は3個から230個と大幅に増加している。形態の時と同様に材質の主体も完全に交代している。また6個と少量であるが、鉄製も採用されはじめています。

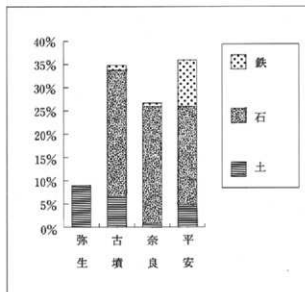
奈良時代になると土製はわずか8個となり、石製が157個と主体を占める。鉄製も8個と少量ではあるが使用されている。

平安時代になると、土製が少し増加している。このことは先の形態別のところで紹介したよう

第6表 紡錘車の時代別・

材質別出土一覧表

	土	石	鉄	合計
弥生時代	79 9%	3 0%	0	82個 9%
古墳時代	65 7%	230 27%	6 1%	301個 35%
奈良時代	8 1%	157 18%	5 1%	170個 20%
平安時代	41 5%	184 21%	86 10%	311個 36%
合計	193個 22%	574個 66%	97個 12%	864個 100%



第10図 紡錘車の時代別・材質別出土率

第7表 紡錘車の石材別・時代別出土一覧表

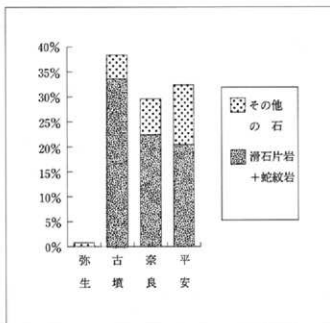
	滑石片岩	蛇紋岩	流紋岩	凝灰岩	角閃石安山岩	軽石	かんらん岩	安山岩	緑色片岩	砂岩	その他	材質不明	合計
弥生	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	3個
古墳	124	46	2	2	1	3	3	0	0	1	15	33	230個
奈良	87	25	11	5	2	1	4	1	3	1	6	11	157個
平安	35	70	19	4	6	5	2	5	3	5	12	16	182個
合計	246	141	33	13	9	9	9	6	6	9	33	60	572個
比率 (材質不明含)	43%	24%	5%	3%	2%	2%	2%	1%	1%	2%	5%	10%	100%
比率 (材質不明除外)	48%	27%	6%	3%	2%	2%	2%	1%	1%	2%	6%	対象外	100%

(孔徑0.3cm以下の物は省く)

第8表 滑石片岩+蛇紋岩とそれ以外の石材との出土一覧表

	滑石片岩+蛇紋岩	その他	合計
弥生時代	0 1%	3 1%	3個 1%
古墳時代	170 33%	27 5%	197個 38%
奈良時代	112 22%	34 7%	146個 29%
平安時代	105 20%	61 12%	166個 32%
合計	387個 75%	125個 25%	512個 100%

(孔徑0.3cm以下と材質不明品省く)



第11図 滑石片岩+蛇紋岩とそれ以外の石材との出土率

に、土師器や須恵器の胴部や底部を再加工して作った転用紡錘車が登場するために増加したものである。平安時代の特色は、鉄製の紡錘車が最も多く採用されてきたことであり、86個と平安時代全体の28%近くを占めている。この様に鉄製の紡錘車が採用されたとしても主体を占めるのは依然として石製であり、鉄製が石製に交代するような現象は認められない。

石材の種類

紡錘車の材質では石材が最も多いことが明らかであるが、石材は同一ではなく数種類認められる。石材の種類について紹介し検討を加える。

第7表で明らかのように滑石片岩が246個と最も多く、蛇紋岩が141個で次に多い。

この2種の石はほぼ同じ岩脈に属し、蛇紋岩のある岩脈は滑石片岩が存在する例が多く、滑石片岩のあるところには、必ず蛇紋岩が存在するとのことである。この2種の石を合計すると387個となり、材質の明らかな石の総数512個の中では約77%を占めている。つまり石製紡錘車の10個中約7.7個は滑石片岩か蛇紋岩で出来ていることを示している。

この滑石片岩や蛇紋岩は鍋川中流域の富岡市から下流の藤岡市にかけての右岸から鬼石町の一帯で、さらに埼玉県の長瀨町にかけて広がる地質学的に「三波川帯」と呼ばれている地域より産出する。いまでも良質な蛇紋岩や滑石片岩を小量ながら河原で採集することができる。県北の沼田市北側と片品川の流域にも蛇紋岩の岩脈は存在するが、紡錘車の加工に適する蛇紋岩の存在は確認できなかった。

次に多いのが流紋岩で33個出土している。この石は砥石として多く使用されており、流紋岩製砥石の主産地は県南西に位置する甘楽郡南牧村である。ほかに利根郡にも存在するが、紡錘車として使用されているかは不明である。

滑石片岩・蛇紋岩・流紋岩以外の石は、全て15個以下と極端に少なくなっている。滑石片岩・蛇紋岩とその他の石材について第8表で比較してみた。前者の石は387個でその他の石が125個である。その他の石材は時代と共に増加している。このことは古墳時代では滑石片岩・蛇紋岩を選択することに強い規制があったが、奈良・平安時代になるとその規制が弱くなり、材質にそれほどこだわらなくなったことを示している。このことはまた土師器や須恵器からの転用紡錘車の存在が平安時代に多い事と共通している。

古墳時代の強い規制とは紡錘車が古墳の副葬品として使われていることや、祭祀遺物である石製模造品に使われている石材の多くが滑石片岩や蛇紋岩であり、材質的に紡錘車と共通していること等により考えられることである。この問題については今後改めて触れて行くつもりである。

(4) 大きさと重さの問題

幅の大きさの違いによる分類

紡錘車は平面的に見ると円形を呈している。直径は小さいものでは径4cm以下であり、大きいものは7cm以上の物もある。この大きさの違いは、時代差なのか使用目的による使い分けなのか、

又は材質の差によるものなのだろうか。そのことについて検討を加える。

直径にバラツキがあるため便宜上直径0.4cm以下を小・4cm～5cm未満を中・5cm～6cm未満を大・6cm以上を特大と呼称して分類を試みた。第9表で明らかのように、径4～5cm未満のわずかに1cm幅の中に全体の約半分の紡錘車が集中している。次に多いのが径5～6cm未満で約1/4を占めている。

両者を合わせると全体の75%を占めている。しかしいずれの時代でもほぼ10%前後の比率をもって小と特大の紡錘車は存在しているのである。同一住居より紡錘車が2～4個と複数出土する例がある。それらの住居の出土例を調べてみると、多くの住居で中と大といったように大きさが異なった紡錘車が出土している例が認められる。つまり異なった大きさの紡錘車を、同一住居内において使い分けていたことが指摘出来そうである。第9表やこのような出土例から、各時代とも中や大の紡錘車のほかに少量ではあるが小と特大の紡錘車を使う必要があったのではないだろうか。

つまり、制作する糸の種類により小・中・大・特大の紡錘車を使い分けていたと考えられるのである。この同一住居内より複数出土している遺構例については別の機会ですく検討を試みる。

次に大きさの違いに土製と石製の違いが関係しているかについて調べてみる。

この表では小・中・大・特大のいずれとも土製と石製が使われており、大きさによる違いが材質の違いを強く反映しているとは言えないようである。そこで同一な材質の中で、大きさの違いによる使い分けが認められるかについて検討してみた。その結果土製は大と特大の大きな紡錘車で58%という確率を示し多く使用されていた。一方石製は小と中の小さい紡錘車で75%という高い確率で多く使用されている事が明らかとなった。おそらく石製と土製の重量の違いからくる作り分けが原因ではないだろうか。この重量については後に詳しく述べる。

中央に穿孔された孔径の違いによる分類

紡錘車には中央部分に紡茎を垂直方向に差し込むために、小さな穴が開けられている。紡茎は弾み車として紡輪をつけて、回転させる芯棒としての働きと、製作された糸を巻き付けて貯めておく役割も持っている。長さは鉄製で見る限り30cm以上ある。材質は確認されている限り木製が多い。このように紡茎は長いと太さに一定の制約が考えられる。3mm以下では細すぎて耐久性に欠ける。1cm以上では太すぎて、回転に不都合である。また紡茎自体の重量が増して撚りの不十分な繊維を空中で支える事が出来なくなり、撚りがかかる前に切れてしまう可能性が高くなる。そこで実際に出土した紡錘車を調べ、紡茎の挿入される紡錘車の孔径の数値を以下の一覧表に示した。

第12表は孔径0.4～1.2cmまでの分布の一覧表、第13表は特色を把握するために、孔径0.5cm以下を狭孔径、0.6～0.8cmを中孔径、0.9cm以上を広孔径と大きく分けて分類したものである。

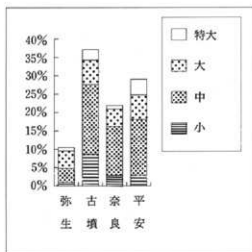
第12表で明らかのように、全ての時代ともに孔径は0.6～0.8cmが最も多く、総数で534個となり全体の79%を占めている。0.6～0.8cmの中ではそれぞれの出土数が近いと、この範囲での大き

さが最も合理的であり、耐久性と重さにも適していたものと思われる。次に多いのが0.5cmと0.9cmであり、合わせて124個で18%となっている。この様に0.5～0.9cmで全体の97%を占めており、ほぼこの範囲に紡錘車の大部分が含まれると言ってよいであろう。それ以外の径を持つ紡錘車は総数22個と少量である。それらの紡錘車を調べてみると、0.4cm以下は7個出土し、古墳時代4個・奈良時代2個・平安時代1個である。1cm以上は15個出土し、古墳時代4個・奈良時代2個・平安時代9個となっている。平安時代に孔径の大きいものが集中するという特色が認められる。

第9表 紡錘車の時代別・最大径別出土一覧表

	小	中	大	特大	合計
弥生時代	8 1%	29 4%	37 5%	10 1%	84個 11%
古墳時代	69 9%	143 19%	53 7%	20 3%	285個 38%
奈良時代	23 3%	98 13%	35 5%	9 1%	165個 22%
平安時代	20 3%	114 15%	57 7%	27 4%	218個 29%
合計	120個 16%	384個 51%	182個 24%	66個 9%	752個 100%

小(径4cm未満) 中(径4～5cm未満) 大(径5～6cm未満)
特大(径6cm以上)



















第12図 紡錘車の時代別・最大径別出土率

第10表 土製紡錘車の時代別・最大径別出土一覧表

	小	中	大	特大	合計
弥生時代	8 4%	28 15%	34 18%	8 4%	78個 41%
古墳時代	5 3%	24 13%	27 14%	7 4%	63個 34%
奈良時代	2 1%	5 3%	1 1%	0	8個 5%
平安時代	2 1%	5 3%	16 8%	15 8%	38個 20%
合計	17個 9%	62個 34%	78個 41%	30個 16%	187個 100%

第11表 石製紡錘車の時代別・最大径別出土一覧表

	小	中	大	特大	合計
弥生時代	0	0	2 1%	2 1%	4個 2%
古墳時代	62 11%	116 21%	26 4%	13 2%	217個 38%
奈良時代	17 3%	92 17%	34 6%	8 2%	151個 28%
平安時代	18 3%	107 20%	40 7%	12 2%	177個 32%
合計	97個 17%	315個 58%	102個 18%	35個 7%	549個 100%

<p>前橋市 内堀6 古墳時代 前期 33号住居跡 4世紀前半 土</p> <p>中量</p> 	<p>前橋市 荒砥北三 木堂1 古墳時代 後期 2区15号住 跡 6世紀前半 石(礫石)</p> <p>中量</p> 	<p>前橋市 荒砥島原 古墳時代 後期 2区16号住 跡 6世紀前半 石(蛇紋岩)</p> 	<p>前橋市 元都北明 神1 古墳時代 後期 14-30号住 跡 6世紀前半 石(不明)</p> 
<p>前橋市 荒砥天之 宮 古墳時代 後期 D区47号住 跡 6世紀後半 石(不明)</p> <p>中量</p> 	<p>前橋市 小神明4 古墳時代 後期 52号住居 跡 6世紀後半 石(礫石)</p> 	<p>前橋市 島羽・ M・N・O 古墳時代 後期 M-60号住 跡 7世紀前半 石(礫石質黏土片岩)</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 古墳時代 後期 H-229号住 跡 7世紀前半 石(蛇紋岩)</p> 
<p>前橋市 勝久保遺 跡群6 古墳時代 後期 81号住居 跡 7世紀前半 石(凝灰岩)</p> <p>厚台形 3.6 小型</p> 	<p>前橋市 今井白山 古墳時代 後期 1区11号住 居跡 7世紀前半 石(蛇紋岩)</p> <p>厚台形 3.5 小型</p> 	<p>前橋市 勝久保遺 跡群7 古墳時代 後期 H-34号住 跡 8世紀 石(蛇紋岩)</p> <p>厚台形 3.7 小型</p> 	<p>前橋市 飯土井二 本松 古墳時代 後期 11号住居 跡 8世紀後半 石(凝灰岩・凝灰石)</p> <p>厚台形 3.3 小型</p> 
<p>前橋市 芳賀東部 団地1 古墳時代 前期 H-364号住 跡 8世紀後半 石(蛇紋岩)</p> <p>薄台形 3.5 小型</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-217号住 跡 9世紀前半 石(蛇紋岩)</p> <p>薄台形 3.9 小型</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-308号住 跡 9世紀前半 石(蛇紋岩)</p> <p>薄台形 3.8 小型</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-215号住 跡 9世紀後半 石(かんらん岩)</p> <p>薄台形 3.2 小型</p> 











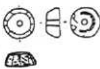




第13図 小型紡錘車の出土例

0 10cm

前橋市 内堀遺跡 跡4 古墳時代 前期 59号住居 4世紀 土	中量 長方形 4.5 中型	前橋市 内堀6 古墳時代 前期 32号住居跡 4世紀前半 土	中量 長方形 4.3 中型	前橋市 神久保遺 跡第7 古墳時代 中期 11-10号住 居 5世紀 石(礫石)	軽量 長方形 4.8 中型	前橋市 岡島遺跡 古墳時代 後期 4号住居 6世紀 石(礫石)	中量 薄台形 4.4 中型
前橋市 荒城天之 宮 古墳時代 後期 E区5号住居 6世紀前半 石(不明)	軽量 薄台形 4.2 中型	前橋市 荒城北三 木堂1 古墳時代 後期 2B15号住 居 6世紀後半 石(礫石)	中量 薄台形 4.6 中型	前橋市 荒城天之 宮 古墳時代 後期 C区21号住 居 6世紀後半 石(礫石)	重量 薄台形 4.8 中型	前橋市 鳥羽J・ K 古墳時代 後期 K-65号住 居 7世紀前半 石(凝灰岩)	厚台形 4.4 中型
前橋市 芳賀東部 団地2 古墳時代 後期 H-157号住 居 7世紀前半 石(かんらん岩)	厚台形 4.1 中型	前橋市 芳賀東部 団地2 古墳時代 後期 H-172号住 居 7世紀後半 石(かんらん岩)	厚台形 4.3 中型	前橋市 芳賀東部 団地1 古墳時代 後期 H-314号住 居 7世紀後半 石(頁岩)	中量 薄台形 4.6 中型	前橋市 鳥羽J・ K 奈良時代 区工房跡 8世紀 石(凝灰岩?)	中量 薄台形 4.5 中型
前橋市 神久保遺 跡第7 奈良時代 H-20号住 居 8世紀 石(かんらん岩)	中量 薄台形 4.5 中型	前橋市 芳賀東部 団地2 奈良時代 H-140号住 居 8世紀前半 石(凝灰岩)	厚台形 4.3 中型	前橋市 芳賀東部 団地2 奈良時代 H-140号住 居 8世紀前半 石(不明)	薄台形 4.7 中型	前橋市 龜谷2 奈良時代 30号住居 8世紀前半 石(礫石)	厚台形 4.4 中型

第14図 中型紡錘車の出土例1)

0 10cm

<p>前橋市 二之宮 荒砥大日 塚 奈良時代 B区3号住 居跡 8世紀後半 石(礫石)</p> <p>中量</p>  <p>薄台形 4.4 中型</p>	<p>前橋市 二之宮千 足 奈良時代 2区22号住 居跡 8世紀後半 石(礫石)</p>  <p>中量</p> <p>薄台形 4.8 中型</p>	<p>前橋市 東土井二 木松 奈良時代 20号住居 8世紀後半 石(礫石・風吹石)</p>  <p>軽量</p> <p>薄台形 4.0 中型</p>	<p>前橋市 小神明5 奈良時代 1号住居 8世紀後半 石(片岩質)か</p>  <p>薄台形 4.0 中型</p>
<p>前橋市 荒子小学 校II・III 奈良時代 20号住居 8世紀後半 石(不明)</p> <p>中量</p>  <p>薄台形 4.6 中型</p>	<p>前橋市 勝久保遺 跡群VI 奈良時代 65号住居 8世紀後半 石(礫石)</p>  <p>薄台形 4.8 中型</p>	<p>前橋市 勝久保遺 跡群VI 奈良時代 65号住居 8世紀後半 石(礫石)</p>  <p>薄台形 4.9 中型</p>	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-133号住 居跡 8世紀後半 石(かんらん岩)</p>  <p>薄台形 4.3 中型</p>
<p>前橋市 西久保 平安時代 前期 3号住居跡 9世紀 石(火山岩)</p> <p>重量</p>  <p>厚台形 4.4 中型</p>	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-191号住 居跡 9世紀前半 石(礫石)</p>  <p>薄台形 4.2 中型</p>	<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-487号住 居跡 9世紀前半 石(礫石・片岩)</p>  <p>厚台形 4.3 中型</p>	<p>前橋市 芳賀東部 団地1 平安時代 前期 H-382号住 居跡 9世紀後半 石(礫石)</p>  <p>薄台形 4.1 中型</p>
<p>前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-344号住 居跡 9世紀後半 石(かんらん岩)</p> <p>薄台形 4.4 中型</p> 	<p>前橋市 芳賀東部 団地1 平安時代 前期 H-272号住 居跡 9世紀後半 石(礫石)</p> <p>重量</p>  <p>薄台形 4.8 中型</p>	<p>前橋市 島袋G・ H-1 平安時代 中期 G-81号住 居跡 10世紀前半 石(礫石)</p>  <p>薄台形 4.9 中型</p>	

0 10 cm

第15図 中型紡錘車の出土例2)

前橋市 富田・西 大塚 弥生時代 後期 97号住居 2~3世紀 土	前橋市 内堀 6 古墳時代 前期 26号住居跡 4世紀前半 土	前橋市 荒砥天之 宮 古墳時代 後期 D区73号住 居 6世紀前半 石(不明)	前橋市 傳久保遺 跡群VI 奈良時代 65号住居 8世紀後半 石(磨石)
長方形 5.2 大型	重量 長方形 5.3 大型	中量 薄台形 5.2 大型	薄台形 5.6 大型
前橋市 二 之宮町 荒砥大日 塚 奈良時代 A区22号住 居跡 8世紀後半 石(磨石)	前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-253号住 居 9世紀前半 石(凝灰岩)	前橋市 荒砥井二 塚土井 平安時代 前期 8号住居 9世紀前半 石(凝灰岩・風吹石)	前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-77号住 居 9世紀後半 石(凝灰岩)
輕量 厚台形 5.1 大型	薄台形 5.6 大型	重量 薄台形 5.4 大型	薄台形 5.6 大型
前橋市 壹野 平安時代 前期 C8号住居 9世紀後半 土	前橋市 島郭G・ H-1 平安時代 中期 I-92号住居 10世紀前半 石(凝灰岩)	前橋市 富田・西 大塚 弥生時代 後期 96号住居 2~3世紀 土	前橋市 内堀遺跡 群3 古墳時代 前期 H-10号住 居 4世紀 土
薄台形 5.3 大型	薄台形 5.1 大型	三角形 6.5 特大型	長方形 7.2 特大型
前橋市 内堀遺跡 群3 古墳時代 前期 H-10号住 居 4世紀 土	前橋市 荒砥上川 久保 古墳時代 後期 5区29号住 居 6世紀前半 石(不明)	前橋市 下東西 平安時代 前期 SJ163号住 居 9世紀後半 石(凝灰岩)	
長方形 6.3 特大型	厚台形 6.0 特大型	最重量 薄台形 6.1 特大型	

0 10cm

第16図 大型・特大型紡錘車の出土例

第12表 紡錘車の時代別・孔径別出土一覧表

	0.4cm	0.5cm	0.6cm	0.7cm	0.8cm	0.9cm	1.0cm	1.1cm	1.2cm	合 計
弥生時代	0	11	26	15	8	4	0	0	0	64個
古墳時代	4	12	89	70	66	17	3	1	0	262個
奈良時代	2	4	38	55	33	14	2	0	0	148個
平安時代	1	6	15	49	70	56	5	3	1	206個
合 計	7個	33個	168個	189個	177個	91個	10個	4個	1個	680個
出 土 率	1%	5%	25%	28%	26%	13%	1%	1%	0%	100%

(鉄製品と孔径0.3cm以下の物は省く)

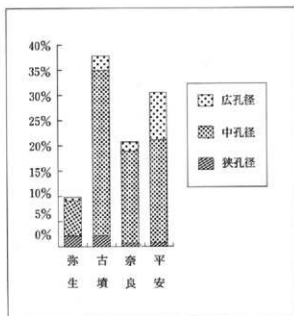
第13表 紡錘車の時代別・孔径別出土一覧表

	狭孔径	中孔径	広孔径	合 計
弥生時代	11 2%	49 7%	4 1%	64個 10%
古墳時代	16 2%	225 33%	21 3%	262個 38%
奈良時代	6 1%	126 18%	16 2%	148個 21%
平安時代	7 1%	134 20%	65 10%	206 31%
合 計	40個 6%	534個 78%	106個 16%	680個 100%

狭孔径(孔径0.5cm以下)

中孔径(孔径0.6～0.8cm)

広孔径(孔径0.9cm以上)



第17図 紡錘車の時代別・孔径別出土率

孔径による分類を土製と石製の違いで分けたのが第14表と第15表である。両者とも0.6～0.8cmが70%以上を占めている。土製では0.6cm、石製では0.7cmと0.8cmの孔径を持つものが最も多いと言う特徴を示している。

重量の違いによる分類

紡錘車の中で最も重要な意味を持つものの一つに重さがある。軽すぎると回転が弱く、糸に充分な撚りが懸からない。一方重すぎると、糸に撚りがかかる前に重量に耐えられずに切れてしまうおそれがある。また多くの時間をかけて、長い間使い続けるため、使いやすさも重要な要素と

第14表 土製紡錘車の時代別・孔径別出土一覧表

	0.4cm	0.5cm	0.6cm	0.7cm	0.8cm	0.9cm	1.0cm	1.1cm	1.2cm	合 計
弥生時代	0	11	24	15	8	3	0	0	0	61個
古墳時代	2	4	30	9	7	8	0	0	0	60個
奈良時代	1	0	3	2	1	0	0	0	0	7個
平安時代	1	3	2	5	11	12	1	1	0	36個
合 計	4個	18個	59個	31個	27個	23個	1個	1個	0個	164個
出 土 率	2%	11%	36%	19%	16%	14%	1%	1%	0%	100%

第15表 石製紡錘車の時代別・孔径別出土一覧表

	0.4cm	0.5cm	0.6cm	0.7cm	0.8cm	0.9cm	1.0cm	1.1cm	1.2cm	合 計
弥生時代	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2個
古墳時代	1	8	58	61	57	9	3	1	0	198個
奈良時代	1	3	35	52	30	14	2	0	0	137個
平安時代	0	3	13	44	56	44	4	2	1	167個
合 計	2個	14個	108個	157個	143個	67個	9個	3個	1個	504個
出 土 率	0%	3%	21%	31%	31%	13%	2%	1%	0%	100%

なる。そこで重量の違いについて調べてみる。

第16表で明らかなように、30～50g未満が全体の39%を占めており最も多い。次に多いのが、30g未満と50～70g未満である。3つの領域で全体の89%を占めている。

時代別で検討してみると弥生時代では軽量が多く、古墳時代・奈良時代では中量が多く、平安時代になると重量が最も多く採用されている。















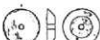

さらに材質別に検討してみる。土製紡錘車では、弥生時代で軽量が過半数を占め、古墳時代になると中量と重量が多くなる。奈良時代・平安時代では中量が多い。

石製紡錘車では、弥生時代～奈良時代までは中量が多く、平安時代になると重量が多い傾向を示している。

時代や材質等を含めて全体的に見るなら、中量が普遍的に多く採用されていることが明らかである。その中の傾向として、弥生時代では軽量が多く、平安時代では重量が多く採用されると言う結果を示している。





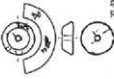











[illegible]

第18図 孔径0.4~0.5cmの紡錘車出土例

<p>前橋市 栗田・西 大塚 弥生時代 後期 56号住居 2~3世紀 土</p> <p>特大 三角 孔徑 0.6</p> 	<p>前橋市 内庭通勝 群4 古墳時代 前期 39号住居 4世紀 土</p> <p>中 中量 長方 孔徑 0.6</p> 	<p>前橋市 内庭6 古墳時代 前期 39号住居 4世紀前半 土</p> <p>小 中量 長方 孔徑 0.6</p> 	<p>前橋市 柳久保通 群7 古墳時代 中期 H-10号住 居 5世紀 石 (礫石)</p> <p>中 軽量 長方 孔徑 0.6</p> 
<p>前橋市 元蔵社朗 神1 古墳時代 後期 H-30号住 居 6世紀前半 石 (不明)</p> <p>小 厚台 孔徑 0.6</p> 	<p>前橋市 荒砥天之 宮 古墳時代 後期 CX21号住 居 6世紀後半 石 (礫石)</p> <p>中 重量 厚台 孔徑 0.6</p> 	<p>前橋市 阿賀東郡 団地2 古墳時代 後期 H-157号住 居 7世紀前半 石 (かみらん岩)</p> <p>中 厚台 孔徑 0.6</p> 	<p>前橋市 柳久保通 群6 古墳時代 後期 81号住居 7世紀前半 石 (礫石)</p> <p>小 厚台 孔徑 0.6</p> 
<p>前橋市 阿賀東郡 団地2 古墳時代 後期 H-122号住 居 7世紀後半 石 (かみらん岩)</p> <p>中 厚台 孔徑 0.6</p> 	<p>前橋市 柳久保通 群7 奈良時代 後期 H-20号住 居 8世紀 石 (かみらん岩)</p> <p>中 中量 厚台 孔徑 0.6</p> 	<p>前橋市 阿賀東郡 団地2 奈良時代 後期 H-133号住 居 8世紀後半 石 (かみらん岩)</p> <p>中 厚台 孔徑 0.6</p> 	<p>前橋市 栗田・西 大塚 弥生時代 後期 97号住居 2~3世紀 土</p> <p>大 長方 孔徑 0.7</p> 
<p>前橋市 内庭通勝 群3 古墳時代 前期 H-10号住 居 4世紀 土</p> <p>特大 長方 孔徑 0.7</p> 	<p>前橋市 関家橋南 古墳時代 後期 4号住居 6世紀 石 (礫石)</p> <p>中 中量 厚台 孔徑 0.7</p> 	<p>前橋市 荒砥天之 宮 古墳時代 後期 DX73号住 居 6世紀前半 石 (不明)</p> <p>大 中量 厚台 孔徑 0.7</p> 	<p>前橋市 荒砥通勝 古墳時代 後期 E区16号住 居 6世紀前半 石 (礫石)</p> <p>小 厚台 孔徑 0.7</p> 

第19図 孔徑0.6~0.7cmの紡錘車出土例

0 10cm

<p>前橋市 茨城北三木型 古墳時代後期 20x15号住居 6世紀後半 石(凝灰岩)</p>  <p>中 中量 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>	<p>前橋市 今井白山 古墳時代後期 15x11号住居 7世紀前半 石(凝灰岩)</p>  <p>小 輕量 厚台</p> <p>孔径 0.7</p>	<p>前橋市 芳賀東部 古墳時代後期 H-314号住居 7世紀後半 石(頁岩)</p>  <p>中 中量 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>	<p>前橋市 芳賀東部 古墳時代後期 H-314号住居 7世紀後半 石(頁岩)</p>  <p>中 中量 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>
<p>前橋市 芳賀東部 古墳時代後期 H-140号住居 8世紀前半 石(不明)</p>  <p>中 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>	<p>前橋市 二之宮千足 古墳時代後期 20x22号住居 8世紀後半 石(凝灰岩)</p>  <p>中 中量 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>	<p>前橋市 小神明5 奈良時代 1号住居 8世紀後半 石(片岩)</p>  <p>中 輕量 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>	<p>前橋市 小神明5 奈良時代 1号住居 8世紀後半 石(片岩)</p>  <p>中 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>
<p>前橋市 芳賀東部 古墳時代後期 H-191号住居 9世紀前半 石(凝灰岩)</p>  <p>中 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>	<p>前橋市 芳賀東部 古墳時代後期 H-308号住居 9世紀後半 石(凝灰岩)</p>  <p>小 輕量 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>	<p>前橋市 芳賀東部 古墳時代後期 H-212号住居 9世紀後半 石(かみくら岩)</p>  <p>小 薄台</p> <p>孔径 0.7</p>	<p>前橋市 芳賀東部 古墳時代後期 20号住居跡 4世紀前半 土</p>  <p>大 重量 長方</p> <p>孔径 0.8</p>
<p>前橋市 内郷6 古墳時代後期 32号住居跡 4世紀前半 土</p>  <p>中 中量 長方</p> <p>孔径 0.8</p>	<p>前橋市 荒砥天之宮 古墳時代後期 15x5号住居 6世紀後半 石(不明)</p>  <p>中 輕量 薄台</p> <p>孔径 0.8</p>	<p>前橋市 荒砥天之宮 古墳時代後期 15x7号住居 6世紀後半 石(不明)</p>  <p>小 中量 厚台</p> <p>孔径 0.8</p>	<p>前橋市 荒砥天之宮 古墳時代後期 K-65号住居 7世紀前半 石(凝灰岩)</p>  <p>中 厚台</p> <p>孔径 0.8</p>

第20圖 孔径0.7~0.8cmの紡錘車出土例

0 10cm

前橋市 鹿沼・ M・N・O 古墳時代 後期 M-50号住 居 7世紀前半 石(滑石質磁器片)	小 厚台 孔径 0.8	前橋市 芳賀東部 田部2 奈良時代 H-140号住 居 8世紀前半 石(硬砂岩)	中 厚台 孔径 0.8	前橋市 越後2 奈良時代 30号住居 8世紀前半 石(滑石)	中 厚台 孔径 0.8	前橋市二 之宮 萬葉大日 彦 奈良時代 B区3号住 居 8世紀前半 石(滑石)	中 中盤 厚台 孔径 0.8
前橋市 藤土井二 本松 奈良時代 11号住居 8世紀後半 石(硬砂岩或吹石)	小 輕盤 厚台 孔径 0.8	前橋市 萬子小学 校・III 奈良時代 20号住居 8世紀後半 石(不明)	中 中盤 厚台 孔径 0.8	前橋市 柳久保遺 蹟田口 奈良時代 65号住居 8世紀後半 石(滑石)	中 厚台 孔径 0.8	前橋市二 之宮 萬葉大日 彦 奈良時代 A区22号住 居 8世紀後半 石(滑石)	大 輕盤 厚台 孔径 0.8
前橋市 芳賀東部 田部2 平安時代 前期 H-217号住 居 9世紀前半 石(硬砂岩)	小 厚台 孔径 0.8	前橋市 芳賀東部 田部2 平安時代 前期 H-487号住 居 9世紀前半 石(磨石片岩)	中 厚台 孔径 0.8	前橋市 芳賀東部 田部2 平安時代 前期 H-344号住 居 9世紀後半 石(かんらん岩)	中 厚台 孔径 0.8	前橋市 芳賀東部 田部1 平安時代 前期 H-272号住 居 9世紀後半 石(硬砂岩)	中 輕盤 厚台 孔径 0.8
前橋市 内郷遺跡 群3 古墳時代 前期 H-10号住 居 4世紀 土	特大 長方 孔径 0.9	前橋市 柳久保遺 蹟田7 奈良時代 11-34号住 居 8世紀 石(硬砂岩)	小 輕盤 厚台 孔径 0.9	前橋市 柳久保遺 蹟田VI 奈良時代 65号住居 8世紀後半 石(滑石)	中 厚台 孔径 0.9	前橋市 柳久保遺 蹟田VI 奈良時代 65号住居 8世紀後半 石(滑石)	大 厚台 孔径 0.9

第21図 孔径0.8~0.9cmの紡錘車出土例

0 10cm

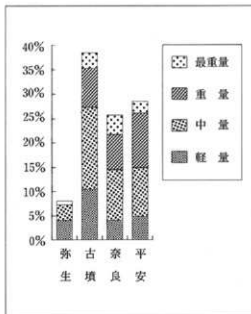
前橋市 西久保 平安時代 前期 3号住居跡 9世紀 石(安山岩)	中 重量 厚台 孔径 0.9	前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-253号住 居 9世紀後半 石(凝灰岩)	大 厚台 孔径 0.9	前橋市 下東西 平安時代 前期 S1163号住 居 9世紀後半 石(凝灰岩)	特大 最重量 厚台 孔径 0.9	前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-77号住 居 9世紀後半 石(凝灰岩)	大 厚台 孔径 0.9
前橋市 寶野 平安時代 前期 C8号住居 9世紀後半 土	大 厚台 孔径 0.9	前橋市 芳賀東部 団地1 平安時代 前期 H-382号住 居 9世紀後半 石(凝灰岩)	中 厚台 孔径 0.9	前橋市 芳賀東部 団地2 平安時代 前期 H-81号住 居 9世紀後半 石(凝灰岩)	小 厚台 孔径 0.9	前橋市 龍宮G- H-1 平安時代 中期 G-81号住 居 10世紀前半 石(凝灰岩)	中 厚台 孔径 0.9
前橋市 第1井二 本松 平安時代 前期 8号住居 9世紀後半 石(凝灰岩低灰石)	大 重量 厚台 孔径 1.0	前橋市 荒砥上川 久保 古墳時代 後期 55X29号住 居 6世紀前半 石(不明)	特大 厚台 孔径 1.0	伊勢崎市 上湯水光 仙馬 平安時代 前期 116号住居 9世紀後半 石(凝灰)	特大 重量 厚台 孔径 1.0	多野郡吉 井町 矢田B 平安時代 前期 513号住居 9世紀後半 石(砂岩)	特大 最重量 長方 孔径 1.0
太田市 成康住宅 団地 平安時代 前期 34号住居 9世紀後半 土	特大 中量 長方 孔径 1.0	新田郡新 田町 台 平安時代 前期 62862号住 居 9世紀後半 石(凝灰岩)	大 厚台 孔径 1.0	多野郡吉 井町 川福 平安時代 前期 5号住居 9世紀後半 石(不明)	特大 厚台 孔径 1.1	前橋市 芳賀東 団地2 平安時代 前期 H-132号住 居 9世紀前半 石(角閃石英山岩)	大 厚台 孔径 1.2

第22図 孔径0.9~1.2cmの紡錘車出土例

第16表 紡錘車の時代別・重量別出土一覧表

	軽 量	中 量	重 量	最重量	合 計
弥生時代	22 4%	13 3%	3 1%	1 0%	39個 8%
古墳時代	48 10%	84 17%	39 8%	18 3%	189個 38%
奈良時代	22 4%	48 10%	36 7%	20 4%	126個 25%
平安時代	25 5%	50 10%	57 11%	16 3%	148個 29%
合 計	117個 23%	195個 40%	135個 27%	55個 10%	502個 100%

(鉄製品と孔径0.3cm以下の物は省く)
 軽量(30g未満) 中量(30～50g未満)
 重量(50～70g未満) 最重量(70g以上)



第23図 紡錘車の時代別・重量別出土率

第17表 土製紡錘車の時代別・重量別出土一覧表

	軽 量	中 量	重 量	最重量	合 計
弥生時代	21 22%	11 11%	3 3%	1 1%	36個 37%
古墳時代	11 11%	14 14%	14 14%	1 1%	40個 40%
奈良時代	1 1%	3 3%	1 1%	0 0%	5個 5%
平安時代	5 5%	7 7%	3 3%	3 3%	18個 18%
合 計	38個 39%	35個 35%	21個 21%	5個 5%	99個 100%

軽量(30g未満) 中量(30～50g未満) 重量(50～70g未満) 最重量(70g以上)

















第18表 石製紡錘車の時代別・重量別出土一覧表

	軽 量	中 量	重 量	最重量	合 計
弥生時代	1 0%	2 0%	0 0%	0 0%	3個 0%
古墳時代	36 9%	70 18%	25 6%	17 4%	148個 37%
奈良時代	18 5%	43 11%	35 9%	20 5%	116個 30%
平安時代	20 5%	43 11%	54 14%	13 3%	130個 33%
合 計	75個 19%	158個 40%	114個 29%	50個 12%	397個 100%

前橋市 柳久保遺跡 跡部7 古墳時代 中群 H-10号住居 跡 6世紀 石(礫石)	中 長方形 14.0 輕量	前橋市 京成天之宮 古墳時代 E区5号住居 跡 6世紀前半 石(不明)	中 薄台形 29.9 輕量	前橋市 今井白山 古墳時代 後群 I区11号住居 跡 7世紀後半 石(蛇紋岩)	小 厚台形 23.9 輕量	前橋市 柳久保遺跡 跡部7 奈良時代 H-34号住居 跡 8世紀 石(蛇紋岩)
前橋市 飯土井二木松 奈良時代 11号住居 跡 8世紀後半 石(礫岩斑沢石)	小 厚台形 20.8 輕量	前橋市 飯土井二木松 奈良時代 20号住居 跡 8世紀後半 石(礫岩斑沢石)	中 薄台形 24.0 輕量	前橋市 二之宮町 荒砥大目塚 奈良時代 A区22号住居 跡 8世紀後半 石(礫石)	大 厚台形 10 輕量	前橋市 芳賀東部 団地1 平安時代 新群 H-308号住居 跡 9世紀前半 石(蛇紋岩)
甘楽郡 甘楽町 白倉下 原・天引 古墳時代 前期 天引143号住居 跡 4世紀 石(蛇紋岩)	中 薄台形 27.6 輕量	甘楽郡 甘楽町 甘楽条理 古墳時代 中群 83号住居 跡 5世紀後半 石(礫石)	中 薄台形 29.3 輕量	甘楽郡 甘楽町 甘楽条理 古墳時代 後群 84号住居 跡 6世紀 石(礫石)	中 薄台形 25.8 輕量	甘楽郡 甘楽町 甘楽条理 古墳時代 後群 93号住居 跡 6世紀 石(礫石)
富岡市 内匠諏訪 古墳時代 A区11号住居 跡 6世紀前半 土	中 厚台形 27.0 輕量	富岡市 南蛇井増光寺2 古墳時代 E区3号住居 跡 8世紀前半 石(礫石)	大 長方形 4.5 輕量	多野郡 吉井町 神保富士塚 奈良時代 82号住居 跡 8世紀後半 石(礫石片岩)	中 薄台形 23.2 輕量	多野郡 吉井町 多胡蛇塚 奈良時代 14号住居 跡 8世紀後半 石(礫石片岩)












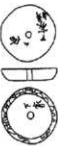
第24図 輕量紡錘車の出土例

0 10cm

<p>前橋市 内堀通跡 群4 古墳時代 前期 59号住居 4世紀 土</p> <p>中 長方形 34.0 中量</p> 	<p>前橋市 内堀6 古墳時代 前期 33号住居跡 4世紀前半 土</p> <p>中 長方形 37 中量</p> 	<p>前橋市 内堀6 古墳時代 前期 33号住居跡 4世紀前半 土</p> <p>中 長方形 39 中量</p> 	<p>前橋市 関泉橋南 古墳時代 後期 4号住居 6世紀 石(礫石)</p> <p>中 厚台形 41.8 中量</p> 
<p>前橋市 荒砥天之 宮 古墳時代 後期 D区73号住 居 6世紀前半 石(不明)</p> <p>大 厚台形 48.3 中量</p> 	<p>前橋市 荒砥北三 木堂1 古墳時代 後期 D区15号住 居 6世紀前半 石(礫石)</p> <p>小 厚台形 42.2 中量</p> 	<p>前橋市 荒砥北三 木堂1 古墳時代 後期 D区15号住 居 6世紀後半 石(礫石)</p> <p>中 厚台形 33.3 中量</p> 	<p>前橋市 荒砥天之 宮 古墳時代 後期 D区47号住 居 6世紀後半 石(不明)</p> <p>小 厚台形 47.5 中量</p> 
<p>前橋市 芳賀東部 団地1 古墳時代 前期 H-314号住 居 7世紀後半 石(礫石)</p> <p>中 厚台形 48.5 中量</p> 	<p>前橋市 鳥羽・J・ K 奈良時代 区工跡跡 8世紀 石(炭酸岩?)</p> <p>中 厚台形 39.5 中量</p> 	<p>前橋市 柳久保遺 跡群7 奈良時代 H-20号住 居 8世紀 石(かんらん 石)</p> <p>中 厚台形 43.0 中量</p> 	<p>前橋市二 之宮 荒砥大日 原 奈良時代 B区3号住 居跡 8世紀前半 石(礫石)</p> <p>中 厚台形 45 中量</p> 
<p>前橋市 二之宮千 足 奈良時代 2区22号住 居 8世紀後半 石(礫石)</p> <p>中 厚台形 44.8 中量</p> 	<p>前橋市 荒砥L・ 島梨L・ M・N・O 平安時代 前期 L-185号住 居 9世紀後半 石(不明)</p> <p>中 厚台形 48.0 中量</p> 	<p>前橋市 荒砥L・ 島梨L・ M・N・O 平安時代 前期 L-185号住 居 9世紀後半 石(礫石)</p> <p>中 長方形 43.5 中量</p> 	<p>前橋市 荒砥天之 宮 平安時代 後期 D区32号住 居 11世紀 石(不明)</p> <p>中 厚台形 36.8 中量</p> 

第25図 中量紡錘車の出土例

0 10cm

<p>多野郡 吉井町 矢田1</p> <p>平安時代 前期 189号住居 9世紀前半</p> <p>大 薄台形 54.8 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 	<p>多野郡 吉井町 矢田1</p> <p>平安時代 前期 264号住居 9世紀前半</p> <p>中 薄台形 60.3 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 	<p>多野郡 吉井町 神保富士塚</p> <p>平安時代 前期 111号住居 9世紀前半</p> <p>中 厚台形 61.5 重量</p> <p>石 (薄片岩石)</p> 	<p>多野郡 吉井町 矢田2</p> <p>平安時代 前期 12号住居 9世紀後半</p> <p>中 薄台形 51.5 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 
<p>多野郡 吉井町 神保富士塚</p> <p>平安時代 前期 3号住居 9世紀後半</p> <p>中 薄台形 63.0 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 	<p>多野郡 吉井町 羽田倉</p> <p>平安時代 中期 60号住居 10世紀前半</p> <p>大 薄台形 59.0 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 	<p>多野郡 吉井町 羽田倉</p> <p>平安時代 中期 69号住居 10世紀前半</p> <p>中 薄台形 56.0 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 	<p>多野郡 吉井町 羽田倉</p> <p>平安時代 中期 69号住居 10世紀前半</p> <p>中 薄台形 52.0 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 
<p>多野郡 吉井町 矢田1</p> <p>平安時代 後期 134号住居 10世紀後半</p> <p>中 厚台形 54.0 重量</p> <p>石 (凝灰岩)</p> 	<p>多野郡 吉井町 矢田1</p> <p>平安時代 後期 79号住居 11世紀前半</p> <p>中 厚台形 52.3 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 	<p>多野郡 吉井町 矢田1</p> <p>平安時代 後期 90号住居 11世紀前半</p> <p>中 厚台形 55.4 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 	<p>多野郡 吉井町 黒瀬</p> <p>古墳時代 後期 4区24号住居 6世紀後半</p> <p>特大 薄台形 66.2 重量</p> <p>石 (蛇紋岩)</p> 

第26図 重量紡錘車の出土例

0 10 cm

富岡市 内匠上之原	古墳時代後期 36号住居 6世紀	大厚台形 80.0 最重量 石(礫石)	富岡市 七日市 観音前	古墳時代後期 36号住居跡 6世紀	大厚台形 85.5 最重量 石(礫石)	富岡市 七日市 観音前	古墳時代後期 36号住居跡 6世紀	大厚台形 8.4 最重量 石(礫石)	富岡市 七日市 観音前	古墳時代後期 36号住居跡 6世紀	大厚台形 8.4 最重量 石(礫石)	甘栗町 甘栗 理	古墳時代後期 46号住居 6世紀前半	特大厚台形 150.0 最重量 石	甘栗町 甘栗 理	古墳時代後期 46号住居 6世紀前半	特大厚台形 150.0 最重量 石
多野郡 吉井町 黒瀬	古墳時代後期 4区24号住居 6世紀後半	特大厚台形 120.0 最重量 石(蛇紋岩)	多野郡 吉井町 矢田5	古墳時代後期 150号住居 6世紀後半	中厚台形 71.2 最重量 石(蛇紋岩)	多野郡 吉井町 矢田5	古墳時代後期 150号住居 6世紀後半	中厚台形 70.0 最重量 石(蛇紋岩)	藤岡市 上裏須下大塚 中大塚	奈良時代 3区1号住居 8世紀前半	中厚台形 70.0 最重量 石(蛇紋岩)	多野郡 吉井町 柳田	奈良時代 5号住居 8世紀後半	特大厚台形 100.0 最重量 石(蛇紋岩)	多野郡 吉井町 柳田	奈良時代 5号住居 8世紀後半	特大厚台形 100.0 最重量 石(蛇紋岩)
多野郡 吉井町 羽田倉	奈良時代 118号住居 8世紀後半	中厚台形 70.0 最重量 石(礫石)	多野郡 吉井町 多胡蛇馬	奈良時代 54号住居 8世紀後半	特大厚台形 94.0 最重量 石(礫石片岩)	多野郡 吉井町 多胡蛇馬	奈良時代 54号住居 8世紀後半	特大厚台形 145.9 最重量 石(蛇紋岩)	多野郡 吉井町 矢田1	奈良時代 83号住居 9世紀前半	特大厚台形 145.9 最重量 石(蛇紋岩)	多野郡 吉井町 矢田3	奈良時代 679号住居 9世紀前半	大厚台形 74.2 最重量 石(礫石片岩)	多野郡 吉井町 矢田3	奈良時代 679号住居 9世紀前半	大厚台形 74.2 最重量 石(礫石片岩)

第27図 最重量紡錘車の出土例

しかしいずれの時代とも平均してみると軽量が23%、最重量で11%存在する。このことはどの時代でも少量ながら、軽量と重量が常に必要とされていたことを物語っている。少量生産される特に細い糸と、特に太い糸、あるいは材質が異なり通常の紡錘車では不都合な繊維が存在し、それに合わせる必要があったのではないだろうか。

4 ま と め

弥生時代～平安時代に至るまでの紡錘車について、形態や材質・大きさや重さ等の基本的な事項について調べてきた。その結果紡錘車は、縄文時代には出土していないこと、弥生時代の集落の形成され始める中期段階から出土が始まり、竪穴住居の増加とともに基本的に出土数も増加していることがわかる。しかし現状では古墳時代前期のS字状口縁の甕を主とする集落からは、ほとんど出土していない事も指摘できそうである。

紡錘車は大きく3段階に分けて変化の画期を求めることができる。その画期とは土製で長方形を主とする古墳時代前期までの第1段階、石製で断面形台形を主とする古墳時代中期以降の第2段階、鉄製紡錘車と石製で台形を呈する紡錘車が共に多く使用される平安時代以降の第3段階である。そして各段階の中で少しずつ変化をしている。しかし今回の報告ではその細かい内容について触れることは避けて、概要把握の理解のために、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の4時代区分で報告した。

紡錘車の呼称は断面形態の違いから、三角形・長方形・厚台形・薄台形の4種類に分けた。三角形と長方形は弥生時代に多く古墳時代以降は厚台形と薄台形の台形が大部分を占める。材質は土・石・鉄と3種類に大きく分かれ、弥生時代は土製が古墳時代以降は石製が大部分を占めていた。鉄製は古墳時代と奈良時代に僅かに出土し、平安時代になると多く使用されている。石製紡錘車の材質では76%を滑石片岩と蛇紋岩が占めており、他の石材は少量であった。大きさは直径4～6cmが最も多く、全体の75%を占めている。紡錘車の中央に穿孔されている孔径の大きさで見ると、孔径0.6～0.8cmが最も多く全体の79%を占めていた。重量で調べてみると30～50gが最も多く全体の39%、50～70gが次に多く全体の27%であった。30～70gでは全体の66%を占めている。

これらの基本的な紡錘車の把握の上に今後多くの研究を進める必要がある。今後の課題として以下があげられる。

- | | |
|--------------------------------|-----------------|
| ◎ 紡錘車の所有形態 | ◎ 線刻や文字の刻まれた紡錘車 |
| ◎ 転用紡錘車の問題 | ◎ 紡錘車の生産と供給 |
| ◎ 古墳出土紡錘車の問題 | ◎ 県外出土紡錘車の様子 |
| ◎ 紡錘車の起源 | ◎ 韓国と中国における紡錘車 |
| ◎ 紡錘車の変化と機織機との関係 | ◎ 紡錘車と糸生産の問題 |
| ◎ 紡錘車の多く出土する遺跡とほとんど出土しない遺跡との関係 | |

5 終わりに

1100個以上の紡錘車を収集し、項目ごとに情報を分類し整理するのは大変な作業である。さらに時期分類するためには時期の記述されていない報告書が多いため、弥生時代～平安時代までの土器を識別できる知識が必要となる。筆者にそのような時間も知識も無いためこの報告に至るまでに多くの人の協力を得た。収集した紡錘車が800個を越えた段階で手作業で行う資料操作に不都合が生じたためパソコンを導入した。使用した紡錘車の実測図はすべてパソコンからの打出しにより作成した。パソコンが無ければ今回の報告は別の形になっていたであろう。パソコンの使い方に関しては小野和之氏・佐藤元彦氏・新倉明彦氏に全面的にお世話になった。また紡錘車と弥生時代の土器については同僚の大本紳一郎氏に協力を得た。今回は触れられなかったが、古墳より出土するいわゆる「碧玉製紡錘車」の資料収集は清水一男氏、中国の紡錘車については斎藤英敏氏、韓国の紡錘車については藤井和夫氏と坂井隆氏のご教示を得た。

前述のように今回は紡錘車研究のための基礎的な資料収集と基礎研究報告である。これらの成果の上に今後の研究を重ねて行きたい。県外の紡錘車の様子についても知りたいが、余裕が無いため教えていただけることを期待します。

最後に今回用いた紡錘車資料収集カードの例を第28図に、また今回分析に使用した紡錘車の掲載されている報告書一覧表を市町村コードと遺跡報告書番号とともに掲載したので参考にしていただけたら幸いです。

なお本稿は「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団平成6年度職員自主研究活動」の助成金を受けて実施した研究成果の一部である。

【追記】

脱稿後、江幡良夫「原田遺跡群出土紡錘車について(1)」『研究ノート』4号鉾茨城県教育財団1995の存在を知った。弥生時代後期の原田遺跡群（原田北・原田西・西原・原出口遺跡）から130個の紡錘車が出土しており、その紡錘車の全ての実測図と計測値を掲載している。分類は断面形態から5分類し、出土状況・一軒あたりの出土個数・最大径と最大厚および孔径の平均計測値・施文面数や形態の問題等について詳しいデータの分析を行なっている。分析の結果出土数は終末期に多いこと、3面施文の紡錘車から1～2面施文へと簡略化の方向に向かうこと、断面形態長方形のⅠが時期が新しくなるにつれて増加してゆく等の成果が明らかにされている。群馬県全体からの弥生時代の出土数が84個である。原田遺跡群では4遺跡から130個出土しているわけでその数の多いことに驚いた。おそらく江幡氏が指摘しているように布生産の盛んな地域であったものと思われる。多くの示唆に富む貴重な研究成果である。

市町村コード 10363 日本 群馬 市町村名 多野郡吉井町
 道路遺物番号 0100405 地域区分 西毛
 遺跡名 矢田遺跡Ⅳ
 出土遺構 498号住居

● 鎌川
 ○ その他

時期コード 062

時代 古墳時代後期
 時期 6世紀後半

材質 石 (滑石片岩)

実測図

形態区分	厚台形	遺構内出土数	1
広径	4.2	cm	中
狭径	1.5	cm	
厚さ	1.7	cm	残存形態
孔径	0.6	cm	完形
重量	30.3 g	重量区分	中量
備考			



S=1:4

遺跡報告番号 1036301004

「矢田遺跡Ⅳ」-関越自動車道 (上越線) 地域埋蔵文化財
 発掘調査報告書第17集- (財) 群馬県埋蔵文化財調査事
 業団 1993

付表 紡錘車出土遺跡報告書一覧

報告書名	
調査コード	報告コード
10201 00101	「萱野・下田中・矢場遺跡」 群馬県企業局 1991
10201 00201	「鳥羽遺跡 G・H・I 区 (本文編)」一関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
10201 00202	「鳥羽遺跡 I・J・K 区 (本文編)」一関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第21集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
10201 00203	「鳥羽遺跡 L・M・N・O 区 (本文編)」一関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第31集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
10201 00204	「鳥羽遺跡 A・B・C・D・E・F 区 (本文編)」一関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第39集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
10201 00301	「前田遺跡」一東善住宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
10201 00402	「内堀遺跡群 2」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1989
10201 00403	「内堀遺跡群 3」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990
10201 00404	「内堀遺跡群 4」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
10201 00501	「荒砥浅間遺跡」荒砥宮西遺跡一昭和55年度県営園地整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
10201 00601	「飯土井二本松遺跡 下江田前遺跡」一般国道17号 (上武道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
10201 00701	「荒砥上川久保遺跡」昭和50・51年度県営園地整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
10201 00801	「下東西遺跡 (本文編)」一関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
10201 00901	「荒砥北原遺跡 今井神社遺跡 荒砥青柳遺跡」昭和56年度県営園地整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
10201 01001	「二之宮千足遺跡 (本文編)」一般国道17号 (上武道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
10201 01101	「荒砥天之宮遺跡」昭和55年度県営園地整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
10201 01201	「荒砥三木堂遺跡 1」昭和56年度県営園地整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
10201 01302	「荒子小学校校庭 2・3 遺跡」山武考古学研究所
10201 01401	「柳久保遺跡群 1」昭和59年度調査概要一前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985
10201 01406	「群馬県前橋市柳久保遺跡 6 発掘調査報告書」山武考古学研究所 1988
10201 01407	「柳久保遺跡群 7」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988
10201 01501	「松室遺跡発掘調査報告書」前橋市教育委員会 1982
10201 01601	「芳賀東部団地 1 (古墳～平安時代編その 1) 芳賀団地遺跡群第 1 巻」前橋市教育委員会 1984
10201 01602	「芳賀東部団地 2 (古墳～平安時代編その 2) 芳賀団地遺跡群第 2 巻」前橋市教育委員会 1988
10201 01701	「引切塚遺跡」前橋市教育委員会 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988
10201 01801	「梅木遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
10201 01901	「元越社明神遺跡 1」前橋市教育委員会 1983
10201 02001	「群馬県前橋市天神遺跡発掘調査報告書」山武考古学研究所 1987
10201 02101	「寺田遺跡」前橋市教育委員会 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987
10201 02201	「群馬県前橋市堀越遺跡発掘調査報告書」山武考古学研究所 1988
10201 02301	「富田遺跡 西大室遺跡」一土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概要一 前橋市教育委員会 1982
10201 02401	「荒砥北原遺跡群発掘調査概要」群馬県教育委員会 1984
10201 02501	「閑泉橋南遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
10201 02601	「草作遺跡 (59A-3)」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985
10201 02701	「前箱田遺跡」前橋市教育委員会 1983
10201 02801	「山王庵寺跡第 5 次発掘調査報告書」前橋市教育委員会 1979
10201 02901	「青柳寄附遺跡群」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1984
10201 03001	「鶴谷遺跡群 2」前橋市教育委員会 1982

- 10201 03101 「60C—1 小神明遺跡4・湯気遺跡・九科遺跡」 前橋市教育委員会 1986
- 10201 03102 「60C—4 小神明遺跡5」 前橋市教育委員会 1987
- 10201 03201 「荒砥島原遺跡」一県営開場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一
- 10201 03301 「今井白山遺跡」一一般国道50号(東前橋拡幅)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 10201 03401 「元郷社寺田遺跡1」一一般河川牛池河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 10201 03501 「二之宮宮東遺跡」一一般国道17号(上武道路)改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 10201 03601 「荒砥大日原遺跡」一昭和56年度県営開場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 10201 03701 「今井道上遺跡」一一般国道50号(東前橋拡幅)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 10201 03801 「地田栗田遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1994
- 10201 03901 「芳賀北原遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
- 10201 04001 「内堀遺跡群V」 前橋市教育委員会文化財保護課 1993
- 10201 04101 「内堀遺跡群VI」 前橋市教育委員会文化財保護課 1994
- 10201 04201 「西久保遺跡」一宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1993
- 10202 00101 「熊野堂(1)」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第2集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 10202 00102 「熊野堂(2)」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第14集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 10202 00201 「融通寺遺跡(第1分冊)」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第15集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 10202 00301 「新保遺跡1 弥生・古墳時代大溝」一開越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 10202 00302 「新保遺跡2 弥生・古墳時代集落」一開越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 10202 00401 「下斉田・滝川A遺跡 滝川B・C遺跡」一開越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第17集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 10202 00501 「中尾(遺構編)」一開越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第6集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 10202 00601 「田畑遺跡(第4分冊)」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第9集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 10202 00701 「舟橋遺跡」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第12集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10202 00801 「下佐野遺跡1 地区・寺前地区(1)(縄文時代・古墳時代編1)」一上越新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第11集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10202 00802 「下佐野遺跡2 地区(縄文時代・古墳時代)」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第6集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 10202 00901 「熊野堂遺跡第3地区雨森遺跡」一県道柏木沢・高崎線改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 10202 01001 「新保田中村前遺跡2」一一般河川桑谷川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2分冊一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 10202 01101 「八幡中原遺跡」一中学校建設に伴う調査概報一高崎市文化財調査報告書第31集一 高崎市教育委員会 1982
- 10202 01201 「石原稻荷山古墳」一高崎市文化財調査報告書第23集一 高崎市教育委員会 1981
- 10202 01301 「引間遺跡」一高崎市文化財調査報告書第5集一 高崎市教育委員会 1979
- 10202 01401 「山島・天神遺跡」一高崎市文化財調査報告書第56集一 高崎市教育委員会 1984
- 10202 01501 「栗原遺跡」一群馬県史資料編2 原始古代2 弥生・土師一 1986
- 10202 01601 「大島原遺跡」一群馬県史資料編2 原始古代2 弥生・土師一 1986
- 10202 01701 「八木箱田池遺跡(2)」一高崎市文化財調査報告書第55集一 高崎市教育委員会 1984
- 10202 01801 「日高遺跡(4)」一昭和56年度開場整備事業に伴う日高・新保田中地区の調査概報一高崎市文化財調査報告書第34集一 高崎市教育委員会 1982
- 10202 01901 「日高遺跡」一開越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 10202 02001 「八幡遺跡」八幡住宅用地造成に伴う調査報告 高崎市教育委員会 1989

- 10204 00101 「書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木町田遺跡」——一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 10204 00301 「上植木光仙道遺跡」——一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10204 00401 「堀下八幡遺跡」——一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 10204 00501 「書上本山遺跡・波志江反田遺跡・波志江天神山遺跡」——一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 10204 00601 「中組遺跡」——県立伊勢崎商業高校セミナーハウス建設に伴う発掘調査一 群馬県教育委員会 1985
- 10204 00701 「八幡町遺跡（B地区）」——伊勢崎市開発計画道路3・3号北部準状建設工事に伴う発掘調査報告書一 伊勢崎市教育委員会 1987
- 10204 00801 「原之城遺跡発掘調査報告書」 伊勢崎市教育委員会 1987
- 10204 00901 「西太田遺跡」 伊勢崎市教育委員会 1983
- 10204 01001 「伊勢崎・東（あずま）流通団地遺跡」 群馬県企業局 1982
- 10205 00101 「太田市八幡遺跡」——群馬県埋蔵文化財事業団調査報告書第105集—1990
- 10205 00201 「成塚石橋遺跡2」——飯川河川蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 10205 00301 「成塚・上・雷遺跡」——国道122号（太田バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1980
- 10205 00401 「太田東部遺跡群」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 10205 00701 「加茂遺跡」——国道122号（太田バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 10205 00801 「小町田遺跡」——国道122号（太田バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 10205 00901 「群馬・太田市駒形遺跡南地区発掘調査概報」 駒形遺跡調査会 1983
- 10205 01001 「成塚住宅団地遺跡1」——成塚住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 太田市教育委員会 1990
- 10205 01101 「埋蔵文化財発掘調査年報2」 太田市教育委員会 1992
- 10206 00101 「大釜遺跡・金山古墳群」——関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 10206 00201 「戸神跡遺跡（奈良・平安時代）」——関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第30集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 10206 00301 「戸神吉田遺跡」——渡辺林産工業株式会社工場移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 沼田市埋蔵文化財発掘調査団 1988
- 10206 00401 「奈良地区遺跡群（奈良田向遺跡）」——土地改良総合整備事業奈良地区に係る埋蔵文化財発掘調査の概要一 沼田市教育委員会 1990
- 10206 00501 「奈良地区遺跡群（奈良原遺跡）」——土地改良総合整備事業奈良地区に係る埋蔵文化財発掘調査の概要一 沼田市教育委員会 1991
- 10206 00601 「町田小沢遺跡」——有限会社戸部組産業廃棄物中間処理施設設置に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 沼田市埋蔵文化財発掘調査団 1990
- 10206 00701 「石屋遺跡（本文編）」——関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書K・C・7一 沼田市教育委員会 1985
- 10206 00801 「下川田下原遺跡 下川田平井遺跡」——一般国道17号（沼田バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 10208 00102 「有馬遺跡2（本文編）」——関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第32集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 10208 00201 「有馬条遺跡1（本文編）」——関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第29集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10208 00202 「有馬条遺跡2（本文編）」——関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第35集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 10208 00301 「有馬遺跡1 大久保B遺跡」——関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第26集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10208 00401 「有馬条遺跡沖中地区第2分冊平安時代」——茨川市発掘調査報告書第7集一 茨川市教育委員会 1983
- 10208 00501 「神宮寺西遺跡調査報告書」——茨川市発掘調査報告書第21集一 茨川市教育委員会 1988
- 10208 00601 「中村遺跡（本文編）」——関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書（KC-3）一 茨川市教育委員会 1986

- 10209 00101 「F1群馬県藤岡市竹沼遺跡」 藤岡市教育委員会 1978
- 10209 00201 「藤岡市遺跡詳細分布調査(2)美土里地区」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 10249 00301 「湯井遺跡」—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第2集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 10209 00401 「本郷山根遺跡」—飯沼川荒川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10209 00501 「上栗根遺跡、下大塚遺跡・中大塚遺跡(本文編)」—主要地方道前橋・長瀬線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10209 00601 「本郷尺地遺跡」—飯沼川荒川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 10209 00701 「B4株木遺跡」—都市計画街路小林〜立石線第1期事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書— 藤岡市教育委員会 1984
- 10209 00801 「A1堀之内遺跡群(本文編)」—国道254号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 藤岡市教育委員会 1982
- 10209 00901 「森・中1・中2遺跡」—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第2集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 10210 00101 「本宿・肥土遺跡発掘調査報告書」 富岡市教育委員会 1981
- 10210 00201 「上田藤古墳群・原田羅道跡発掘調査報告書」 富岡市教育委員会 1984
- 10210 00301 「内匠遺跡発掘調査報告書」 富岡市教育委員会 1982
- 10210 00401 「野上堀之内遺跡、堀之内城遺跡」—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 10210 00501 「田窪上平遺跡」—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第2集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10210 00601 「内匠諏訪前遺跡・内匠日影周地遺跡」—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 10210 00701 「横瀬古墳群」—昭和62・63年度横瀬地区土地改良総合整備事業に伴う横瀬古墳群の発掘調査報告書— 富岡市教育委員会 1990
- 10210 00801 「南蛇井増光寺遺跡1(本文編)」—関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第14集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 10210 00802 「南蛇井増光寺遺跡2(本文編)」—関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第19集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 10210 00803 「南蛇井増光寺遺跡3(本文編)」—関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第22集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 10210 00901 「前畑遺跡・内出1遺跡・丹生城西遺跡・五分一遺跡・千足遺跡」—関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書— 富岡市教育委員会 1992
- 10210 01201 「下高瀬上之原遺跡」—関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第27集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 10211 00101 「榎木畑遺跡」—安中市特別老人ホーム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 安中市教育委員会 1990
- 10211 00201 「新寺地区遺跡群」—般形道橋部停車場妙義山線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 安中市教育委員会 1991
- 10302 00101 「静保沢中ノ山遺跡1」—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第22集— 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 10302 00201 「寺内遺跡」—ニツ岳浮石屋下の古墳時代集落— 勢多郡赤城村教育委員会 1975
- 10303 00101 「富士見遺跡群・田中遺跡・窪谷戸遺跡・見取遺跡」—昭和58・59年度県営運動場整備事業富士見地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—1986
- 10303 00301 「富士見遺跡群・向吹遺跡・岩之下遺跡・田中遺跡・寄居遺跡」—昭和60・61年度県営運動場整備事業富士見地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—1987
- 10304 00101 「天神風呂遺跡」—大胡町発掘調査報告書1 主要地方道前橋・大間々榎生線(仮称大胡バイパス)建設の事前埋蔵文化財発掘調査報告書— 勢多郡大胡町教育委員会 1981
- 10306 00101 「白瀬古墳群」—粕川村文化財報告第十集—粕川村教育委員会 1989
- 10306 00201 「西迎遺跡」—粕川村文化財報告第十集—粕川村教育委員会 1990
- 10306 00301 「堤頭遺跡」—昭和55年度県営運動場整備事業粕川地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(2)— 粕川村教育委員会 1988
- 10306 00401 「前田F」—昭和55年度県営運動場整備事業に伴う発掘調査報告(1)— 粕川村文化財報告書第2集 粕川村教育委員会 1983

- 10307 00101 「南天竺遺跡発掘調査報告書（図版編）」新里村教育委員会 1981
- 10307 00201 「葦岸遺跡」一里榎み集落の発掘調査一 新里村教育委員会 1985
- 10323 00101 「生原・普庵寺前遺跡」箕郷町教育委員会 1986
- 10323 00201 「海行A・B遺跡」一県営浦場整備に伴う生原遺跡群の調査一 箕郷町教育委員会 1988
- 10324 00102 「上野国分僧寺・尼寺中間地蔵(2)本文編」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 10324 00103 「上野国分僧寺・尼寺中間地蔵(3)本文編」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第24集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10324 00104 「上野国分僧寺・尼寺中間地蔵(4)本文編(1)」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第33集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 10324 00105 「上野国分僧寺・尼寺中間地蔵(5)本文編」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第36集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 10324 00106 「上野国分僧寺・尼寺中間地蔵(6)本文編」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第37集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 10324 00107 「上野国分僧寺・尼寺中間地蔵(7)本文編」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第38集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 10324 00201 「園分境遺跡」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第34集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 10324 00301 「北原遺跡（本文編）」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書（KC-1）一 群馬町教育委員会 1986
- 10324 00401 「三ツ寺1遺跡（本文編）」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 10324 00402 「三ツ寺2遺跡 資料編1」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第13集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 10324 00403 「三ツ寺3遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳（第1分冊）」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第5集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 10324 00501 「上野国分寺跡地発掘調査報告」一奈良・平安時代の聖住居跡等の調査一 群馬県教育委員会 1979
- 10324 00601 「西浦北遺跡」一群馬町埋蔵文化財発掘調査報告書第25集一 群馬町教育委員会 1989
- 10324 00707 「保渡田遺跡群」一第7次発掘調査報告(1)群馬町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集一 群馬町教育委員会 1989
- 10324 00802 「西園分遺跡群・西園分2遺跡」一土地改良総合整備事業西園分地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告 群馬町埋蔵文化財発掘調査報告書第28集一 群馬町教育委員会 1990
- 10324 00901 「保渡田東遺跡」一群馬町埋蔵文化財発掘調査報告書第17集一 群馬町教育委員会 1986
- 10324 01001 「井手村東遺跡」一上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3分冊の2 挿図編一 群馬町井手村東遺跡調査会 1983
- 10324 01101 「保渡田・荒神前遺跡・皿掛遺跡」一群馬町埋蔵文化財発掘調査報告書第21集一 群馬町教育委員会 1988
- 10324 01201 「中林遺跡調査概要」一群馬町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集一 群馬町教育委員会 1983
- 10324 01301 「小池遺跡」一群馬町埋蔵文化財調査報告書第33集一 群馬町教育委員会 1992
- 10324 01401 「三ツ寺3遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳（第2分冊）」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第5集一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 10341 00101 「黒井峯遺跡1」一碓氷下の古墳時代集落の調査一 子持村文化財調査報告書第2集 北群馬郡子持村教育委員会 1985
- 10345 00101 「大久保A遺跡1区」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書KC・C・2（第1分冊）一 北群馬郡吉岡村教育委員会 1986
- 10345 00201 「大久保A遺跡2区」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書KC・C・2（第2分冊）一 北群馬郡吉岡村教育委員会 1986
- 10345 00301 「七日市遺跡・池沢遺跡・女塚遺跡」一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書KC・C・2（第3分冊）一 北群馬郡吉岡村教育委員会 1986
- 10363 00101 「川瀬遺跡調査報告書」吉井町教育委員会 1986
- 10363 00201 「川内遺跡発掘調査報告書」吉井町教育委員会 1982
- 10363 00301 「東次上遺跡」一群馬県立博物館研究報告第8集一 吉井町教育委員会 1974
- 10363 00400 「入野遺跡」一尾崎吉左衛門一 吉井町教育委員会 1982
- 10363 00401 「入野遺跡（図版編・本文編）」一入野中学校校舎新築に伴う埋蔵文化財調査報告書一 吉井町教育委員会 1985
- 10363 00501 「柳田遺跡発掘調査報告書」一吉井町文化財調査報告書第21集一 吉井町教育委員会 1989
- 10363 00603 「黒熊遺跡群発掘調査報告書(3) 図版編・本文編」吉井町教育委員会 1984

- 10363 00604 「黒熊道群発掘調査報告書(4)」 吉井町教育委員会 1985
- 10363 00605 「黒熊道群発掘調査報告書(5)」 吉井町教育委員会 1985
- 10363 00701 「椿谷戸遺跡発掘調査報告書」 吉井町教育委員会 1989
- 10363 00801 「東沢遺跡・折茂遺跡」 吉井町教育委員会 1987
- 10363 00901 「長根羽田倉遺跡(本文編)」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財調査報告書第3集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 10363 01001 「矢田遺跡」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 10363 01002 「矢田遺跡II」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第6集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 10363 01003 「矢田遺跡III」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第9集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 10363 01004 「矢田遺跡IV」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第17集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 10363 01005 「矢田遺跡V」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第24集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 10363 01101 「神保下遺跡」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 10363 01201 「神保宮土塚遺跡(本文編)」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 10363 01301 「多胡蛇馬遺跡 古墳・奈良・平安時代の集落跡の調査(本文編)」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 10381 00101 「群馬県甘楽郡妙義町 妙義東部遺跡群(2)」一発掘調査報告書一 妙義町教育委員会 1989
- 10384 00101 「笠遺跡」一鶴川流域における滑石製品出土遺跡の研究一 群馬県立博物館 1986
- 10384 00201 「甘楽条遺跡」一昭和61年度県営農地整備事業甘楽北部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 甘楽町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集一 甘楽町教育委員会 1989
- 10384 00301 「白倉下原遺跡・天引向原遺跡3」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第26集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 10401 00101 「松井田工業団地遺跡(遺構編)」 松井田町教育委員会 1990
- 10401 00201 「愛宕山遺跡」松島榮治 一群馬県史 資料編2 原始古代2一 群馬県 1986
- 10444 00101 「門前橋遺跡・外海戸遺跡 高野原遺跡」一公共開発関連出土品等整理報告書一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10445 00101 「師達遺跡・鎌倉遺跡」一関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第28集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10445 00202 「後田遺跡2(本文編)」一関越自動車道(新西線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第23集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 10445 00301 「十二原・大原・前中原遺跡」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第1集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 10445 00401 「大原2遺跡・村主遺跡」一一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 10445 00501 「藪田東遺跡」一国道291号街路改良工事地域埋蔵文化財発掘調査報告書一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 10445 00601 「城平遺跡・諏訪遺跡」一一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 10445 00701 「洞1・2・3遺跡」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第7集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 10445 00801 「藪田遺跡」一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第4集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 10448 00101 「余井宮前遺跡1」一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第8集一 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 10448 00201 「中郷遺跡・長井坂城跡」一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-2)一昭和村教育委員会 1985
- 10461 00101 「下鮎向井遺跡発掘調査概報」一今井南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告 群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告13一 赤堀村教育委員会 1980
- 10461 00201 「河山古墳群及び北通・鹿島遺跡発掘調査概報」一伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告 群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告20一 赤堀村教育委員会 1982

- 10461 00301 「多田山東遺跡発掘調査概報」—今井北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告 群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告17— 赤堀村教育委員会 1981
- 10461 00401 「下蝕牛伏遺跡」—身体障害者スポーツセンター建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 10461 00501 「今井柳田遺跡発掘調査概報」—今井南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告 群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告18— 赤堀村教育委員会 1981
- 10462 00101 「八寸大遺跡—般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 10463 00101 「下源名塚遺跡（本文編）」——般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 10463 00201 「西今井遺跡」——般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 10463 00202 「西今井遺跡」——早川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 10463 00301 「上源名裏神谷遺跡・三空間ノ谷遺跡」——般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 10463 00501 「三ツ木遺跡」——般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 10463 00502 「三ツ木遺跡」——早川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 10463 00601 「史跡十三宝塚遺跡」——鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第134集— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 10464 00101 「上之手八王子遺跡」 群馬県佐波郡玉村町教育委員会 1991
- 10481 00101 「小角田前遺跡」——般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 10482 00101 「歌鶴佐遺跡」——般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 10482 00201 「東田遺跡」— 新田町文化財調査報告書第9冊—新田町教育委員会 1987
- 10482 00301 「台遺跡」——高尾西園場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 新田町文化財調査報告書第10冊— 新田町教育委員会 1988
- 10521 00101 「伊勢ノ木・小保呂遺跡発掘調査報告書」 板倉町教育委員会 1985

群馬県に於ける出土人歯の咬耗状況に就いて

——室町・江戸時代人の永久歯を中心に——

石 守 晃

1 はじめに

群馬県の発掘現場から出土する人骨或は人歯は概ね腐食・粗造化が進んでおり、その取り扱いに苦慮することも少なくない。経験的に言えば、その遺存状況は骨周囲の土壌によって左右されるのであるが、仮に条件が均質であるならば比較的残り易いのは頭蓋冠と上下の顎骨を中心とした頭蓋骨と歯牙、そして四肢骨であり、最後に残るのは歯牙のエナメル質部分のみが残される所謂エナメルキャップである。このエナメルキャップの観察や計測によって性別、年齢、顔の形、職業などが導き出されるケースもある。例えば本稿で扱う歯牙の咬耗状況の観察は年齢

第1表 咬耗度の分類

1 Martin分類、Broca分類

Martin	Broca	咬 耗 の 程 度	推定年齢
0度		咬耗のないもの	20歳以下
1度	1度	エナメル質のみに止まるもの	20～30歳
2度		象牙質の一部が露出せるもの	30～40歳
3度	2度	エナメル質なく、全面的に象牙質の現れているもの	50歳前後
4度	3度	咬耗が歯頸部の近くに及んでいるもの	70歳前後

2 天野分類

表示度	咬 耗 度 分 類 程 度	推定年齢
0	エナメル質に咬耗がみられないもの	15～20歳
1	エナメル質に平坦な咬耗箇所があるもの	21～30歳
2	点状又は糸状に象牙質のみ見えるもの	31～40歳
3	象牙質が幅、面積を有するもの	41～50歳
4	咬頭、切端が極度に消滅したもの	51歳以上

の推定に用いられ、Martin、Broca、特に天野⁽¹⁾（1951）の分類（第1表）を用いた鑑定結果は法医学や法歯学（歯科法医学）の分野で成果を上げているという。

しかしこれらは現代人に対する調査成果に基づいており、我々が扱うような咬耗の著しい近世以前の人歯に対して単純に応用できないことは体験的に知られている。また筆者は出土人歯の観察を通して、それぞれの分類に集約しきれない要素のあることや同一個体内での咬耗度の不統一、或は歯種によってそれぞれの咬耗パターンがあるらしいことなどを感じ、そうした出土人歯の咬耗の傾向などをまとめてみたいと常々考えていた。そしてこのような咬耗の傾向を一般化（考古サイドの人間にとっての）ができれば、建設工事との競合状態にある今日の発掘現場での当面の観察などにも役立つのではないかと考えたのである。

尚、本稿では未発表資料の数量を除く記録の掲載等は控えたが、その成果は念頭に置いて執筆した。また紙面の都合上、個々の人歯の（図として記載した）観察記録は示さなかった。

2 調査対象と調査方法

調査は平成5年から6年の間、何回かに亙って実施したが、調査対象としたのは群馬県教育委員会が発掘調査した資料と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査した資料、及び群馬県新田郡新田町教育委員会の御厚意により観察することのできた中江田A遺跡出土の人歯である。

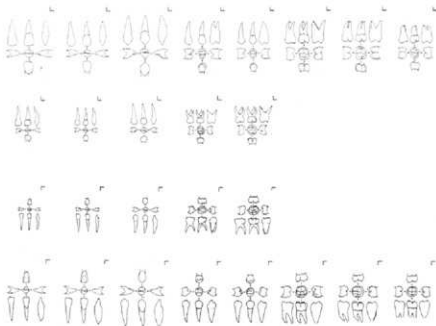
このうち本稿に於いて使用しているのは9遺跡32個体496本の人歯である。

調査に当たっては個々の歯の切端・咬合面、唇・頬側面、舌側面、近心面、遠心面を示した観察表（第1図参照）を作成し、これに観察できる範囲で咬耗を中心に摩耗・齧歯の状況を記載した。また幾つかを除く歯牙については切端或は咬合面、唇側と左右の頬側、及びこれらに対応する舌側の3方向からの写真撮影を適宜行った。尚、写真撮影に当たっては原則としてAso50感度の35mmカラースライドフィルムを用い、ステレオ写真としての使用を想定して1コマ2カットづつの撮影を行った。

3 出土人歯の咬耗・摩耗状況

記録化できた人歯は全体で496点であったが、昭和50年代以前に出土した資料については調査時点に於いて一般的であったパラフィン等による保存処理が施されているために歯に付着した土壌を除去できないケースもあり、切端・咬合面、唇・頬・舌側面、近・遠心の輪郭についての一応の観察ができたのは448本であった。尚、近心面・遠心面に見られる咬耗についてはほとんどの場合記録できなかった。

次にこれらの人歯の咬耗状況が、その歯種の咬耗の推移の中でどのような位置にあるかを把握するため、まづその傾向を補足すべきだと考えた。当然のことではあるが一旦擦り減っていった人歯は前段階の形状に復元されることがないということを前提として、歯種毎に咬耗の箇所や程度を勘案し乍らその推移を検討した。その結果、考古学に於ける形式学的組列に相当する咬耗の経過状況を凡そ想定することができた。以下各歯種毎にその概要を述べてみたい。



第1図 咬耗状況調査表（左側用）

(1) 上顎中切歯 (第2図)

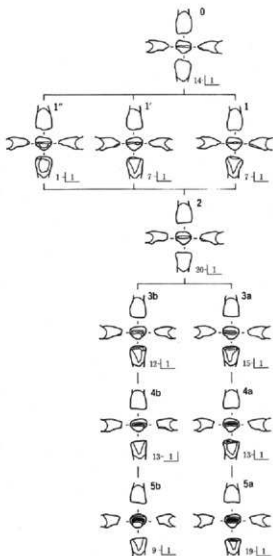
上顎中切歯は26本中23本を使用して咬耗の進行状況を検討した。

上顎中切歯には、咬耗の見られない段階 (第2図-0) のものがあり、次に切端のエナメル質の一部に小さな方形様の咬耗の生ずる段階がある。このエナメル質の咬耗面は切端の中央にできるケース (第2図-1) と、近心または遠心よりにできるケース (第2図-1') がある。また舌側面に咬耗の見られる希なケース (第2図-1'') もあるが、これは次の段階に含まれる可能性がある。次段階としたのは、咬耗が切端のエナメル質部分全体に広がる (第2図-2) ものである。

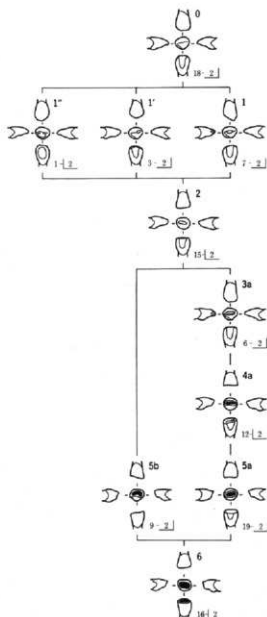
更に咬耗の進んだ段階としたものには切端がカスガイ形または釘抜き形を呈するものと、短冊形を呈するものの2系統が認められる。両者の咬耗の程度に大差はないが、前者は辺縁隆線の形態が咬耗した面に現れたもの (「b系」とする) で、後者はその傾向の弱いと思われるもの (「a系」とする) である。何れも象牙質が切端のエナメル質部分の中心線上に糸状に現れる (第2図-3 a・3 b)。

それに続く段階ではa系 (第2図-4 a)・b系 (第2図-4 b) それぞれの特徴を残し乍ら象牙質は幅を持つようになる。この段階で咬耗の見られる範囲は切端側から見た歯冠の1/4~1/3程度である。更に次の段階でもa系 (第2図-5 a)・b系 (第2図-5 b) の特徴は残されるが、咬耗の範囲は歯冠部分の半分近くを占め、その多くを象牙質部分が占めてエナメル質部分は象牙質を縁どるように見られるに過ぎなくなる。

以上のように上顎中切歯の咬耗状況を分類し検討したが、その結果、希に舌側面に上顎中切歯が突出する屋根状咬合に伴うものと思われる咬耗が見られる場合もあるものの全体としてその咬耗の傾向は比較的単純であり、切端側から順次擦り減っていつている。但し言うまでもなく咬耗の進行は階段状ではないので、他の歯種と同様各段階の中間に位置するものも存在した。



第2図 上顎中切歯の推定咬耗経過
(各歯の右下数字は資料番号)



第3図 上顎側切歯の推定咬耗経過(記号は第5図参照)

階(第3図-5 a・5 b)では切端側から見た咬耗の範囲が歯冠の半分近くを占めるようになり、その多くが象牙質部分となる。a・bの2系統はやがて1系統になり、切端側からは舌側面が確認し辛い程咬耗が進行し、象牙質部分がそのほとんどを占めてエナメル部分はそれを縁取りする程度に残るに過ぎない段階(第3図-6)に至ると想定される。

以上のように上顎側切歯の咬耗状況を分類し、咬耗経過を推定したのであるが、咬耗の進行状況は上顎中切歯に近似している。その経過は比較的単純であり、やはり切端側から順次擦り減っていくものと想定される。

(2) 上顎側切歯(第3図)

上顎側歯では31本の資料を使用して検討を行った。

上顎側切歯では咬耗の見られない段階(第3図-0)のものがあり、次に切端のエナメル質部分の中央(第3図-1)或いは近・遠心寄り(第3図-1')に小さな咬耗面が現れる段階のものが続くものと想定した。この段階では上顎中切歯と同様、舌側面のエナメル質部分にも咬耗の見られる例も(第3図-1'')もあったが、やはり切端のエナメル質部分全体に咬耗の広がってくる(第3図-2)次段階に含まれる可能性を持つ。

さてこれに続く段階では上顎中切歯と同様、辺縁隆線の形態が切端のエナメル質部分の咬耗面に現れてくるもの(「b系」とする)と、その傾向の見られないもの(「a系」とする)の2系等が認められた。この切端のエナメル質部分の咬耗面に見られる形態は、a系では棒状、b系では釘抜き形(カスガイ形のものも想定される)を呈しているが、そのエナメル質部分の咬耗面の中央ライン上には糸状の象牙質が現れてくる(第3図-3 a)。この2系統は次段階、次々段階に引き継がれるが、次段階(第3図-4 a)では象牙質が厚みを持ち、咬耗面に於ける象牙質の範囲は切端側から見た歯冠部の1/3以下であるが、次々段階

(3) 上顎犬歯 (第4図)

上顎犬歯は35本中32本を使用して検討を行った。上顎犬歯では尖頭に対し垂直方向から咬耗が進むものと、斜め方向から咬耗が進む2つの流れがあり、前者を「a系」、後者を「b系」として咬耗経過を推定した。

【a系】

a系では咬耗の見られない段階(第4図-0)から、尖頭先端のエナメル質部分に小さな咬耗が認められる段階(第4図-1 a)となる。

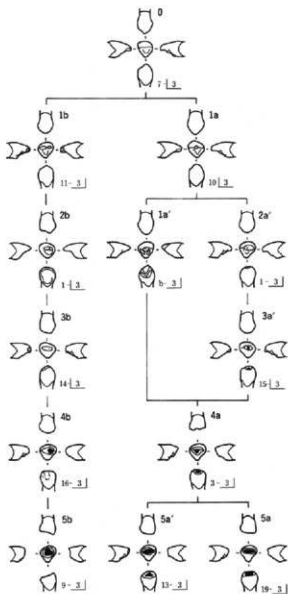
次段階では舌側面のエナメル質に咬耗のあるもの(「a'系」とする)と見ないもの(「a²系」とする)が現れるが、共に尖頭に点状の象牙質が現れる段階(第4図-2 a¹・2 a²)があり、象牙質が広く露出する段階(第4図-3 a¹)へ移るものと想定される。

更に象牙質の露出が増して三角形を呈しエナメル質が周囲を取り巻く程度となる段階(第4図-4 a)を経て、歯冠の半ばまで擦り減ってくる段階に至るものと推定されるが、露出した象牙質は長方形(第4図-5 a)又は菱形(第4図-5 a')を呈している。

【b系】

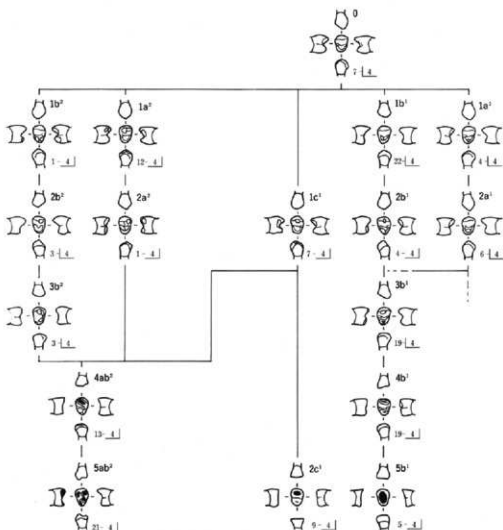
b系では初めに尖頭両側のエナメル質に小さな咬耗が現れ(第4図-1 b)、2つの面が尖頭に延びて峰状に接し(第4図-2 b)、近心・遠心何れかの咬耗が進行して点状の象牙質が現れる(第4図-3 b)ようになるものと想定される。更に咬耗が進むと象牙質の露出が大きくなって円形を呈する(第4図-4 b)ようになり、ついには歯冠部の半分程までが擦り減って、象牙質の露出が大きくなるようになる(第4図-5 b)ものと想定した。

以上のように上顎切歯はa・b²系統に分類でき咬耗状況に若干の差が生ずるが、咬耗の進行方向から前者は一歯対一歯咬合、後者は一歯対二歯咬合に起因するものと思われる。



第4図 上顎犬歯の推定咬耗経過

(各歯の右下数字は資料番号)



第5図 上顎第1小白歯の推定咬耗経過

(各歯の右上の数字は咬耗度、右下の数字は資料番号《第4・5表参照》)

(4) 上顎第1小白歯 (第5図)

上顎第1小白歯は38本中36本を使用した。その咬耗状況はバラエティーに富むが、概ね咬頭に
 対し垂直又は斜めの一方向から咬耗が進むもの(「第1群」とする)と咬頭の斜め両側から咬耗が
 進むもの(「第2群」とする)の2群に分けられる。更に前者に3系統(a¹・b¹・c¹系)、後者
 に2系統(a²・b²系)を設定した。

[a¹系]

a¹系は咬耗の無い段階(第5図-0)、舌側咬頭のエナメル質部分に粒状の面が見られる(第5
 図-1 a1)段階、これが面的に広がる(第5図-2 a1)段階へ続くものと推定した。以降の咬
 耗状況は不明であるが、舌側咬頭のみ咬耗が進行する場合と頬側咬頭にも咬耗が始まってb1系
 の4段階目に進む場合とが想定される。

〔b¹系〕

b¹系は咬耗の無い段階、舌側咬頭のエナメル質に粒状の咬耗(第5図-1 b¹)の現れる段階。舌側咬頭のエナメル質の咬耗が広がり頬側咬頭のエナメル質にも粒状の咬耗が見られる(第5図-2 b¹)段階。舌側咬頭に点状の象牙質が現れ頬側咬頭のエナメル質の咬耗が広がりを見せる(第5図-3 b¹)段階。舌側咬頭の象牙質がやや面積を増し頬側咬頭にも象牙質部分出現する(第5図-4 b¹)段階。そして咬耗が歯冠の半分近くに至って咬頭が不明瞭となり、円形の象牙質の周囲をエナメル質が取り巻く(第5図-5 b¹)状況となる段階へ順次移行していったと想定される。

〔c¹系〕

c¹系は咬耗の無い段階。頬側咬頭のエナメル質に咬耗が見られる(第5図-1 c¹)段階へと移行する。次段階は確認できなかったが、一部は舌側咬頭のエナメル質部分が咬耗して2群に移行するものもあるようである。更に咬耗が進行した段階では頬側咬頭が強く摩擦して象牙質が大きく露出する(第5図-2 c¹)段階へと移行していったものと想定される。

〔a²系〕

a²系は咬耗の無い段階から頬側咬頭の近心及び遠心面のエナメル質が小さな咬耗を見せる段階(第5図-1 a²)、舌側咬頭の近心・遠心のエナメル質にも小さな咬耗が生ずる段階(第5図-2 a²)、頬側咬頭に点状に象牙質部分が露出する段階に移行し、更に咬耗が進むと後述するように第2群共通の咬耗経過をたどるようである。

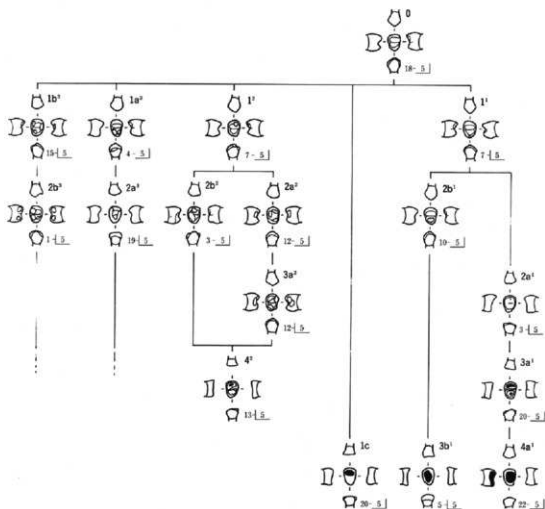
〔b²系〕

b²系は咬耗の無い段階、舌側咬頭の近・遠心面のエナメル質部分に咬耗の生ずる段階(第5図-1 b²)、咬耗が舌側咬頭を削って1面をなし頬側咬頭にも小さな面を生ずる段階(第5図-2 b²)、エナメル質の咬耗が舌側咬頭から頬側咬頭の舌側面まで覆い、頬側咬頭には点状の象牙質も現れる段階(第5図-3 b²)に移行すると推定されるが、その後の咬耗経過はa²系と同様第2群共通のものであろうと判断される。

〔a²・b²系〕

a²系、b²系は共に頬側咬頭に点状の象牙質が出現した次の段階ではそれぞれの特徴は確認できなくなり、エナメル質の咬耗は一続きのものとして咬合面全体に及び、頬側咬頭の象牙質は拡大して面積を持つ(第5図-4 a b²)ようになる。そして舌側咬頭にも象牙質が出現する段階(第5図-5 a b²)に至るが、この間の咬耗パターンはかなり複雑で、多様なものを含むことが想定される。

以上のように上顎第1小臼歯の咬耗経過はかなり多様性に富み複雑な経過をたどるようであるが、大きくは第1群、第2群としたグループに分けられるものと思われる。これらは歯の対向関係が第1群が一歯対一歯咬合、第2群が一歯対二歯咬合であったことによって生じたものではないかと判断されるのである。



第6図 上顎第2小白歯の推定咬耗経過
(各歯の右上の数字は咬耗度、右下の数字は資料番号〈第4・5表参照〉)

(5) 上顎第2小白歯 (第6図)

上顎第2小白歯は38本中34本を使用して検討を行った。上顎第1小白歯と同様、その咬耗状況はバラエティーに富むが、咬頭に対し垂直又は斜めの一方から咬耗が進むもの、咬頭の斜め両側から咬耗が進むものとその中間形態の3種に大別される。前者を第1群として更に細分される系統をa¹系、b¹系、c¹系、後者を第2群として同じく細分される系統をa²系、b²系、中者を第3群として細分される系統をa³系、b³系として以下に示す。

〔a¹系〕

a¹系は咬耗の無い段階(第6図-0)から舌側咬頭のエナメル質に粒状の咬耗が現れる段階(第6図-1¹)、次にエナメル質の咬耗が咬合面全体現れて頬側咬頭に点状の象牙質が現れる段階(第6図-2 a¹)、更に象牙質が頬側咬頭で厚みを持ち舌側咬頭に粒状の現れる段階(第6図-3 a¹)、

そして咬頭が擦り減って象牙質が全面に露出する段階（第6図-4 a¹）に移行していったものと推定される。

〔b¹系〕

b¹系も咬耗の無い段階、舌側咬頭のエナメル質に粒状の咬耗の現れる段階を経て、舌側咬頭のエナメル質が広く咬耗する段階（第6図-2 b¹）、エナメル質の咬耗が咬合面全面広がって舌側咬頭に象牙質が面的に広がる段階、象牙質が咬合面全面に露出する段階（第6図-3 b¹）と順次咬耗が進行していったものと推定される。

〔c¹系〕

c¹系は頬側咬頭中心に咬耗したと推定され、頬側・舌側咬頭共にほぼ擦り減った段階（第6図-1 c）では咬合面が全面咬耗し頬側咬頭には象牙質が広く露出している。

〔a²系〕

a²系には咬耗の無い段階、頬側咬頭のエナメル質が粒状に咬耗する段階（第6図-12）、頬側咬頭の近・遠心面と舌側咬頭のエナメル質が咬耗し一部象牙質が透けて見える段階（第6図-2 a²）、エナメル質の咬耗が広がり頬側咬頭に点状の象牙質が露出する段階（第6図-3 a²）、咬合面全体が咬耗し頬側咬頭では象牙質が面積を持つ段階（第6図-42）が想定される。

〔b²系〕

b²系では2段階目まではa²系と同様の経過を示すが、次段階では頬側咬頭のエナメル質が粒状に咬耗し、舌側咬頭の近心又は遠心面のエナメル質に広く咬耗が生ずる段階（第6図-2 b²）となる。この段階はa²系の3段階目に似るが、これに比べ頬側咬頭がよく擦り減っている。更に咬耗が進行していくと最後はa²系の最終段階に至ると推定される。

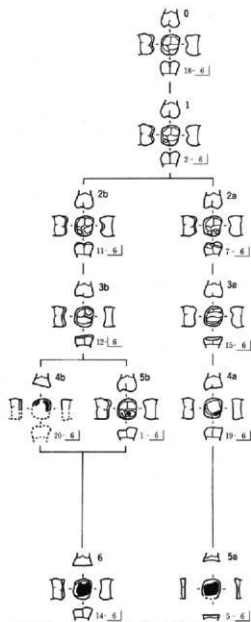
〔a³系〕

a³系では咬耗の無い段階、舌側咬頭の近・遠心面のエナメル質に咬耗の見られる段階（第6図-1 a³）、この近・遠心面のエナメル質の咬耗がつながって頬側咬頭へ延び馬蹄形になる段階（第6図-2 a³）となる。その後は舌側咬頭を中心に咬耗が進むものと推定される。

〔b³系〕

b³系では咬耗の無い段階、頬側・舌側咬頭の近・遠心面のエナメル質の3ヶ所以上が粒状に咬耗する段階（第6図-1 b³）、頬側・舌側咬頭の近・遠心面のエナメル質の咬耗が進行する段階（第6図-2 b³）があり、近心又は遠心の一方を中心に咬耗が進行して頬・舌側双方の咬頭に象牙質が露出するようになるものと思われる。

以上のように、上顎第2小臼歯も上顎第1小臼歯と同様複雑な咬耗経過をたどるようであるが、第1群・第2群・第3群と呼称した3つの群に大別して検討した。これらの群はやはり上顎第1小臼歯同様に歯の対向関係が第1群は一歯対一歯咬合、第3群は一歯対二歯咬合に対応し、第2群は双方の要素が重なったものと判断される。尚、象牙質の出現状況や近・遠心側からの観察によれば、第2・第3群に比し第1群は咬耗の速度が若干速いように思われた。



第7図 上顎第1大臼歯の推定咬耗経過

の咬頭に点状に露出し遠心舌側咬頭が透けて見られる段階（第7図-3b）に至る。

次段階では象牙質の面積が増すが、4ヶ所の咬頭全てに見られる（らしい）もの（第7図-4b）と、舌側咬頭に見られるもの（第7図-5b）がある。更に咬耗が進むと各咬頭の象牙質の露出が広がりエナメル質が「田」字状を呈するようになり、咬頭が滅失して象牙質が近心頬側咬頭部分の頬側寄りと遠心舌側咬頭部分の舌側寄りを除くほとんどを占めるようになる段階（第7図-6）に至るものと推定される。

以上のように、上顎第1大臼歯の咬耗経過は上顎切歯・犬歯に比べるとやや複雑であるが、舌

(6) 上顎第1大臼歯（第7図）

上顎第1大臼歯は33本中30本を使用した。舌側咬頭に咬耗のウェートの置かれる傾向のあるものと、置かれない傾向のものの2系統があり、前者を「a系」、後者を「b系」として咬耗傾向を推定した。

咬耗経過はそれが見られない段階（第7図-0）、舌側近心咬頭のエナメル質に小さな咬耗が認められる段階（第7図-1）があり、ここまではa系・b系同様の咬耗経過を示す。

〔a系〕

3段階目、a系統では舌側近心咬頭のエナメル質部分の咬耗が広がって点状の象牙質が露出（第7図-2a）し、エナメル質の咬耗が舌側遠心咬頭や頬側近・遠心咬頭の咬合面に広がる段階（第7図-3a）、そしてエナメル質の咬耗が頬側近・遠心咬頭を含んで舌側近心咬頭の象牙質の露出が面積を持つようになる段階（第7図-4a）を経て、舌側から象牙質の露出が広がって歯頸部近くまで咬耗が進む段階（第7図-5a）に至る。

〔b系〕

b系の3段階目では舌側近心咬頭のエナメル質の咬耗が広がり舌側遠心咬頭のエナメル質部分にも小さな咬耗が認められる（第7図-2b）。そしてエナメル質部分の咬耗が近心溝付近を除く咬合面に及んで象牙質が近心側

側咬頭を中心に咬耗が進捗するa系と、4個の咬頭の咬耗が概ね均等に進行する2系統に分けて検討した。この2系統がどのような歯の咬合等の条件で生ずるか不明だが、咬頭の擦り減り方がa系はb系に比べ強いようである。

このことについて、筆者はかつて左右側の歯群の歯の対向関係を一歯対一歯咬合・一歯対二歯咬合に分類した際、臼歯でモノを咀嚼する場合左右何れを主に用いているかということについて調査したことがある(石守《1980》)。その結果、一歯対一歯咬合の側に対し一歯対二歯咬合の側の方が主に使用される傾向がかなり高い比率で現れる(双方一歯対二歯咬合の場合は右側、双方一歯対一歯咬合の場合はやや左側が使用される)ことを確認した。この成果と上述したb系に比しa系の咬耗が進行す状況を勘案すると、前者が一歯対二歯咬合、後者が一歯対一歯咬合によって生じた可能性が考えられるのである。

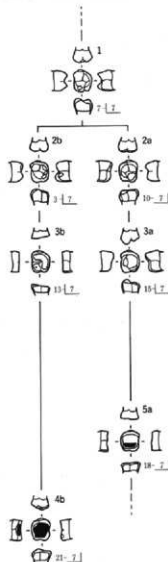
(7) 上顎第2大臼歯 (第8図)

上顎第2大臼歯は30本中25本を使用した。大きくは上顎第1大臼歯と同様、舌側咬頭に咬耗のウェートの置かれる傾向のあるものと、一部に咬耗のウェートが偏るのではなく咬合面全体の咬耗が進行していく傾向のあるものの2系統に分類されるようである。これらは上顎第1大臼歯に倣って前者を「a系」、後者を「b系」として表記した。

さて、今回調査したものの中には咬耗の認められない段階のものは見られなかったが、咬耗の始まった段階のものでは舌側近心咬頭(希に舌側遠心咬頭も含まれるようである)のエナメル質に小さな咬耗が認められる段階(第8図-1)のものがある。この段階までの咬耗の推移は、a系・b系共に同様の経過をたどるものと推定される。

〔a系〕

これに続く2段階目としてa系では、エナメル質の咬耗が舌側近心咬頭では大きくなり、一方舌側遠心咬頭でも小さく認められるようになる段階(第8図-2a)。次いでエナメル質の咬耗が舌側の2つの咬頭全体から頬側の2つの咬頭の舌側寄りの面を含む咬合面の広い範囲に広がる段階(第8図-3a)となり、更に咬耗が進行していくと4つの咬頭が大きく削られてほぼ失われ、舌側寄りの咬合面に大きく象牙質が露出するようになる段階(第8図-4a)へと咬耗が進行していくものと推定される。

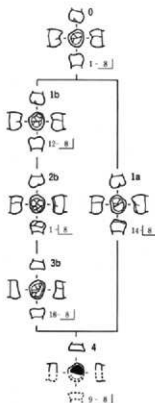


第8図 上顎第2大臼歯推定咬耗経過

[b系]

一方b系の2段階目は頬側の咬頭も含めたそれぞれの咬頭のエナメル質部分に面積を伴う咬耗が見られるようになる段階(第8図-2b)である。そして、舌側近心咬頭から頬側の2つの咬頭に連なる広い範囲と舌側遠心咬頭にエナメル質の咬耗が見られて舌側の2つの咬頭と頬側近心咬頭に点状の象牙質が露出してくる段階(第8図-3b)、更に咬耗が進行して全ての咬頭が大きく削られて順次象牙質が露出してゆき、やがて象牙質が咬合面全体に広がってエナメル質が縁取りをしているように見られるようになる段階(第8図-4b)へと順次咬耗が進行していったものと推定される。

以上のように、上顎第2大臼歯で推定した咬耗経過は上顎第1大臼歯で推定した咬耗経過に近似したものであった。尤も分類した2つの系統については上顎第1大臼歯に見られたように咬耗の進行に差異のようなものを認めることはできなかったのであるが、咬耗の進行の順序や咬耗によって見られるエナメル質の咬耗面の形態、露出した象牙質の形状が上顎第1大臼歯のそれに近似することから上顎第1大臼歯と同様、a系は一歯対一歯咬合、b系は一歯対二歯咬合に伴って現れた可能性が思慮されるのである。



第9図 上顎第3大臼歯
推定咬耗経過

(8) 上顎第3大臼歯 (第9図)

上顎第3大臼歯で調査できたのは僅か11本と少なかったが、その咬耗経過については大きくは上顎第1・第2大臼歯と同様に舌側咬頭に咬耗のウェートの置かれる傾向のあるものと、咬耗が一部に偏るのではなく咬合面全体に咬耗の進行する傾向にあるものの2系統へ分類が可能であると判断されたので、前者を「a系」、後者を「b系」として検討した。

[a系]

a系は咬耗の見られない段階(第9図-0)から、咬耗の進行によって舌側咬頭のエナメル質に広く咬耗による面が形成される段階(第9図-1a)へ進行していったと推定されるが、やがてエナメル質の咬耗が咬合面全体に広がって象牙質が露出してゆき、それに伴って咬頭が磨り減って、最終的には咬耗が歯頸部の近くにまで及んで咬合面のエナメル質は減失して象牙質が多くを占める段階(第9図-4)に至っていくものと推定される。

[b系]

一方b系の咬耗の推移は、咬耗の無い段階から、頬・舌側の近心咬頭のエナメル質部分に小さな咬耗が見られる段階(第9図-1b)へ移り、次に遠心側の咬頭のエナメル質部分にも咬耗が見ら

れる段階（第9図-2b）、更に頬側近心咬頭・舌側近心咬頭が擦り減って近心側の咬耗面が一続きのものとして見られるようになる段階（第9図-3b）へと進行し、やがて咬耗が歯頸部にまで至って象牙質が大きく露出する段階（第9図-4）へと推移していったものと推定される。

以上のように上顎第3大白歯の咬耗は上顎第1大白歯或は第2大白歯に近似した咬耗の経過をたどって進行していったものと推定されるが、その進行の途中段階、特に象牙質の露出していく段階については、第3大白歯の萌出時期が遅いためか上顎第1大白歯・第2大白歯と異なり（凡そ同様の経過をたどったものと想像されるが）把握することはできなかった。

尚、大別した2つの系統については上顎第1大白歯・第2大白歯と同様、歯の対向関係がa系は一歯対一歯咬合、b系は一歯対二歯咬合であることに伴って出現した可能性があるのではないかと考えている。

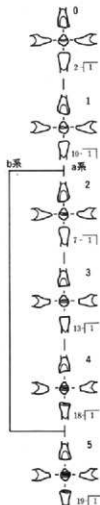
(9) 下顎中切歯（第10図）

下顎中切歯は27本中20本を使用して検討を行った。検討に使用できた例数は他の歯種に比べてやや少ないものではあったが、以下のように凡その咬耗経過を推定することができた。

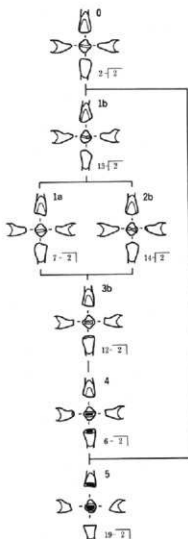
下顎中切歯にはまず咬耗の認められない段階（第10図-0）のものがあり、次に咬耗が進行した最初の段階としてエナメル質の一部に咬耗の認められるもの（第10図-1）がある。更にエナメル質の咬耗が切端全体に見られるようになる段階（第10図-2）のものの、切端全体に広がったエナメル質の咬耗の一部に点又は短い糸状に象牙質が露出してくる段階（第10図-3）のものがあり、象牙質の露出に幅が出て面積を持つようになってくる段階（第10図-4）のものへと進行して、やがてエナメル質の縁取りを伴う象牙質が切端のほとんどを占めるようになる段階（第10図-5）へ推移していったものと推定される。

以上のように下顎中切歯の咬耗は、大きくは上顎中切歯・側切歯と同様の咬耗経過、即ち咬耗は切端側から歯根方向に順次進行していったものと推定されるのである。

さて上述の咬耗経過は上顎中切歯に做えば「a系」に当たるものであるが、下顎中切歯にはこれとは別に「b系」、即ち上顎の切歯と同様に辺縁隆線の形態が咬耗によって生ずる面に（「カスガイ状」或は「釘抜き状」を呈して）現れるものも認められた。これらについては、恐らく咬耗の早い段階から上述のものとは分かれて咬耗が進行したのと考えられるが、一方その咬耗の経過については上述のものと同様の経過をたどって進行していったものと推定される。



第10図 下顎中切歯
推定咬耗経過



第11図 下顎側切歯の推定咬耗経過

(10) 下顎側切歯 (第11図)

下顎側切歯は25本中20本を使用して検討を行った。これも下顎中切歯と同様あまり例数は多くなかったが、一定の咬耗経過を推定することはできた。

下顎側切歯には2段階目から4段階目にかけて、切端から垂直方向に咬耗の進行するものと、やや斜め方向から咬耗の進行するものが認められた。前者をa系、後者をb系として以下に示す。

[a系]

a系の咬耗はまず咬耗の無い段階(第11図-0)のものから進行し、恐らくは前後に中間段階を挟んで、切端の全面にエナメル質の露出する段階(第11図-1a)のものへ移行したと考えられる。この際、唇・舌方向から見た切端のラインは「一」形を呈する。その後、咬耗の進捗に伴って象牙質が露出し、後述するa系・b系共通の咬耗経過をだとしていくものと推定される。

[b系]

b系の咬耗も咬耗の無い段階から進行して、遠心側のエナメル質に咬耗の見られる段階(第11図-1b)へと推移する。この時の唇・舌方向から見た切端のラインは「へ」字形を呈する。次に遠心側、近心側のエナメル質に咬耗の見られる段階(第11図-2b)となる。この時の唇・舌方向から見た切端のシルエットは弱い山形を呈する。そして、切端のエナメル質の咬耗が一続きのものとなって中に象牙質が糸状に見られる段階(第11図-3b)に至る。

[a系・b系]

以後の咬耗経過はa・b系共通に推移し、糸状に現れた象牙質が幅を持つようになる段階(第11図-4)、エナメル質の縁取りを伴って象牙質が切端の多くを占めるようになる段階(第11図-5)へと推移していったものと推定される。

以上のように下顎側切歯には切端に垂直に咬耗の進行するa系と、斜め方向に進行するb系が認められた。この相違については歯の対向関係に起因し、前者は一歯対一歯咬合、後者は一歯対二歯咬合によるものではないかと思われる。

尚、咬耗の経過段階についてはa系・b系共近似し、下顎中切歯の経過に準拠するが、下顎中切歯と同様に辺縁隆線の形態が咬耗面の形態に反映する一系も認められた。

⑪ 下顎犬歯 (第12図)

下顎犬歯は、38本中33本を使用して検討を行った。下顎犬歯は咬頭に対し垂直に咬耗の進行する系統のものと、斜め方向に進行するものの2系統に大別され、前者を「a系」、後者を「b系」として以下記載する。

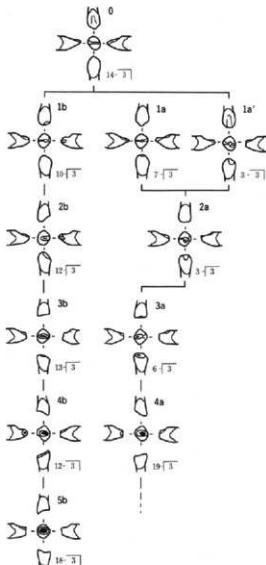
「a系」

a系は咬耗の見られない段階のもの (第12図-0) から、咬頭のエナメル質に粒状の咬耗の見られる段階 (第12図-1 a) となる。この段階では希に唇側面のエナメル質部分に咬耗の見られるケース (第12図-1 a') もある。次段階ではエナメル質部分の咬耗が面積を増し、この中に点状の象牙質の見られるようになり (第12図-2 a)、この象牙質が面積を持つようになる段階 (第12図-3 a)、象牙質の面積が咬耗面の過半を占めるようになる段階 (第12図-4 a) を経て、咬耗が歯冠の半分程まで達して象牙質が広く露出し、エナメル質がそれを縁どるように見られるようになる段階に至るものと推定される。

「b系」

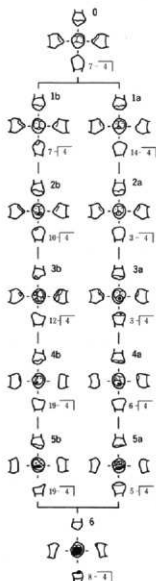
b系は咬耗の見られない段階から、咬頭の遠心面のエナメル質に方形状の小さな咬耗が見られる段階 (第12図-1 b)、エナメル質の咬耗が広がって中に糸状の象牙質が認められる段階 (第12図-2 b)、象牙質の面積が広がって「⊥」状を呈する段階 (第12図-3 b)、前段階にやや似るが前段階に比し象牙質の厚みが増す段階 (第12図-4 b)、咬耗が進捗しエナメル質が縁取りをなすようになって象牙質が広く露出する段階 (第12図-5 b) へと咬耗が順次進行していったと考えられる。

以上のように下顎犬歯の咬耗状態は、咬頭に対して垂直方向に進行していくa系と、咬頭に対し斜め方向に進行していくb系の2種に大別された。それぞれの咬耗の状態を比較すると後者が前者に対しややその進行の度合いが強いようである。これらは上顎犬歯と同様、a系は一歯対一歯咬合、b系は一歯対二歯咬合という歯の対向関係によって形成されていったものと考えられる。



第12図 下顎犬歯の推定咬耗経過

(記号は第6図参照)



第13図 下顎第1小白歯
の推定咬耗経過

頭では点状をなす段階(第13図-4 b)、頬側の咬頭が滅失してエナメル質の咬耗が舌側咬頭の全域に広がり、象牙質の露出が頬側咬頭では広がり舌側咬頭では小円状をなすようになる段階(第13図-5 b)へと推移し、a系の7段階目(第13図-6)に至るものと推定される。

以上のように下顎第1小白歯は下顎犬歯と同様にa系とb系に大別して検討を進めた。それぞれの咬耗の状態を比較すると、頬側咬頭の象牙質の露出はa系の方が強いのであるが、咬耗の範囲(面積)を勘案するとb系の方がやや咬耗の進行の度合は強いように感じられる。a系・b系は下顎犬歯と同じく、歯の対向関係が前者は一歯対一歯咬合、後者は一歯対二歯咬合であることによって生じていったものと想定される。

(12) 下顎第1小白歯(第13図)

下顎第1小白歯は42本中38本を使用して検討を行った。下顎第1小白歯も下顎犬歯と同様、咬頭に対し垂直に咬耗の進行するものと、斜め方向に進行するものの2系統に分かれる。これらについては下顎犬歯と同様に、前者を「a系」、後者を「b系」として以下に記したい。

【a系】

a系の咬耗は咬耗の認められない段階(第13図-0)から、頬側咬頭のエナメル質部分に粒状の咬耗が認められる段階(第13図-1 a)、頬側咬頭のエナメル質の咬耗が広がりその中央に点状に象牙質の露出する段階(第13図-2 a)、象牙質の露出が面積を持つように広がる段階(第13図-3 a)、頬側咬頭が失われて小円状に象牙質が露出する段階(第13図-4 a)、頬側咬頭に於ける象牙質の占める面積が広がってその過半を占め、舌側咬頭のエナメル質部分にも咬耗が見られるようになる段階(第13図-5 a)へと推移し、更に咬耗が進むとb系との差が無くなって頬側咬頭から舌側咬頭の咬合面にかけて象牙質が露出する段階(第13図-6)へと至るものと推定される。

【b系】

b系の咬耗は咬耗の見られない段階から、頬側遠心咬頭のやや頬側面寄りのエナメル質部分に小さな咬耗面が見られる段階(第13図-1 b)、頬側咬頭の近心面のエナメル質にも咬耗面が見られるようになる段階(第13図-2 b)、頬側咬頭の遠心側のエナメル質に対する咬耗が進行して点状の象牙質が見られるようになる段階(第13図-3 b)、エナメル質の咬耗が舌側咬頭の咬合面にも広がって象牙質の露出が頬側咬頭では円形、舌側咬

(13) 下顎第2小白歯 (第14図)

下顎第2小白歯は35本中33本を使用して検討を行った。下顎第2小白歯も下顎第1小白歯と同様咬耗が咬頭に対し垂直に進行するものと、斜めに進行する系統のもの大別され、前者を「a系」、後者を「b系」とした。

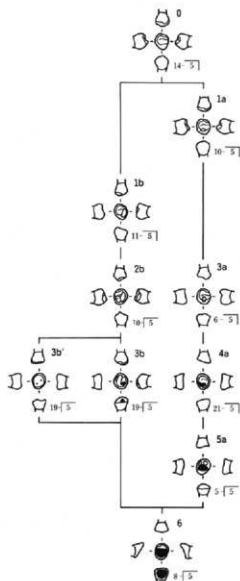
[a系]

a系の咬耗は咬耗の認められない段階 (第14図—0) から、頬側咬頭に粒状のエナメル質の見られる段階 (第14図—1 a)、頬側咬頭のエナメル質の咬耗が広がり、その中に点状の象牙質が現れる段階 (第14図—2 a)、エナメル質の咬耗が舌側咬頭にまで広がって頬側咬頭の象牙質の露出が面積を持つようになる段階 (第14図—4 a)、象牙質の露出範囲が中心溝を越える段階 (第14図—5 a) となり、更に象牙質の露出が咬合面の2/3程度に達して頬側咬頭の位置あたりではエナメル質が外皮状に見られるようになる段階 (第14図—6) へと進んでいったものと推定される。

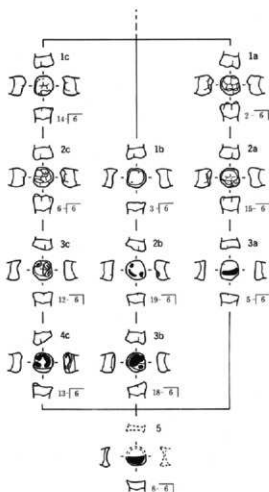
[b系]

b系では咬耗の見られない段階から頬側及び舌側咬頭の近心または遠心側の一方の面のエナメル質部分に咬耗の広がる段階 (第14図—1 b) となり、エナメル質の咬耗が頬側・舌側咬頭の近・遠両側に見られるようになって、その一方に象牙質が点状に露出する段階 (第14図—2 b)、エナメル質の咬耗が咬合面全体に及んで頬側咬頭の象牙質の露出が小円状 (第14図—3 b)、希に頬側咬頭と舌側咬頭部分に点状に現れる (第14図—3 b') 段階、頬側咬頭がほぼ失われて象牙質が面積を伴って露出するようになり、a系の7段階目 (第14図—6) へ推移するものと推定される。

以上のように、下顎第2小白歯の咬耗は下顎第1小白歯と近似した咬耗状況をたどるものと推定されるが、分類したa系・b系は下顎第1小白歯と同様にそれぞれ一歯対一歯咬合、一歯対二歯咬合という歯の対向関係によってもたらされたものと理解される。頬・舌方向から見た咬合面のシルエットは当然のこと乍らa系では台地形、b系では山形を呈する。尚、a系・b系の咬耗の度合の差異は下顎第1小白歯とは異なって明確ではなかった。



第14図 下顎第2小白歯の推定咬耗経過



第15図 下顎第1大臼歯の推定咬耗経過
(記号は第6図参照)

広く咬耗して幾つかの咬頭に点状の象牙質の露出する段階(第15図-1b)、頬側の咬頭と舌側の1カ所の咬頭に象牙質が面積を持って露出する段階(第15図-2b)、象牙質の露出が咬合面全体に広がっていく段階(第15図-3b)へと推移し、更にa系の4段階目の状態(第15図-5)へと進行していったと推定される。

[c系]

c系では咬耗の見られない段階から舌側の咬頭のエナメル質部分に咬耗が認められる段階(第15図-1c)、舌側の咬頭に点状の象牙質が露出して頬側の咬頭のエナメル質に咬耗が現れる段階(第15図-2c)、舌側を中心とする咬頭の象牙質の露出が面積を持つようになる段階(第15図-3c)を経て、a系の4段階目の状態(第15図-5)へと進行していったと考えられる。

以上のように下顎第1大臼歯の咬耗は早い段階から咬合面全体に及ぶためか、他の歯種に比べてその咬耗経過の細分化が難しい状況にあった。下顎第1大臼歯の咬耗経過についてはそのウェー

04 下顎第1大臼歯(第15図)

下顎第1大臼歯は40本中38本を使用した。下顎第1大臼歯の咬耗は咬合面全体に対して進行してゆくが、この際頬側にウェートの置かれるものと、舌側咬耗に置かれるもの、及び一方に偏らない凡そ3系統があり、以下前者を「a系」、中者を「c系」、後者を「b系」として以下その概要を述べる。[a系]

a系は咬耗の無い段階から頬側近心・頬側遠心咬頭頂部のエナメル質部分に咬耗の見える段階(第15図-1a)、エナメル質の咬耗が広がって象牙質が薄く透過して見えるか点状に露出してくる段階(第15図-2a)、象牙質の露出が頬側の咬頭をつなぐように広く露出する段階(第15図-3a)へと至り、最後に咬耗が歯頸部に近付いて象牙質の露出が咬頭全体に及び、エナメル質が外皮状に見られるに過ぎなくなる段階(第15図-5)へと推移していったと考えられる。

[b系]

b系では咬耗の無い段階から咬合面全体に咬耗が進行して、咬合面のエナメル質が

トの置かれる状況によって a・b・c の 3 系統に分類してその推移を検討したのであるが、前者に対し中・後者は象牙質の露出範囲等でやや近似した咬耗の進行状態を示すものと思われ、主たる咬耗の範囲の検討から、歯の対向関係については前者は一歯対一歯咬合、中・後者は一歯対二歯咬合に関連付けられるのではないかと思慮される。尚、主に使用される咬頭についてだけ見れば 3 者の間の咬耗の度合には、著しい差は認められなかった。

(15) 下顎第 2 大白歯 (第 16 図)

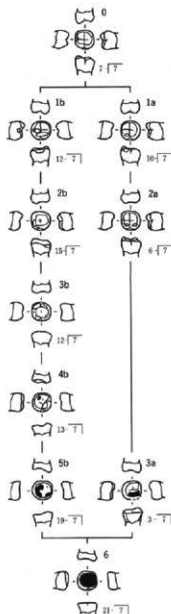
下顎第 2 大白歯は 31 本中 29 本を使用して検討を行った。下顎第 2 大白歯の咬耗は頬側の咬頭にウェートが置かれるものと、咬合面全体が均質的に咬耗していくものの 2 系統に大別される。以下前者を a 系、後者を b 系として推定される咬耗の推移を概述したい。

[a 系]

a 系は咬耗のない段階 (第 16 図-0) から頬側近心咬頭のエナメル質部分に咬耗の見える段階 (第 16 図-1 a)、頬側近心咬頭の外に頬側遠心咬頭のエナメル質部分にも咬耗の見える段階 (第 16 図-2 a) に至る。やがて咬耗が進行していくと咬頭のエナメル質の咬耗面に象牙質が露出して順次その面積を増し、エナメル質の咬耗が咬合面全体に及んで頬側近心咬頭・頬側遠心咬頭の位置に広く象牙質が露出する段階 (第 16 図-3 a) に及び、咬合面全体に広く象牙質が現れてエナメル質が外皮状に見られるように過ぎなくなる段階 (第 16 図-6) に至るものと推定される。

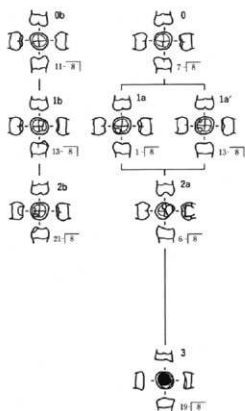
[b 系]

b 系は咬耗のない段階から、頬側近心咬頭から頬側遠心咬頭にかけての範囲と咬合面の一部のエナメル質部分に咬耗の見える段階 (第 16 図-1 b)、エナメル質の咬耗が咬合面全体に及ぶ段階 (第 16 図-2 b)、更に何箇所かの咬頭に点状の象牙質の露出してくる段階 (第 16 図-3 b)、この象牙質の露出の範囲が広がってくる段階 (第 16 図-4 b)、象牙質の露出が 4 つの咬頭すべてに認められ、幾つかの咬頭では広く露出してくる段階 (第 16 図-5 b) へと順次推移して行き、最後に a 系の 4 段階目に示したように咬合面全体を象牙質が覆うようになる段階 (第 16 図-6) に至ったものと推定される。



第 16 図 下顎第 2 大白歯
推定咬耗経過

以上のように下顎第2大白歯はa・b2系統に分類して、その咬耗の推移を検討してきた。これらは下顎第1大白歯に比しバラエティーには乏しいが概ね似たような咬耗経過を示し、a系は下顎第1大白歯のa系、b系は同じくb系・c系に近似するものと思われる。従って歯の対向関係についてはa系は一歯対一歯咬合、b系は一歯対二歯咬合に関連付けられるのではないと思われるのである。



第17図 下顎第3大白歯の推定咬耗経過

(46) 下顎第3大白歯 (第17図)

下顎第3大白歯は16本中15本を使用して検討を行った。下顎第3大白歯はその萌出状況により、通常の萌出状況を示す「a系」と、近心傾斜を呈する「b系」に分類しその咬耗経過の検討した。

〔a系〕

a系では咬耗の見られない段階(第17図-0 a)から、頬側遠心咬頭(第17図-1 a)或は頬側遠心・舌側遠心咬頭(第17図-1 a')のエナメル質に小さな咬耗の見られる段階のもの、エナメル質の咬耗が広がった段階(第17図-2 a)のものがあり、更に咬耗が進行すると象牙質が咬合面全体に露出して、エナメル質が外皮状に見られるに過ぎなくなる段階に至るものと推定される。

〔b系〕

b系では咬耗の見られない段階(第17図-0 b)から、遠心面のエナメル質に咬耗の見られる段階(第17図-1 b)、このエナメル質の咬耗面に点状の象牙質の露出する段階(第17図-2 b)へと推移していったと推定される。

以上のように下顎第3大白歯の咬耗状況はその萌出状況により通常の萌出状況を示すa系と近心傾斜を呈するb系の2系統に分類して咬耗経過を検討した。検討した例数が少ないので詳細を述べることはできないが、a系では下顎第2大白歯のb系に近似した咬耗経過を示しているように思われる。しかしその咬耗状況は咬合面全体に及ぶものとも言いきれず、一歯対二歯咬合、一歯対一歯咬合という歯の対向関係による影響を余り受けなかったのではないと思われる。

また、b系に於いては咬耗の箇所は咬合面ではなく近心面の上位であるが、エナメル質の咬耗、点状の象牙質の露出という臼歯の咬頭に見られたと同様の咬耗経過をたどるもののようである。しかしその状況は早い段階のものに限られている。

4 咬耗経過・段階の標準化

以上、室町時代～江戸時代のものを中心とする出土人歯の観察を通して推定される咬耗の変遷をまとめてみた。細かく見ていくと、それぞれの歯種の咬耗状況には個体差があり一律なものではないことを改めて認識したのであるが、特に上顎小白歯はかなり多様な状況を呈していて咀嚼の状況や咬耗の経過が多様であり、或は大きな差のあったことが分かる。しかし一方で（当然のことであるが）エナメル質の咬耗がその一部から広い範囲に広がり、これに伴って象牙質の露出面積が徐々に広がっていくという咬耗の進行程度と、切端や尖頭或は咬頭に対する咬耗の進行方向、そして臼歯に於いては頬側・舌側の2群（個）の咬頭に於ける咬耗状況の組み合わせといった要素を勘案して各歯種の咬耗経過をそれぞれ一定のパターンとして想定できたのである。

さて各歯種の咬耗パターン、即ち上述し図示してきた各歯種の咬耗経過は、同一個体に於ける組み合わせや年齢といった要素を無視して歯そのものの形態やエナメル質に於ける咬耗による面の形、そして象牙質の露出状況や形状等の比較によって経過を想定し、並べていったものであった。ある意味でそれは考古学で言う形式学的分類に当たる作業であったが、次に推定される咬耗経過を——例えて言うなら層位的な分類作業、或は編年作業に当たるものとして——個体毎のまとまりといった要素に戻して検討してみたいと思う。

検討に当たっては検討し易いように、まず細かい個体差のような要素を排除し、咬耗状況を標準化しようと考えた。その際、上下顎の切歯、犬歯、上顎の小白歯、大白歯、下顎の小白歯、大白歯の6グループ毎に分類基準を推定することとした。これは個々の歯種の咬耗経過を比較してまとめていった場合、上述の6グループに凡そまとめることができたためであるが、この6グループについて咬耗経過をまとめていったものが第2表—1・2・3と第3表—4・5・6に示した分類基準である。これらの表は機械的に設定したため、上述した個々の歯種の推定経過に合致しないものや、検討に使用した人歯に例の無いものもある。尚、咬耗度を示す記号についてはできるだけ統一的に標記したいと考え、上述の6グループを示す記号

上下顎切歯…………… I	上下顎犬歯…………… C	上顎小白歯…………… P u
下顎小白歯…………… P l	上顎大白歯…………… M u	下顎大白歯…………… M l

に、切端・尖頭または最も咬耗の進行する咬頭に於ける咬耗の程度を示す記号

エナメル質に咬耗の見られないもの……………	0度
エナメル質の一部が咬耗するもの……………	1度
エナメル質が全体的に咬耗するもの……………	2度
象牙質が糸状又は点状に露出するもの……………	3度
象牙質の露出が面積を持って来るもの……………	4度
象牙質の露出がその過半を越えるもの……………	5度（切歯では4度）
象牙質がほとんどを占めエナメル質が 外皮状を呈するようになる段階のもの……………	6度（切歯では5度）

1. 上・下顎切歯

a系（咬耗が尖頭に対し垂直方向に進行する）		b系（咬耗が尖頭に対し斜め方向に進行する）	
咬耗度	咬 耗 の 程 度	咬耗度	咬 耗 の 程 度
I0度	咬耗の見られない段階		
I1a度	切端中央寄りのエナメル質の一部が咬耗する。舌側面に咬耗の見られるものもある。	I1b度	切端片側寄りのエナメル質の一部が咬耗する
I2a度	切端の咬耗面平でエナメル質の全体が咬耗する	I2b度	切端の咬耗面屋根形でエナメル質全体が咬耗する
I3a度	切端の咬耗面平らで糸状に象牙質露出	I3b度	切端の咬耗面は屋根形で糸状に象牙質露出
I4度	象牙質が幅を有するようになるが頬側・舌側のエナメル質と象牙質の厚みは同様になる		
I5度	象牙質の幅が更に広がって咬耗面のほとんどを占め、エナメル質は外皮状になる		

2. 上・下顎犬歯

a系（咬耗が尖頭に対し垂直方向に進行する）		b系（咬耗が尖頭に対し斜め方向に進行する）	
咬耗度	咬 耗 の 程 度	咬耗度	咬 耗 の 程 度
C0度	咬耗の見られない段階		
C1a度	咬頭頂部のエナメル質に粒状の咬耗が現れる	C1b度	咬頭の近・遠心側のエナメル質に粒状の咬耗出現
C2a度	エナメル質の咬耗が広がり、上顎犬歯は舌側面、下顎犬歯は頬側面に見られるものもある	C2b度	エナメル質の咬耗広がって尖頭付近でつながり、上顎は舌側面、下顎は頬側面に現れるものもある
C3a度	尖頭部の中央付近に平面形が点状の象牙質露出する	C3b度	尖頭部の偏った位置を中心に点又は線状に象牙質露出する
C4a度	尖頭部中央の象牙質が面積を持ち、平面的には小円または棒状を呈する	C4b度	象牙質が面積を持ち、平面的には小円状を呈する
C5a度	象牙質が咬耗面の1/2程度に広がり、平面的には逆三角形又は棒状を呈する	C5b度	C5a度に似るが、象牙質の平面形が円形を呈する
C6a度	平面的に菱形又は短冊形を呈する象牙質が咬耗面のほとんどを占めエナメル質は外皮状となる	C6b度	C6a度に似るが、象牙質は円形を基本とする形態を示す

3. 上顎小臼歯

a系（対向関係が一歯対一歯咬合）		b系（a系・c系の中間形態）		c系（対向関係が一歯対二歯咬合）	
咬耗度	咬 耗 の 程 度	咬耗度	咬 耗 の 程 度	咬耗度	咬 耗 の 程 度
Pu0度	咬耗の見られない段階				
Pu1a度	舌側咬頭のエナメル質に粒状の咬耗現れる	Pu1b度	頬側咬頭のエナメル質に粒状の咬耗現れる	Pu1c度	頬側・舌側咬頭の一方又は双方の近・遠面のエナメル質に粒状の咬耗現れる
Pu2a度	舌側咬頭のエナメル質の咬耗が広がり頬側咬頭のエナメル質が咬耗するものもある	Pu2b度	エナメル質の咬耗が頬側咬頭で広がり舌側咬頭の近心又は遠心に現れるものもある	Pu2c度	頬側・舌側咬頭の近・遠心の広い範囲のエナメル質に咬耗広がる
Pu3a度	頬側・舌側咬頭のエナメル質の咬耗広がりは一続きとなり、頬側・舌側咬頭の一方又は双方に象牙質点状に露出	Pu3b度	エナメル質の咬耗が頬側・舌側咬頭に及び、その一方または双方に点状の象牙質が露出する		
Pu4a度	頬側・舌側咬頭又は一方の咬頭に於いて象牙質が面積を持つようになる	Pu4b度	頬側咬頭の象牙質が面積を以て露出し、舌側咬頭の咬耗はエナメル質に止まって屋根状を呈する		
Pu5a度	象牙質が咬耗面全体の広い範囲、又は一方の咬頭の過半で露出するようになる	Pu5b度	象牙質が頬側咬頭の過半と舌側咬頭の近・遠心寄りに面積を以て露出する		
Pu6a度	象牙質が咬耗面のほとんどを占め、エナメル質が外皮状にのみ見られるようになる				

第2表 仮設定の咬耗度分類表（その1）

を付し、これに上下顎の切歯、犬歯、小臼歯では切端や咬頭等に対する咬耗の進行方向により

垂直方向に咬耗の進行するもの…………… a

斜め方向に咬耗の進行するもの…………… b（上顎小臼歯ではc）

（上顎小臼歯に於けるその中間系…………… b）、

上下顎の大臼歯に於いては主たる咬耗の範囲や位置により

4. 下顎小臼歯

a 系 (咬頭に対し垂直方向に咬耗が進行する)		b 系 (咬頭に対し斜め方向に咬耗が進行する)	
咬耗度	咬 耗 の 程 度	咬耗度	咬 耗 の 程 度
P10度	咬耗の見られない段階		
P11a度	頬側咬頭頂部のエナメル質に粒状の咬耗が見られるが、頬側面に現れる場合もある。	P11b度	頬側咬頭の近心面又は遠心面のエナメル質部分に粒状の咬耗が見られる
P12a度	頬側咬頭頂部又は頬側面のエナメル質咬耗が面積を持つてくる段階。	P12b度	頬側咬頭の咬耗が近・遠心面両側又は一方に見られて面積を持つ
P13a度	頬側咬頭頂部のエナメル質の咬耗範囲中に点状の象牙質が露出する	P13b度	エナメル質の咬耗が近・遠心面から舌側咬頭に広がり、頬側咬頭では近心又は遠心寄りの位置に象牙質が点状に露出する
P14a度	頬側咬頭頂部の象牙質の露出が面積を持つ	P14b度	頬側咬頭の近心又は遠心寄りの位置にあって象牙質が面積を持つ
P15a度	頬側咬頭は滅失して広く象牙質が露出し舌側咬頭の近・遠心面のエナメル質に小さな咬耗が見られる	P15b度	咬合面のエナメル質部分の咬耗は凡そ一続きのとなり、象牙質は頬側咬頭で広く露出し、舌側咬頭に於いても露出することがある
P16度	頬側寄りを中心に咬合面の過半の範囲に象牙質が半円状に露出する		

5. 上顎大白歯

a 系 (咬耗のウェイトが舌側に置かれる)		b 系 (咬耗が咬合面全体に進行する)	
咬耗度	咬 耗 の 程 度	咬耗度	咬 耗 の 程 度
Mu0度	咬耗の見られない段階		
Mu1度	舌側近心咬頭のエナメル質部分に咬耗現れる		
Mu2a度	エナメル質の咬耗が舌側で進み面積を増すが、咬耗の進んだ段階では象牙質が通過して見える	Mu2b度	エナメル質の咬耗が頬側の咬頭に広がるが、咬の進んだ段階では象牙質が通過して見える
Mu3a度	エナメル質の咬耗は咬合面全体に広がり、舌側の咬頭がほぼ失われ象牙質点状に露出する	Mu3b度	4 側の咬頭がほぼ失われエナメル質の咬耗が咬合面全体に及び、頬側と舌側の双方または一方の咬頭に点状に象牙質が露出する
Mu4a度	舌側の咬頭の象牙質の露出が面積を持つようになる	Mu4b度	頬側と舌側の双方または一方咬頭に露出した象牙質が面積を持つようになる
Mu5a度	咬合面の舌側寄り部分に広く象牙質が露出し、頬側の咬頭部分に点状に象牙質が露出することもある	Mu5b度	各咬頭部分に象牙質が広く露出し、咬合面に於ける象牙質の露出面積がその過半を越える
Mu6度	咬合面のほとんどを象牙質が占めるようになり、エナメル質はその周囲に見られるに過ぎない		

6. 下顎大白歯

a 系 (咬耗のウェイトが頬側に置かれる)		b 系 (咬耗が咬合面全体に進行する)		c 系 (近心傾斜するもの)	
咬耗度	咬 耗 の 程 度	咬耗度	咬 耗 の 程 度	咬耗度	咬 耗 の 程 度
Mi0度	咬耗の見られない段階				
Mi1a度	頬側の咬頭の頂部のエナメル質に粒状の咬耗が見られる	Mi1b度	全ての又は頬側又は舌側の咬頭のエナメル質に粒状の咬耗現れる	Mi1c度	遠心面と咬合面の境付近のエナメル質粒状に咬耗する
Mi2a度	頬側咬頭に現れたエナメル質の咬耗範囲が面積を持つ	Mi2b度	全ての又は頬側又は舌側何れかの咬頭のエナメル質が広範囲に咬耗	Mi2c度	Mi1c度のエナメル質の咬耗が広がる
Mi3a度	エナメル質の咬耗は咬合面に広がるが特に頬側の咬頭に強く、点状に象牙質が露出する	Mi3b度	エナメル質の咬耗は咬合面全体に概ね均質に広がり、頬・舌間わず象牙質が点または線状に露出	Mi3c度	Mi2c度のエナメル質の咬耗面中に点状に象牙質露出
Mi4a度	頬側咬頭の象牙質の露出が面積を持つようになる	Mi4b度	頬側及び舌側の咬頭の象牙質の露出が面積を持つ		
Mi5a度	全ての咬頭の咬耗が進むが特に頬側の咬頭に象牙質が広く露出する	Mi5b度	頬側・舌側に拘わらず咬頭の部分に広く象牙質が露出する		
Mi6度	咬合面全体に象牙質が露出しエナメル質はその周囲に見られるに過ぎない				

第3表 仮設定した咬耗度分類表 (その2)

No.	道跡名 遺構No.	上顎 下顎	右側								左側									
			8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8		
			8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8		
《数字+アルファベット:咬耗程度; \:歯槽閉鎖; -:判定不能; 未記入:欠落等》																				
1	奥原古墳群 14号古墳		Mu0	Mu1	Mu2a	Pu1c	Pu1c	C3b				I1b	I0b	C2a	Pu2c	Pu2c	Mu2b	Mu3b	Mu2b	
2	田端遺跡寺東 地区3号墓壇				Mu1	乳歯	乳歯	乳歯			I0	I0			乳歯	乳歯	Mu0			
3	田端遺跡寺東 地区6号墓壇				M11a	乳歯	乳歯	—	I0	I0	I0	I0	乳歯	乳歯	乳歯	M11a				
4	田端遺跡寺東 地区60号土坑				Mu2a	Mu4a	Pu2b	Pu2b	C5a	I1b			I4		Pu3a	Pu3a	Mu4a	Mu0		
					M15a	M14a		P14a	C4a					C3a	P13a	P13a	M13b			
5	大八木遺跡 4号土坑				Mu6	Pu6	Pu6	C6a	I4				I2a							
6	三ツ寺II遺跡 3区2号土坑				—	—	—								P15b	P15b	Mu5a	Mu4b		
								Pu0	C3a	I3a	I1		I3a	C4a	Pu2a					
7	三ツ寺II遺跡 3区3号土坑				M11a		P13a	P14a	C2a				I4a	C4b	P14a	P12a	M13b	M11a	M11c	
								Mu3a	Pu2c	Pu2b	C2a	I2b	I1b	I1a	I0	C0	Pu0	Pu1a	Mu3a	Mu2a
8	鳥羽遺跡 SZ13号墓壇				M12a	P12a	P12a	C3a	I2b	I3a	I3b	I1a	C1a	P10	P11a	M13a	M10	M10		
					—	M16	P16								P16	P16				
9	鳥羽遺跡 SZ14号墓壇		Mu6	Mu6		Pu5a	Pu5a	C6b	I4	I4	I0	I5								
10	鳥羽遺跡 I区SZ2墓壇				Mu2b	Mu3b	Pu2c	Pu2c	C1b											
			M10	M11b	M13a	P10	P11b	C1b		I1b					C1b	P12b	P13b	M12a	M11a	
11	鳥羽遺跡 I区SZ5墓壇		Mu6	Mu6		Pu4a	Pu4a	C6b	I5	I5	I0	I5								
			M10	M12a		M12b														

※奥原古墳群14号墳は7世紀

※寺東遺跡6号土坑の乳歯(上顎乳犬歯、上下顎の第1・第2乳臼歯)の咬耗はC3a・Mu3a~Mu4a・M13bに相当

第4表 出土人歯の咬耗度(その1)

上顎では舌側、下顎では頬側の咬頭に咬耗のウェートのあるもの…………… a

咬合面全体に咬耗の進行するもの…………… b

下顎に於いて歯の萌出が近心傾斜するもの…………… c

を加えたもので標記するようにした。尚、後2者のうち記号「a」で示されるものは歯の対向関係が一歯対一歯咬合、記号「b」(上顎小臼歯では「c」)で示すものは一歯対二歯咬合に起因するものと想定している。

5 同一歯種内に於ける咬耗度について

上に述べた咬耗度は今回の調査に当たって用意したものである。これは或る1冊の発掘調査報告書に於いて示される遺物の型式分類に似たものであって、こうした型式分類が一般的にその遺跡の出土遺物を対象とし、その分類項目が別の遺跡(報告書)にまたがって使用されることを想定していないと同様に、恒常的な使用は想定していない。さて次に、これを使って出土人歯について考古学上の層位学研究と同様の検討を試みたいと思うが、まず実測図に相当する調査表の

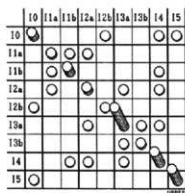
No	遺跡名 遺構No	上顎 下顎	右側								左側								
			8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	
			8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	
《数字+アルファベット：咬耗程度：\：歯槽閉鎖：-：判定不能：未記入：欠落等》																			
12	島羽遺跡 K区SZ2墓墳1	Mu2b	Mu2a		Pu3bc				C3b		I3a				Pu2c	Pu3bc			
			M12b	M13b								-	I3b	C3b	P13b	P13b	M14b	M13b	M10
13	島羽遺跡 K区SZ2墓墳2	M12c	M14b	M15b	P15b	P14b	C5b				I3a	I3a	C6a	Pu3bc	Pu3a	Mu6	Mu5b		
			-	Mu6	-	Pu3bc	C2b	-	-			I1b	C2	Pu1a	-	Mu2b	-		
14	国分寺中間 B区102号坑						P12a	C0	I1b	I2a	I2a	I3b	C3b	P11a	P11b	Mu2b	Mu2a		
			Mu2b	Mu2b	Mu2b	Pu1c				I1a	I2a	I3a	I2a	C4b	Pu2a	Pu1c		Mu2b	Mu7a
15	国分寺中間 C区12号土坑	M12b	M12b	M13a	P10	P11a	C3b	I3a	I3a	I3a	I3a	C3b	P11a	P12a	M13b	M12b			
			-	Mu4a	-			C5b	-	-	-	I5	-						
16	国分寺中間 C区13号土坑														P14b	P13b	P12b		
17	国分寺中間 C区16号土坑	Mu1	-	Mu5a	Pu4a		C2b	I3a	I3a	I4	I3a	C6a			P13b	Mu2b	Mu4b		
					M16	P15b	P15b	C6a	I3a		I4	I4	C6a	P16	P15b				
18	国分寺中間 C区34号土坑			Mu5a													Mu5a		P12c
			-	M15b	P12b	P14a	C4b	I4			I4	I4	C6a	P14a	P12a	M14b			
19	国分寺中間 D区5号土坑			Mu2b	Mu3b		Pu4a	C5a	I5	I5	I5	I5	C6a	Pu3bc	Pu2c	Mu3a	Mu2b		
			M12b	M15b	M15b	P14b	P15b	C5a	I5	I5	I5	I5	C6b	P14b	P13b	M15b	M14b	M14b	
20	国分寺中間 G区1号土坑			-	Mu4b	Pu5b	Pu5b	-	I1b		I2a	I1b	C4b						
21	有馬条里遺跡 FS区SD2号溝			Mu6	Mu6	Pu3bc	Pu2c												
				M16	M14b	PL4b	P14b									P13b	P14b	M15b	M15b
22	大島上城遺跡 2号墓墳					Pu6	Pu6								Pu1a	-	-		

※有馬条里遺跡は弥生時代後期

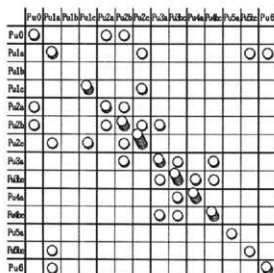
第5表 出土人歯の咬耗度（その2）

記録に対して（遺物型式のようなものである）咬耗度を与えた。前頁の第4表と上の第5表はその一部を示したものである。これを概観すると、同一個体内のそれぞれの歯の数字で示した咬耗程度は一定ではなく、その差については最大6度の開きのあるものもあった。しかし、全体としては2度（±1度）程度の差の中で収まるものが多いようである。咬耗程度の差については、最初に生後5～6年での第1大臼歯の萌出に始まり第2大臼歯は生後12～15年で萌出（第3大臼歯は18～25才の間に萌出）するといった永久歯の萌出時期に差のある（鈴木《1974》）ことが考えられ、全体として且つ大雑把に見た場合にはそうした傾向が認められる。しかし後述するように咬耗程度は萌出時期に比例して機械的に進行するものではなく、例えば大臼歯の咬耗は他の歯種に対して進行の速度が早いようである。

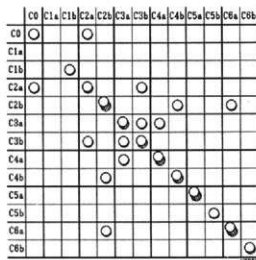
さて永久歯は左・右側の歯を合わせると16の歯種にまとめることができるが、この16の歯種それぞれについて前項に示した咬耗度を与え、この歯種毎に関連付けられた咬耗度を足し上げると16歯種全体で186になる。この歯種に関連付けられた186の咬耗度一つ一つについて、個体毎の出土人歯に照らして合致するものがあれば、それを含む同一個体の歯群について歯種と咬耗度をカウントしていったものを検討のためのデータとして用意した。



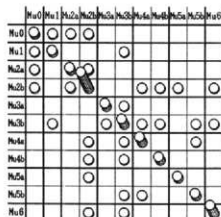
OFFICE



10ポイント
 5ポイント
 1ポイント



OFFICE



第18図 同一歯種内に於ける咬耗状況の組み合わせ（上顎）

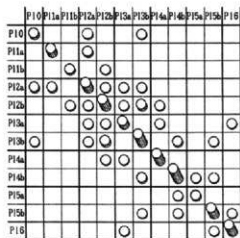
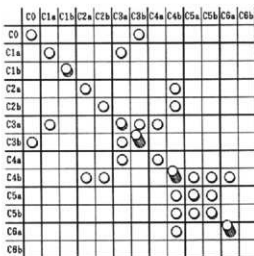
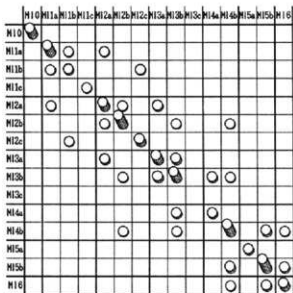
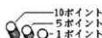
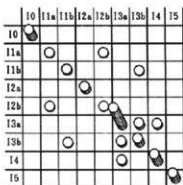
左上：上顎切歯

右上：上顎小白歯

左下：上顎犬歯

右下：上顎大臼歯

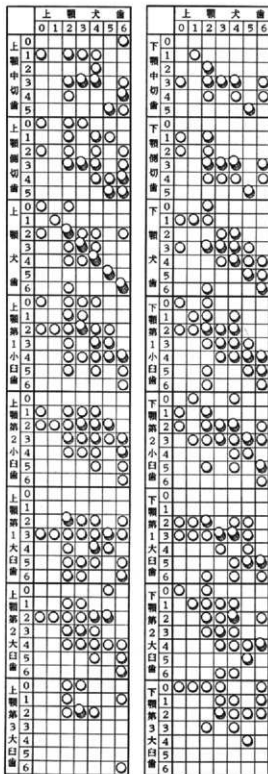
このデータを基に以下若干の検討を試みることにするが、初めに同一個体内に於ける左右反対側の同一歯種の咬耗度との組み合わせについて見てみたい。個々の歯種に於ける左右の咬耗度の組み合わせは上・下顎ともに切歯、犬歯、小白歯、大臼歯のグループ毎に同様の傾向を示す。上の第18図と次頁の第19図はグループ毎にその状況を示したものであるが、全体として同一個体内に含まれる同一歯種の咬耗度には予想以上に広い範囲の組み合わせのあることが分かる。図中の太線に囲まれた部分は数字によって示される同一の咬耗程度を示すものであり、この点を勘案しても幅広い範囲の咬耗度同士の組み合わせのあることが分かるが、その中であって上顎の切歯と大臼歯にその傾向が強く現れ、一方下顎の大臼歯に於いてその傾向は弱くバラツキが少ない。



第19図 同一歯種内に於ける咬耗状況の組み合わせ (下顎)

左上：下顎切歯 右上：下顎犬歯 左下：下顎犬歯 右下：下顎小臼歯

また、咬耗度の標記に a・b・c を付したものは歯の対向関係が一歯対一歯咬合または一歯対二歯咬合に対応するものと推定してきた。これについて筆者は前者・後者双方を有する場合、臼歯でモノを咀嚼するには主に後者が使用されるという調査結果(石守《1980》⁽⁶⁾)を持っていたので、同一個体内の咬耗に於いては後者がより咬耗が進むのではないかと予測していた。しかし、第18・19図に見られるように概ね a 系・b 系(c 系)に特段の差異は認められなかった。従ってこれらは咬耗状況に面積的、或は形態的な差異を生じさせるものの、数字で示した(その歯の中で最も進行した部分の)咬耗程度には差異を生じさせないものと判断されるのである。



第20図 上顎犬歯と各歯種の咬耗程度の組み合わせ

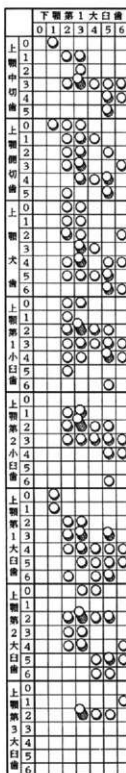
6 異なる歯種に於ける咬耗度の関係

次に異なる歯種のそれぞれの咬耗度同士の関係について見てみたい。同一歯種内に於ける咬耗傾向の把握のし辛さはそのまま異なる歯種との関係に於いても反映し、結論から言えば明瞭な相関関係を把握することはできなかった。しかし若干の傾向を窺うことはできたので、上顎犬歯と（最も早く萌出する）下顎第1大臼歯を例として、異なる歯種の間に見られる関係について述べてみたいと思う。尚、上述したように同一歯種内でのa・b・cを付した咬耗状況は数字で示した咬耗度の中で特段の差異は認められなかったので、以下数字による咬耗度を軸としてその状況を示したい。

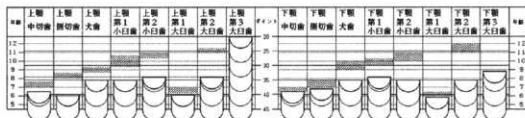
上顎犬歯は異なる歯種同士の関係を最も規則性を以て示している。繰り返すがそれは明瞭なものではないが同じ咬耗度の比較では、上顎の中切歯では上顎犬歯に対して同等か1段階程早く進行する傾向にある。側切歯では同等か1～2段階程、小臼歯は1～2段階程度遅れるようであるが第1小臼歯の方が第2小臼歯より若干早いようである。第1大臼歯は1～3段階程度、第2大臼歯は上顎犬歯の2段階程からは同等程度、第3大臼歯（智歯）では2段階程度遅く進行する。一方下顎に於いては切歯で同等か1段階程度早く、犬歯でほぼ同等、第1小臼歯では同等か1段階程、第2小臼歯では1段階程遅い進行状況を見せ、第1大臼歯は2段階程早く咬耗が始まるものの上顎犬歯の2段階程からは同等の進行状況で、第2大臼歯は1～2段階程遅く進行して、第3大臼歯も同様の傾向を示す。

次に下顎第1大白歯を機軸に見てみたい。
第21図に示したように下顎第1大白歯の0
度段階で出現する他の歯種は無く、続く1
度段階では上・下顎の切歯と第1大白歯、
第2段階ではそれ以外の歯種が出現して来
ている。その後の経過は上・下顎の切歯で
は下顎第1大白歯の3度段階で逆転し最終
的には1段階程度早く、上顎犬歯と上顎第
1大白歯では4～5度段階で逆転しやはり
1段階程度早く咬耗が進行し、上顎第2大白
歯も同様の経過をたどるものと推定される。
また上顎の小白歯では2段階遅く、下顎
犬歯では3度以降は同等の咬耗経過を辿る。
下顎の小白歯と第2大白歯では当初は2段
階遅れるが、最終的には1段階遅れの遅れ
を以て進行するようである。

こうした所見はあくまで上顎犬歯と下顎
第1大白歯を機軸としたもので、他の歯種
での所見に必ずしも適合するものではない。
しかし少なくとも歯種によって咬耗のスピー
ドの異なることなど一定の傾向を窺うこと
はできたように思う。次頁の第22図は16の
歯種について他の歯種に対して現れる段階
が0度の時は3ポイント、1度で2ポイン
ト、2で1ポイントをそれぞれ与えていつ
たものと、各歯種の萌出時期（斎藤（1970）⁷⁾）との関係を示したものであるが、早い
段階での咬耗の進行状況やスピードの相違
についてその傾向を示している。即ち上下
顎共に中切歯から第1小白歯までは萌出年
令に概ね比例しているが、第2小白歯から
第2大白歯の間では、それに拘わりなく咬
耗が進行していく様子が窺われるのである。



第21図 下顎第1大白歯と各歯種の咬耗程度の組み合わせ



第22図 各歯種の咬耗度に対する咬耗開始段階(半円柱)と萌出時期(斜線網)との関係

7 おわりに

以上述べてきたように室町時代～江戸時代を中心とする出土人歯(永久歯)にはそれぞれの歯種毎に、恐らくは歯の対向関係の影響によると思われる2～3系統の咬耗経過が想定でき、一方咬耗の段階はこうしたものに拘わらず、その歯の最も咬耗の進行した切端、尖頭或は咬頭の状況によって判断できるらしいことが分かった。残念乍ら今回の調査では各歯種間の咬耗経過の相關関係や年齢との関係は特定できなかったが、年齢については歯の萌出時期と上下顎の第2小臼歯や大臼歯が他の歯種に対して早いといった歯種による咬耗の進行速度の違いによって或る程度左右されるらしいことが分かり、少なくとも中世以前の英国人の咬耗程度(Brothwell《1972》)に比べれば現代人に近い状況にあることが判断されるのである。これらについては今後調査資料を増やしていくことによって或る程度の所見は得られるだろうと考えている。

筆者はかつて東京歯科大学法歯学教室の鈴木和男先生はじめ同教室の先生方へ人歯の識別等について手ほどきを受けて以来、人歯に興味を持ち、職場に於いても何回か出土人歯に接する機会を与えられてきた。そうした中で冒頭に述べたように出土人歯の咬耗に関する今回の調査を企画したのである。しかし本稿を起したことは使用資料数も少ない段階で、且つ筆者のような門外漢が行うには無謀なことであり、また人骨や人歯を専門とする人達にとっては当たり前のことを述べてきたに過ぎないのかも知れない。しかし本稿が考古学サイドの人間が出土人歯を見る際の視点の一つとなり、出土人歯の取り扱いなどに多少なりとも役立てばと思うのである。

最後になるが、資料調査に当たっては聖マリアンヌ医科大学第2解剖学教室の森本岩太郎先生(現赤十字看護大学教授)、吉田俊爾先生初め同教室の皆様にも様々なご便宜・ご協力を賜り、新田町教育委員会及び小宮俊久様にも種々お世話戴いた。ここに記して感謝申し上げます。

〔本稿は平成5年度文部省科学研究費補助金(奨励研究B)による成果の一部である〕

註

- (1) 古畑雄基・山本勝一「歯科法医学」(1963)引用の、鈴木和男「法歯学」(1974) 89頁による。
- (2) 天野十郎「歯牙に関する法医学的研究」『日本法医学雑誌 第5巻 第5號別冊』1951 181頁
- (3) 鈴木和男「法歯学」(1974) 89頁。
- (4) 藤田恒太郎 著・桐野忠大 改訂「歯の解剖学」第21版 掲載の各歯種の図をモデルに作成した。
- (5) 鈴木和男「法歯学」(1974) 87頁。
- (6) 石守 晃「利き顎と一歯対一歯咬合及び一歯対二歯咬合についての一調査」『感応寺址』小田原市教育委員会 1982
- (7) (5)・87頁。原本は斎藤恭助「永久歯萌出時期の上下顎各歯種間における相互関係に関する統計的研究」『歯科学報』70巻 12号 (1970)
- (8) D.R. Brothwell「Digging up Bones」(1972) 68～69。第1・第2・第3大臼歯について咬耗パターンと年齢との関係が示されているが、Martinの咬耗度で与えられている年齢に対し概ね15歳～25歳程度咬耗の進行が早いようである。

研究紀要 13

平成 8 年 3 月 22 日発行

編 集
発 行

財団 群馬県埋蔵文化財調査事業団
法人
群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
☎ (0279) 52-2511

印 刷 朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社

BULLETIN OF THE GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION

XIII

CONTENTS

Clay Figurines of Gunma Prefecture in the Jomon Period

—Their Changes and Local Features—

.....by FUJIMAKI Yukio, ISHIZAKA Shigeru(1)

The Pottery Taken Away It's Decoration

—The case study of the desused pottery in the middle Jomon period—

.....by DOI Takashi NAKAMARU Kohji YAMAGUCHI Toshihiro ...

An Aspect of the Formation of the Chieftain's Mounded Tomb in the Kofun Period

—The Trends in the Imai-jinja Mounded Tomb and the Settlements Surrounding
It in Maebashi City, Gunma Prefecture—

.....by SAKAGUCHI Hajime.....

A Basic Study of the Spindle Wheel(1)

—With a Focus on Gunma Prefecture Area—

.....by NAKAZAWA Satoru(81)

Regarding the Condition of Dental Attrition of Excavated Human Teeth in Gunma Prefecture

—An Essay of Permanent teeth on Muromachi and Edo period—

.....by ISHIMORI Akira(127)

01-350 / 6 / 13(5)



0135000060001300 05



財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION

Mar. 1996